

るのは國民として非常に不幸である。けれども流石佛蘭西人も此勝負は一度は得られなければ二度とは繰返せない事を知つて居る。だから獨逸が何時頭を擡げるか知れぬを恐れて、今のうちに押へ附けて二度と起てぬやうにしなければならぬと思つて居る。是が戦後の經濟的恢復を妨げる第一の原因をなして居る。獨逸の方も佛蘭西が左様いふ風に向つて來るから、甚だ宜しからぬ事を考へるやうになつて居る。其外英吉利でも澳地利でも伊太利でも度合こそ違ふが戦争前とは事異なり、四海同胞の念が薄らいで常に猜疑心恐怖心に充されて居る。殊に英吉利は戦争前は世界中到る所其權威を認められざる所がない、押しも押されぬ國であつたが、今日に於ては其權威は薄らいでしまつて表面は兎も角も、今日の時局に處しては亞米利加の好意を失つては大變だから、努めて亞米利加の御機嫌を取つて居る。併し本當に心服して居るのではない。英吉利は佛蘭西に對しても、亞米利加に對しても深い疑惧の念を持つて居る。此疑惧の念が即ち日英同盟の廢棄となつたのである。少しでも亞米利加人に疑を起させる事をしてはならぬ。英吉利に取つては日英同盟は既に役の済んだ殘骸である、其殘骸の爲に日本に引摺

られて、少しでも亞米利加に疑を掛けられてはならぬと云ふ所から、糟糠の妻を蹴飛ばしてしまつたのである。日本は體裁が悪いから、色々負惜しみを言つて居るが、日本は實は廢める積りはなかつたのである。ツヒ此間まで日英同盟の誼に依てなどと言つて居つたものである。私は日英同盟の様な馬鹿なものは早く拋棄してしまへ、どうせ追い出されるなら早い方が宜いと言ふ事を始終言つて居つた。日英同盟の誼に依つて對獨宣戰をしたとか何とか彼とか大隈内閣等は誇つて居るが、其日英同盟は事もなく蹴飛ばされたでないか。憲政會でも政友會でも日英同盟の誼と言ふ事を口辯のやうに言ふが、其同盟の誼と言ふのは向が要らなくなる時には蹴飛ばされる程度の誼であつたのである。そんなものが何んで當てになるものか。亞米利加に對する疑惧心で亞米利加に氣象をするとなれば弊履の如く捨てられる。所がそれよりも更に甚しい疑惧心は、聯合諸國が寄つてたかつて獨逸に對して持つ疑惧心、更に奥深くは露西亞に對する疑惧心である。獨逸は今に頭を擡げて來る時には、勝利の竹筥返しをするか分らぬ、酒を飲まして痺れ藥で寝かしつけたものは、何時酒が醒めて暴れ出すか分らぬ、是が恐い。而して其奥には露西

亞のポルシェヴキズムがある肉を抉り取つてしまへなどと言つて居るポルシェヴキズムがある、是が恐い。鈍感なる日本の政治家迄も恐がつて、社會運動取締法案などを拵へよとか何とか言つて居るが、日本はそんな事をする必要はない、一人や二人金を貰つて宣傳ビラの一萬や二萬撒いた所がどうなるものか。日本人はそんなケチなものではない。そんな事で日本國の基礎はどうなるものではない。どうかなるだらうと思つてあはてくさるのは、矢張恐露病、恐獨病に犯されて居るからである。英吉利や佛蘭西や亞米利加の意氣地のない人々に感染し、此世界風に罹つたものである。そんな事ではいかぬ、日本は日本の獨特の地位に立つて、そんな馬鹿々々しい風などを引かぬやうに、寧ろ世界をより健全にする爲に努力しなければならぬ。

五

世界の經濟的恢復に當つては、亞米利加と日本が、今までのやり方がいけないと云ふことをスツカリ悟らなければならぬ。此意味に於て日本は、英吉利のやうに亞米利加の御

機嫌を取るまでには至らないでも、踏ふれても叩かれても決して亞米利加と戰爭をしてはいかぬ、英吉利とは仕方がなければやつても宜い、けれども亞米利加とは決して戰爭すべからず、どんな侮辱を受けてもやつてはいかぬ。戰爭前は陸軍は露西亞に備へる爲に必要であつたが、今日は露西亞の方は心配はない、もう餘り要らぬ。海軍は多く亞米利加に對して使ふ爲に必要であつたと言はれるが、今日亞米利加と戰つたらどうであるか、戦には勝つとしても經濟上の打撃は非常なものになる。然るに亞米利加に取つては經濟上の打撃は殆どない、亞米利加は日本と經濟的交渉がなくても困らぬ。日本では亞米利加との交渉がなくなるとどうなるか、火の消えたやうになるに相違ない。一體日本は維新以來餘り亞米利加にばかり偏して居つたのが間違である。亞米利加へは賣り好いと云つて亞米利加へのみ偏して居つたのは馬鹿な話である。また他方に於ては、買ふのは高い物でもまづい物でも英吉利から買ふ、英吉利の物よりも良い品物が外の國に在つても、それは買はないで英吉利から買ふ。英吉利の物でなければならぬと云ふ事が頭に在るのだから仕方がない。其結果外の國の商業の事は餘り知らぬ、佛蘭西の商業の事も獨

逸の商業の事も知らぬ、此頃は獨逸では馬克が下つて居るから、獨逸の品物を買つて日本へ持つて來れば儲かるに定まつて居るが、何を買つて居るか、むかうでは賣りたがつて賣りたがつてウヅウヅして居るのに買ひに行かぬ。何故買はぬかと云ふと爲替尻が合はぬと言ふ。爲替尻が合はぬなら日本の金を遣れば宜いが、さうすると倫敦で押へられるから片爲替になると言ふ。倫敦を通さなければ商賣が出来ぬと云ふ意氣地のない人を稱けて日本の商人と謂ふ。日本の物を賣らうと思へば亞米利加より外にはない、支那も少しはあるが……それだから亞米利加とはどうしても戦争が出来ない、斷じて出来ない、何とか中將は日米開戦論を主張されて居ると云ふ話であるが、軍人の方から言へば痛快で宜いかも知れぬ。戦争があれば勳章が貰へたり爵が附いたり金も貰へたりするから宜いだらうが、國民こそ迷惑斷じていかぬ。それで亞米利加と戦争をしないと云ふ大決心を持つて軍の大擴張などは全く問題にならぬ。亞米利加と戦争をしないと云ふ大決心を持つて掛れば、日本はどん／＼亞米利加と共に世界の經濟的恢復の爲に盡せる、盡さうと思へば盡せる。日本には其決心がないが、亞米利加人には大分さう云ふ決心がある。殊にヴァ

ンダーリップ氏等は非常に熱心に誠心誠意圖つて居る。亞米利加人にも誠心誠意の人は澤山ある、ヴァンダーリップ氏等も金儲け一點張りかと云ふとなか／＼さうではない。歐羅巴の經濟的恢復の爲に非常に努力して居る。今日世界を救ふ者は基督教でもない、禁酒運動でもない、佛教でもない、經濟的恢復である、萬事は其上の事である。

今日の世界は經濟的に疲弊して居る、斯の如き有様に於て何の平和があらうか何の文化があらうか。ありとあらゆる智慧を絞り、ありとあらゆる材能を擧げて世界の經濟的恢復に貢献しなければならぬ。其世界の經濟的恢復の具體的方法を考へ出して、それが兎に角一の成案になつたのは亞米利加人にも非ず、況んや日本人でもない、微々たる和蘭の人、和蘭人の考案である。和蘭は此度の戦争には局外に立つて居つたから、冷靜なる判斷も出来る、又多少他國を救ひ得る地位にもあるが、如何せんあんな小さな國であるから、獨力では出来ない、然し智慧だけは出して居る。それは、テルミウレン案と謂ふのである、テルミウレン案はブルユツセルの國際經濟會議に於て解決された、國際經濟會議は各國から旅費を使つて委員を出して評議したけれども、小田原評定に終つて無駄飯を食つた、

唯テルミウレン案を通したただけである。所が今度ジェネヴァで國際經濟會議をやることになつても亞米利加は加はらぬと言ふ。世界の經濟的恢復は亞米利加が加入せずしては、到底出來ない相談である。トコロが、亞米利加は國際經濟會議に参加すれば出すばかりで取る事はないから逃げ度がるのは無理はない。四五人集つて何所かへ飲みに行かうと言ふ、誰か金を持つて居るかと言ふ、皆素寒貧誰も持つて居ない、結局自分が拂はせられる事になる、亞米利加がさうである。各國共皆亞米利加を狙つて居る。國際經濟會議などと云ふけれども皆素寒貧、日本が入れば幾らか出せる和蘭なども幾らか出せるが大體亞米利加の懐が當てであるから、どうしても亞米利加が入つて呉れなければならぬ、幾ら寄つてたかつても旅費だけ損だ、巴里會議の時西園寺さんが行つたのもさうである。何も態々出掛けるにも及ばぬ、華盛頓會議もさうである、皆旅費ばかり損をして居る。國際經濟會議國際勞働會議もさうである。行く時は大騒ぎをしたが、會議が終ると決議した事を少しも實行しない、勞働大使の鎌田さんは果して私の評した様に大膽茶大使となつて呑んこのしやあである。今度日本が經濟會議に加はるならば日本の案テルミウレ

ン案以上の案を持つて行かなければならぬ。

六

テルミウレン案と云ふのは、各國の輸出と輸入を成るだけ出合せるやうにしやうと云ふ一種の貿易救濟案である。ヴェルサイユ會議は無用なる小さい國を澤山拵へた、唯獨立したいと云ふと獨立させて小さい國を澤山拵へたが、今日それが爲め非常に困つて居る。國は出來たがどうしてそれを立てゝ行かうか維持して行かうかに就いて各國の政治家は困つて居る。テルミウレン案は幾らかそれを救はうと云ふのである。是等の國が經濟上の恢復をしやうとしても外の國から輸入をしなければならぬ、又輸出もしなければならぬ。所が今の國際經濟關係では輸入も出來ない輸出も出來ない、金融の出合がない。殊に東歐諸國に取つては輸入が肝要である。戰爭の爲に物資を皆使つてしまつたから物資を供給して貰ひたいのである。併し物資の供給を受けてもそれを拂ふ金がない。貸して呉れゝば追々濟しくづしは出來るけれども信用がない。其信用を國際聯

盟の力で與へやうと云ふのが右の案である。

國際聯盟の力で、是等の小さな國をして出来るだけ財産を提供せしめて、それを債券として貸し付けてやる。政府は此貸附を受けて之を融通して金を拵へるなり、或は自國の商人で輸入したいと云ふ者に之を交付して、彼等をして之に依つて輸入品の對外の支拂をやらせる。政府はテル・ミウレン案によつて發行する證券を貰つて輸出商に渡す、輸出商は一時それを代價として受取つて置いて、一方に輸出があり一方に輸入があるから大部分は出合ふことになる。結局輸入超過になれば超過分だけ一時立替へれば宜い。國際貿易は何所でも輸入と輸出と段々出合ふやうになつて居る、唯出合はない帳尻だけを現金を以てやつたり取つたりする。此帳尻の決済場所が英吉利のロムバードストリートであつた。所が今は其作用が大分出來ないやうになつて居る、唯出合はない帳尻だけを現うになつたが、まだ新しいものであるからとても戦争前のロムバードストリートのやつた様な譯には行かぬ。是から段々發達して、來ればロムバードストリートの様になるだらうがまださうは行かぬ。さう云ふ譯で戦争前に於ける金融の中心は壞されてしまつ

た。兎に角世界中のあらゆる國際間の經濟關係と云ふものは、英吉利のロムバードストリートへ行きさへすれば、何とか彼とか出合が附くことになつて居つたがそれが打壞された。是を元の通りに還すと云ふことは容易には出來ぬ。テル・ミウレン案も實を言へばロムバードストリートのやつて居つた仕事の一部分をやるに云ふのである。それを一國では出來ぬから國際聯盟の力でやらうと言ふのである。まだ實行されない案は出來てやることになつては居るけれども實行が出來ない。

何故實行されぬかと云ふと國際聯盟其ものが駄目だからである。方々から委員を集めて聯盟事務局などを拵らへて、條約ばかり澤山出來たけれども何も出來ない、肝腎かなめの亞米利加が入つて居らぬからである。夫でテル・ミウレン案を巧くやらうと思へば亞米利加や日本が入らなければならぬ。日本は入る積りではあらう、積りがなくても例の通り外國の言ふことは何でもハイ／＼と言つて居る國だから日本は問題にならぬ。矢張り亞米利加の加入が大問題である。亞米利加の懐が當てなのである。亞米利加から金を引出さなくては出來ない、其信用が必要である。是は國際貿易を幾らか滑かにす

ると云ふのであるが、是が出来てもそれは國際聯盟の認めた國と其證券に於て認められた金額だけに限るのであるから、世界全體の經濟的恢復などはとても出来ぬ。少くとも巴爾幹諸邦に對しては出来るとしても、其巴爾幹諸邦の旗頭であつて經濟的恢復の必要急なのは、埃地利である。其埃地利は、ヴェルサイユ條約に依つて殆ど國の財源全部を賠償金に取去れる事になつて居る。テル・ミウレン案を實行した所が其れによつて發行する證券に對して提供すべき財産がないから何にもならぬ。そこで巴爾幹諸邦の旗頭で、小さくなつたけれどもまだ一番大きい埃地利を何とかしなければならぬ。

埃地利に對してはテル・ミウレン案では十分に救済は出来ない。モット進んで積極的に金を貸すか、或は賠償金をまけてやるか、此二つのどちらかにしなければならぬが、埃地利に對して金を貸すとか賠償金を負るとか云ふ問題は、獨逸と引離す事は出来ぬ。埃地利に許せば獨逸にも許さなければならぬ、其れには賠償金の始末が問題となる。最近佛蘭西は非常に歳計に不足を生じて居るが、對内的の必要上數字の上では獨逸から償金が取れる事にして歳計の辻褄を合せて居る。チャント合つて居るのではないが甚しく跋

にならぬやうに製造してある。然し佛蘭西の政治家と雖も、あの決定した多額の賠償金が本當に獨逸から取れるとは思はぬ。併しそれが入る勘定にして置かなければ豫算は成立せず、國民に安心を與へる事が出来ないから、取れる事にして國民を瞞着して置く。獨逸も經濟的に破産した埃地利も破産した、佛蘭西は戦には勝つたと言つて居る。けれども實は勝つて負けて居る。佛蘭西の豫算はどんなエライ財政家があつてもとても立たない。埃地利も獨逸も巴爾幹諸邦も救はなければならぬけれども、救ふと云ふならば手近な佛蘭西から救はなければならぬ。所が佛蘭西の救済は勝つた者に對する救済であるから頭を下げさせる譯にはいかぬ、それで事がむづかしい。又た國民的自尊心が強い、唯さへ虚榮心の強い鼻づ柱の強い國民であるのに、勝つたと言つて一層虚榮心を煽られて居るからむづかしい、最も捷徑としては佛蘭西に革命が起つて、今の勝つて居る軍國政府を引くり返してしまへば宜いように考へるものもあるけれども、其の飛ばつちりて世界が迷惑するから努めて防遏しなければならぬ。さう云ふ事を防遏して兎に角今の政府でやらうと云ふには、佛蘭西が右の様に無理な豫算を立てなければならぬ必要

を除去してやらなければならぬ、その爲めには佛蘭西の借金をまけてやらなければならぬのである。

佛蘭西政府は大變借金を持つて居るが其の借金は大部分は佛蘭西の國民から借りて居るのである。國民から借りて居る借金は此れに當る丈の金額を佛國民から取つて返すより外に道はない。國民から税を取つて其税を公債所有者に對して、或は元金として或は利息として返す外はないのである。従つて、國民全體としては出す入らずであつて、唯だ右から取つたものを左へやるのである。併し出す入らずと云ふのは金高の上だけであつて、是れが爲めに佛蘭西の經濟組織を攪亂することを免れない。何故ならば佛蘭西國民は非常に愛國心が強いから、あらゆる階級が公債の募集に應じたに相違ない。然しそれは人數の上だけで、金高から言へば金持の方が大部分を占めて居る。貧乏人が幾ら寄つた所が大した金高にはならない。之れに反して金持は一人で何十萬法と云ふ程應募して居る。従つて、政府が公債の元金なり利息なりを償還すると、其大部分は金持の方へ取られてしまふ、數の上では國民の多數に散らばる事になるが、金高に於ては大部

分金持の方へ取られてしまふ。トコロが、公債の支拂は何で辨ずるかと云へばそれは税で辨ずる。税は國民全體から取る、寧ろ金持でない方が多い。即ち多數の貧乏人からチリ／＼と税を取つて、其大部分は金持の所へやつてしまふ事になる。戰爭前でさへ貧富が平均しないと喧しかつた所へ、公債元利の償還の爲に一層其不平均を大にする。貧しい者に煙草の税とか酒の税とか色々の税がかかる、税はあらゆる階級に掛かつて来る。殆ど餘す所がない位に絞り取つて、それを撒くのであるが、大勢の所へ少し撒くのであるからどうしても金持の方へ廻つてしまふ、取る方は遠慮なく取つて、撒く時には皆金持の方へやつてしまふ。是は佛蘭西の社會を險惡ならしめる一原因となる外はない。

佛蘭西も初は國民から借金をしてやつたけれども、愛國心が幾らあると言つても無いものはどうすることも出来ない、矢張り外國から借りることになつた。其外債の額は、磅にして擧げてあるのを見ると、亞米利加に對して五億五千萬磅、英吉利に對して五億八百萬磅、二口合訓で十億五千八百萬磅の外債がある。其外日本からも借りて居る、是れは壹億參百萬圓、是が皆未償還である、一文も拂つて居らぬ、之を先づどうかしてやらなければ

ばならぬ利息をどうかしてやる、元金をどうかしてやるとかしなればならぬ。所が佛蘭西に對する貸金を亞米利加がどうかしてやる、英吉利もどうかしてやる、と云ふと外の國も黙つて居らぬ。伊太利も白耳義も借りて居る、セルヴキアもチエツコスロヴァキアも皆借りて居る、何所の國も皆借金がある。而して其旗頭は英吉利の亞米利加に對する八億四千貳百萬磅の借金である。

七

そこで起つて來る問題は、戰爭の爲に各國が借りた借金の始末を一齊にどうして道を附けるかと云ふ事である。借りたものだから利息を拂はなければならぬのであるが、それがとても出來ぬ話である。それをしようとするれば經濟的恢復はどうしても出來ない。何時までも現状のまゝで、ズル／＼人民を塗炭の苦しみに陥れて行かなければならぬ。思切つて荒療治をするとか何とか根本的方法を考へなければならぬ。そこで根本的の解決案を考へたのが英國の代表者大藏大臣の代理として平和會議に臨んだケーンズ

と云ふ學者である。此人は年は未だ若いが非常に頭腦の良い人で、大藏大臣の代理となつて、各國の大家を相手に取つて色々折衝した結果、どうしても此儘ではいかぬ、借金の問題をどうかしなればならぬと云ふ事を考へて書物を書いた。是は英吉利でも非常に評判になり、殊に對手の獨逸では之を翻譯して何萬と云ふ人に讀まれた。其案はどう云ふのかと云ふと、互に貸借を帳消しにしてしまふ、貸した者は貸放し、借りた者は借放しにする、と云ふのである。大變亂暴のやうだけれども、能く考へて見ると決して亂暴ではない。各國の借金高は英吉利が八億四千萬磅、佛蘭西が十億五千八百萬磅、伊太利が八億二千七百萬磅、露西亞が七億六千六百萬磅、白耳義が二億六千六百萬磅、セルヴキアとチエツコスロヴァキアは合計で一千萬磅、其外の小ツボケな國を皆合せた額が一億、千幾で、合計すると三十九億九千五百萬磅、ザツト四十億萬磅の借金がある。貸した方では英吉利と亞米利加と佛蘭西で云ふと、英吉利が十七億四千萬磅、佛蘭西の貸高が合計三億五千五百萬磅、是は伊太利露西亞、白耳義、チエツコスロヴァキア、セルヴキアに貸してあるのである。亞米利加は借金一つもなく、貸高が十九億磅ある。今貸借を帳消しにすると、亞

米利加は十九億磅みすく損する事となるが、外の國は貸してもある借りても居るから、損をするものもあれば得をするものもあるわけで、英吉利の如きは殆どトントンになる。佛蘭西は餘程まけて貰ふことになる。佛蘭西は借高が十億五千八百萬磅で貸高が三億五千五百萬磅であるから、六億磅ばかりの儲けになる。佛蘭西は一番荒されたのだから、聯合國から餘程力を出してやらなければならぬ。けれども聯合國はお互に出せないから何れも亞米利加の懐を當てにする。英吉利は疲弊もしたけれども、自分の國で戰爭をしたのではない、財力も豊だからトントンが適當である。兎に角亞米利加が十九億磅の借金を、スツカリ綺麗に、男らしく棒を引いて呉れば問題は解決する。ケーンズ氏が右の案を公けにしたときは學者の愚論だと謂はれたけれども、輿論はだんく之れを妥當と認めるようになった。佛蘭西は自分の國が借金で堪らぬから、獨逸に對して取れもせぬ賠償金を拂へやと云ふて居る。獨逸では拂はうと思つても今は出来ない。無論合理的に要求されれば拂はうと思つて居る、出来るものを拂はぬやうなケチな考は持つて居らぬ。どうしても出来ないものをよこせといふので遊つて居るのである。昔は軍國

主義とか何とか謂はれたが、今日の獨逸は國際的には決して嘘をつかぬ、露西亞が一番嘘をつかないが其次は獨逸である、殊に戰爭の後始末に就ては嘘をついて居らぬ。獨逸は精一パイやつて居る。それで出来ないものであるから佛蘭西は獨逸を責める權利はないのであるが、自國の借金が片が付かないから無理に獨逸を責めるのである。自分の借金を催促される、自分も友達に少しばかり融通してある、それは取れるものとは思はぬけれども、自分の貸主に向つては實は其爲に友達に催促をしたのだけれども、友達の方も國から爲替が來ないから少し待つて呉れと云ふ事であつたから、あなたの方も少しまつて呉れと言ふが如きものである。

そこで佛蘭西を第一に救つて、世界的經濟の行詰りを解決しやうと云ふには、亞米利加に對して借金をまけて貰ふか、まけて貰へなければ利息を全然まけて貰ふ、まると利息をまけて貰へなければホンの名義だけの利息にして貰ふ、兎に角亞米利加にウント肌を脱いで貰はなければ歐羅巴の經濟的恢復は出來ず、隨つて世界の經濟的恢復が出來ないのである。近頃米國のヴァンダーリップは歐羅巴へ行つて視察した結果、亞米利加が力

を藉すに非ずんば歐羅巴の經濟的恢復は出來ぬと云ふことを亞米利加の同胞に懇へて
What next in Europe? と題する本を公けにした。氏の考もケーンズ案に餘程近い。

亞米利加は十九億と云ふ貸金をまけた所が、取れぬ者が取れぬだけの事である。戦争の爲に何所が一番儲けたかと云ふに亞米利加が一番儲けて居る、金の保有高でも大變な者である。然し其の儲けは必ずしも不當利得ではないから皆吐き出せと言はないが、歐洲を救ふ爲めに戦争中に立替た金をまけて呉れと云ふのは決して不都合なる要求ではない。之に對して極力反對するのは亞米利加の金持である。亞米利加の貸金も政府の金ならば譯はないと云ふ譯ではないけれども幾らか都合が好いが、政府の金ではなく個人の貸金が大部分である。それを棒引にしたからつて倒れる様な人々ではないけれども棒引にするのが厭だから表向きにも内部にも有力なる反對があるのである。

八

亞米利加は今日まで國際聯盟にも入らぬのである、どうしても入らなければならぬの

に入らぬ。表面の理窟は何んとも言へようが、本當の論據は今入ると各國は皆素寒貧である、一緒に飲むと必ず自分が散財しなければならぬ、それを厭だと云ふのである。尤もさう言ふのは亞米利加の國民全體ではない、亞米利加の一部の金持である。亞米利加はデモクラシーの國と言ふが本當のデモクラシーではない、オートクラシー、而も露骨なる金持政治の國で、金持が國の政治を右にも左にもするのである。日本でも政友會がどうとか憲政會がどうとか言ふけれども、亞米利加のオートクラシー、ブルートクラシーに較べれば何でもない。さう云う所から國際聯盟の發頭人でありながら之に入らぬ、實に傍若無人譯の分らぬ事をする國である。それがまだ亞米利加一國だから宜いけれども、英吉利もさう、獨逸もさう、佛蘭西もさう、世界が皆さうなつたから、それこそ人類は滅亡した方が仕合せな位である。兎に角亞米利加はさう云ふ國である。然しどうしても金持に金を出して貰はなければならぬから、頭を下げて、七重の膝を八重に折つても亞米利加に入つて貰はなければならぬ。日本は亞米利加程ではない、亞米利加の十分の一にも達しないけれども、兎に角日本は戦争の爲に儲けた。國內の富は分らぬが對外的の富、外國

に對する富は歐洲戰爭中約四十億圓殖へたと云ふことである。亞米利加に較べては十分の一にも及ばないが、外の國と較べれば大變宜しい、戰爭前の借金と云ふものはスツカリ消えてしまつて正味四十億ばかり残つて居るので力は確に在る。

然るに亞米利加が大なる犠牲を拂ふと云ふのに日本が犠牲を拂はないで、指を叩へて見て居ると云ふやうな事では、三大強國とか五大強國とかの資格はない。鐵砲を撃つだけでは駄目である。富の上に於ても日本は此戰爭の爲に世界の大國になつた、そこで日本は少くも對外債權だけは打棄る覺悟で投出さなければならぬ。亞米利加は全部投出さなければならぬ。さうしてそれは歐羅巴の經濟恢復、隨て世界の經濟的恢復に使はれなければならぬ。其覺悟で掛らなければ世界の恢復は出來ない。さうでなければ今度の國際經濟會議へ行つても駄目である。唯むかふの言ふ事をハイ／＼聽いて電報を打つだけなら百圓か二百圓の月給を呉れて、英語の一寸分る者をやればそれで澤山である。行くならば日本は日本としての案を持つて行かなければならぬ。幸ひ今度の會議は延びたから是から考へても遅くない。國內の問題斗りガタ／＼騒いで居るから、日本

の政治家は外の事を考へる餘裕はないのだらう。日本の政治家等には幾ら言つても駄目である、國民が考へなければならぬ。國民が考へた事を政府がやるやうにならなければならぬ。日本は斯う云ふ考を持つて居る、而もそれはだん／＼勢力を得つゝあると云ふ事を世界的に知らせる必要がある。

次に通貨問題である、何所の國も公債を發行するだけでは足りないで、どん／＼紙幣を出した。不換紙幣を非常に多く出して居る。是が爲に物價が非常な騰貴をして居る。然し茲に考へなければならぬ事は、不換紙幣は普通に考へられ、英吉利や亞米利加の金融業者が考へたり、學者が説いて居つた程悪いものではない。又今日の歐羅巴の物價騰貴と云ふものも、單に不換紙幣發行と云ふとの爲め起つたのではない。不換紙幣は出し易いから減茶苦茶に發行した爲に騰つたのである。是は不換紙幣ばかりではない、純然たる貨幣でも通貨でも、必要以上に殖えれば物價は騰る、必要以下に減ると物價は下がる、是れは何れもいけない。戰爭に参加した國は殆んど皆不換紙幣國になつた。健全なる貨幣制度を持つて居ると誇つて居つた英吉利も不換紙幣露西亞、獨逸、埃地利等は減茶々々

になつた。健全なる金貨本位を維持して來たのは亞米利加と日本だけである。今日戰爭前に較べて非常に澤山の金を持つて居るのは日本と亞米利加と西班牙の三國である。所が此の金は戰爭中に新に産出したものは幾らもない、それは極く少く、多くは戰爭前に在つた金である。金は亞米利加に於いても殖えた、日本に於いても殖えた、それは何所から來たか、戰爭前他國に在つたものが廻り廻つて來たのである。今日は露西亞は戰爭の始まる前に在つた金をスツカリ底を拂つてしまつた、獨逸も佛蘭西も餘程少くなつた、英吉利も少い。英吉利は戰爭前も澤山持つて居たのではないが、始終入つて來たのである。今日は入り方が非常に少くなつたので金の輸出は禁じて居る。戰爭前英吉利なり、露西亞なり、獨逸なりに在つた金が、戰爭中に於ける經濟的關係、國際貿易の關係で、亞米利加へ行き、或るものは日本へ來る、或は西班牙に集つた。此始末を附けるには、澤山の金を持つて居る亞米利加と日本がどうかしなければならぬと歐羅巴の人は言つて現に英吉利あたりでは金貨の蓄積をモツト殖やさなければならぬ。それには新しい金の産出はとて、も數ふるに足らぬから、現に金を餘計持ち過ぎて居る國から取るやうにしなければなら

ぬ。見渡す所餘計持つて居る國は亞米利加と日本と西班牙である、此の三ツの國から取つて來る様にしなければならぬと言つて居る。所が金を澤山持つて居る國の中でも亞米利加は門戸を開放して持つて行きたければ持つて行つても宜いと云ふ調子で、金の輸出を全然解いてしまつた。此亞米利加のやり方は非常な思ひ切つたやり方である。金の輸出を解いた爲め、亞米利加の金は減る、然し亞米利加の輸出が非常に強い爲に直ぐに又入つて來る、戰爭前の英吉利と同じやうである。憐れなのは日本である。金は殖えた、富は殖えた、外國へ貸金も出來たけれども、此金たるや一度出ると二度と容易に歸つて來ない、亞米利加のやうに出て行つて再びそれを吸収する力は日本にはない。必要ならば何時でも之を吸収すると云ふ力が日本に在るか、と云ふと全然無い。少くも私はさう考へて居る、それだから私は世上に喧しい金の即時的輸出解禁論には賛成しない。何時かは解禁すべきは當然であるが、今は解禁する事に賛成が出來ぬ、況んや世上所謂金の輸出解禁論と云ふものは、物價を引下げる爲にと云ふのであるが、是は減茶苦茶な議論で、經濟學のエーピーシーを知つて居るものならばそんな馬鹿な事は言はぬ筈である。

九

物價調節の爲に金の輸出をするなどと云ふ十把一束の議論をする人々に考へて貰ひたい。日本は必要に應じては開放するが、それは日本としては二度と再びない事で、空前絶後である。従つて日本の爲に解禁するのではなく、世界の爲に必ず効を奏すると云ふ時にどんと投出するでなければならぬ。だら／＼と出るやうな事をしてはいかぬ。日本が金を投出するのは世界の經濟的恢復の具體案が定まつた時でなければならぬ。何よりも第一に佛蘭西が問題になるが、實は佛蘭西よりも問題になるのは獨逸である。獨逸に在つた金は日本に入つて居る、獨逸の金が日本に來たのではないけれども、結果に於ては日本は高見の見物をして獨逸の金を取つた事になつて居る。然しそれを皆獨逸の爲に投出してはいかぬ、投出するには餘程慎重なる考慮を要する。佛蘭西を救ふ爲には英吉利も亞米利加も盡力するだらうから、日本は慌てた眞似を爲す可きでない。唯彼等は獨逸に對しては無用なる敵愾心を去つて居らぬ、日本人も日英同盟の誼に依りなどと英米

のプロバガンダの爲に獨逸を惡魔のやうに思つたけれども、今日冷靜になつて考へれば、そんな事は馬鹿々々しいやうに思はれる、それ程には行かないでも、もう今日は獨逸を敵國とは見て居らぬ。私は日本が獨逸に金を貸してやつたら宜いと思ふ。それは或る條件付で貸してやる。或る條件付とは獨逸の安い品物をどん／＼日本へ入れる。其道行は獨逸から品物をどん／＼取つてさうして金を貸してやるのである。獨逸からどん／＼品物を輸入しさえすれば日本の金は獨逸へ出て行く、其獨逸へ出て行く途さへ附ければ宜い。從來英吉利から買つて居つたものを獨逸から買つてやれば宜い。而もさうすれば日本としては非常に安い品物が買へる。英吉利の品物程好くはないかも知れぬけれども、それでも日本で拵へたものよりは遙に好くて、さうして値段が安く買へる。所が獨逸からどん／＼輸入をすると輸入超過になる事を憂へる人がある。何故輸入超過を憂へるかと云ふと、輸入超過になればそれだけ金を取られるからいけないと云ふのである。所が日本は有り餘る程金があるから、取られても宜いと云ふので輸出を解禁すると云ふ論者がある。彼等は金を出て行くやうにする、持つて行く事に依つてばかり處分

しやうとするが、日本の保有して居る金貨を處分する一番穩當な一番手數の掛らぬ途は輸入超過である。金を持つて行かぬでも輸入超過になれば爲替關係で金が出る。然るに世人は金の輸出を解禁しろと言ひながら輸入超過を大變に恐れて之を憂へる。是位矛盾した事はないである。

輸入超過を不可なりとするは金が出て行くからである。國としては輸入超過が宜い、極端に言へば輸入ばかりが宜い、外國へ出す必要はない。外國から何でもどん／＼買つて來れば宜い。日本でも絹が大分出來るなら絹の着物を着れば結構、何も亞米利加人に絹の着物を着せて、日本人が木綿を着なければならぬと云ふ事はない。亞米利加へ絹を出さなければ日本では絹が要らぬと云ふのならば、信州あたりでは絹を拵える事を止めて外のものを作るやうにすれば宜い。輸出が好くて輸入が悪いと云ふ事はない、それは飛んでもない間違である。輸入は金貨が出て行くからいけない、輸出は金を呼び易いから好いと云ふに外ならないのである。今若し其の必要がないとならば輸入は大に宜いのである。それを防がうと思つても國が進めばどうしても輸入超過になる。戦争前に

は英吉利獨逸、佛蘭西等は始終輸入超過であつた。亞米利加と日本は輸出超過國であつた。輸出超過でないといふ場合が悪かつた。所が依然戦争前の論法で輸入の方が輸出より多い輸入超過何千萬圓などと如何にも亡國的数字であるが如く言つて居る、是位馬鹿な事はない。世には危険思想がどうの斯うのと言ふけれども、それは直に人を害しはしない。何故ならば無政府主義にしる共產主義にしる直ぐ實行の出來るものではないからである。それに反し、輸入の防遏は直ぐに出來る。女學校の先生の修身講話などで頻りに舶來品を使はないやうにすれば日本は輸入超過にならない、それを能く考へて、家庭の主婦になつたら成るだけ舶來品を使はないやうにして、輸入を防遏すると云ふ考を以つて家計を立てなければならぬなどと教えて居るが、そんな馬鹿な事をされては堪るものではない。家計を立てるには成るべく安い品物を使ふが宜い。日本の女學校などではそんな事を直ぐに生徒に教え込むから困る、素人の耳學問は全く困る。何でも輸入と云ふ事はいけないやうに思ふ、さう思つて居るから輸入を防ぐの政策なり方針なりに、政府當局連中は有りたけの智慧を傾けて居るが、非常に輸出の殖える場合に輸出を抑へる

方の考案に付ては何も工夫がない。工夫がないから日本はひどい目に遇はされたことがある。

十

此度の戦争の始まつた大正三年七月頃は、日本は輸入超過の爲に爲替の出合ひが附かなくなつて二進三進も行かなくなつた。人間と云ふものは焦る程深みに嵌まる。輸入超過も防がう防がうと考へて、防がうとすればする程輸入超過になる。とう／＼正金銀行の行詰りとなつてどうする事も出来ない。そこで政府にお頼り申す、日本銀行にお頼り申す外はなくなつたが、政府もあらゆる方法、あらゆる力を貸したけれども救済が出来なくなつた。所が幸に其時に歐羅巴の大戦争が起つて一變して輸出國になつた。今まで輸入をして來た國は品物をどん／＼造つて戦争をして居る。日本だけが平和の産業をやつたもんだから形勢は一變した。若しあの戦争がなかつたら日本はどうなつたらう、潰れはしないだらうが餘程困つた事になつたらうと思ふ。所が戦争中は輸出超過で

四十億圓も利益が擧がるやうになつた。輸出の増加したのは結構だけれども、今度は輸入が少い爲に行詰つた。大正七年の九月頃二進も三進も行かなくなつた。所が又第二の天佑として休戦が成立したのである。もう少し戦争が続いたら日本は駄目だつた。此點から言つても日本は獨逸に感謝しても宜い、一度は輸入超過の爲に行詰り、一度は輸出超過の爲に行詰りになつたのを戦争の始終によつて救はれたのである。

輸入を防ぐ方には工夫が及んだが、輸出がさう殖えるとは考へ附かなかつたのであつた。下司の考は後から附くと云ふ事があるが、是は分り切つた話である。今度の戦争で輸出國になると云ふのは分り切つた話である。又輸出の大變殖える事が日本の爲に好くない結果を持來すと云ふ事も分り切つた話である。戦争の始つた翌年、私は大阪で此意味の講演をした事がある。今景氣が好いと言つて居るが、それはちやうと古着や古道具の値が出たやうなものだ、値が出たと云ふので着物も賣つてしまふ、古道具は賣つてしまふ、鍋釜まで賣つてしまふ、しまひに屋根まで剝がして賣つてしまつた。それで何千圓と云ふ賣高があつたと言つても雨は漏る、着物は無い、鍋釜もない、茶椀もない、其賣揚代

金も取れれば宜いけれどもそれが危い。露西亞に賣つた賣揚代金は大抵は取れないだらうと言つたがチャンと其の通りになつた。ポルシェヰキズムにならうとは思はなかつたけれども露西亞が戦争中に借金を返せるものではないと云ふ事は分つて居る。大阪の商人は機敏だと云ふけれども、一時の好景氣に目がくらんだ。目がくらんでは駄目である。其の爲めに一時輸出禁止論さへ起つた。斯う輸出が多くなつては仕方がないと云ふので輸出禁止論も起つた。そんな馬鹿な論は實行されなかつたけれども、政府も輸出禁止でもしなければ爲替の結末が着かぬと言ふ。元來爲替は商賣をする支拂の爲に在るのである。其支拂が出来ぬから商賣を禁すると云ふ馬鹿があるか。吾々が車に乗つて出掛ける餘り出歩くと車夫が困る、車夫が困るからと言つて肝腎の出歩きを止める、學校を休む、役所も休むと云ふ馬鹿はないであらう。車に乗る爲に學校とか役所へ行くのではない、役所、學校へ行く爲に車に乗るのである、爲替もさうである。爲替を組む爲に商賣をするのではない。爲替の方が二進も三進も行かぬからと言つて商賣の方を禁止してしまふなどと云ふ、左様な馬鹿な事はない。乍去、此くの如き愚論さへ行はれる程

滔々として輸出が激増した。日本も今迄は規模が小さかつたからどうか斯うにかやられたけれ共、是からの日本はそんな眞似をしてはとて駄目である。吾々は外國貿易に關する考を立て變へなければならぬ。輸入は結構、輸出はいけないと云ふ考を以てやらなければならぬ。然し輸入するには輸出もしなければならぬ。輸出をしなければ何か持つて行かれるから輸出を奨励しなければならぬ。併し、今日の如くに正貨が多いから處分をしやうと云ふならば、輸入超過に俟たなければならぬ、其の外には方法がない。あつても無理な方法だからいけない。戦争中は軍艦に金を積んで浦潮から持つて來たと云ふやうな事もあつたようだが、是からはそんな事は出來ない。ソコデ、自然の道行としては先づ第一に獨逸からどん／＼輸入をして、獨逸へ金を出すが宜い。然し獨逸へばかり出すと云ふ事も出來ぬ。外へも散らかるけれども、何かの方法を以て獨逸に多く行くやうにすれば宜い。漢堡には正金銀行の支店がある、伯林には三菱や何かの支店が出來た。其れをするには今が時期である。馬克は大變安い、それに獨逸は盛に原料等を得やうとして居るから、日本は其の原料をやる事の出來るものはやる。尤も日本からは距離

が遠いから原料の供給はむづかしからうが、必ずしも獨逸へはやらぬでも、獨逸から輸入をすれば大部分は日本に對する輸出となる、要するに、日本の爲すべき事は幾つもあるが、第一は心的の事である。各國は曾て敵であつた所の獨逸に對して、今でさへ恨が去らないのみならず、各國互に猜み合つて居る、そこで日本は第一に獨逸を敵視する事を止めさせる。獨逸を敵視するやうな相談には日本は與らない。そんな相談には席を立つて歸つて來ると云ふやうな考を持つて貰ひたい。反對に聯合國間に意思の疎通する途の出來るやうに日本は努めなければならぬ。それには先づ日本は佛蘭西を援助する。外に小さい國が澤山あるけれども、それにはなか／＼手が届かぬ。日本は事情が分らぬからそれはなか／＼出來ぬが、佛蘭西なら事情が分るから佛蘭西を援助する。夫をするにはどうしても亞米利加と協力しなければならぬ。モット亞米利加と心を打披いて、一寸も亞米利加の心事を疑ふ様な事をしてはならぬ。むかふが少々悪くても、正直にやつて行けばむかふが負ける事になる。日本は歐米のやる事には何所迄も赤心を披いて應ずるものであると云ふ事を示せば、亞米利加は能く諒解すると思ふ。次には露西亞を助けね

ばならぬ。ボルシェヴィズムはいけないなどと考ふ事を已めなければならぬ。露西亞も兎も角永い間レーニン等が政權を持つて多少の秩序を維持しつゝあるのだから、あれが顛覆すれば兎に角繼續しつゝある限りは對手にしてやらねばならぬ。日本が經濟會議に入ると云ふならば、露西亞が入つても構はない、先に立つて之を援助す可きである。

元來社會の根本組織は變るのが當然なのである。唯急激に不法手段を以てやるのはいけないけれども、だん／＼に變るのが當然なのである。身體の組織でも絶えず新陳代謝して居る。一日でも通じがなければ具合が悪いものであるが、社會の根本組織もさうである。徐々に進化的に變つて行く。變るのが當然なのであつて、必ずしも今日の儘、今日の通りでなければならぬと云ふ事はない。大體に於て日本の今日の仕組は種々悪い宣傳をしても危険はない。悪い宣傳をすれば警察の力でどん／＼捕へれば宜い、さう云ふ考を以て露西亞に臨むならば、恐る可き事は些もない。所が殊に英吉利の金持はボルシェヴィズムを嫌ふ。是が實行されなくてもだん／＼労働者の間に反抗思想を吹込まれるのを厭ひ、是は人類の敵であると云ふ。是は金持が天下を欺いて居るのである。そ

んな事で日本は欺かれてはならぬ、欺かれる必要はない。今日は戦争前に歸つて、露西亞を一の獨立國として附合ふ可きである。寧ろ各國を勧誘してもやらなければならぬ。今度の國際經濟會議は好い機會である。次には形の上に於ては、日本の持つて居る金を輕々しく使つてはならぬ。第二は世界各國が戦争に依つて得た所の借金は互に帳消しにする。其の爲めに日本は先に立つて唱道して、亞米利加をして帳消しをさせるやうにせねばならぬ。全部帳消しにしないまでも成るべくそれに近い様にする。若し今度のジエネヴァ會議に亞米利加が出て來なかつたら、亞米利加の居らぬ蔭で、亞米利加は斯く斯くの事をすべしと云ふ決議をするが宜い。それを亞米利加がやらぬと言つたら今度は亞米利加は世界の公敵である。各國がやると云ふのに亞米利加が獨り厭だと言ふなら各國は堂々と亞米利加を攻めるが宜い。要するに以上が、世界經濟恢復に就て當面緊要の事項と思ふものゝ内、其二三の概要をあげたのである。

|| 大正十一年五月二十日横濱商工會講演 ||

参考。拙著『貨幣價值騰落の原理』(安田同人會第六號大正十四年三月號掲載)

六 何を緊縮する

|| 物價引下げの根本要件 ||

—

頽廢、放漫の極を盡した政友會内閣の後を承けた現内閣が緊縮を標榜して起つたのは殆んど當然過ぎる位のことであつて、我々は之を歓迎するに吝なるものではない。政府は一方に於て國費の節約を斷行すると共に、他方民間に向つても所謂消費の節約の宣傳を大々的に行はんとしつゝありと云ふ。是丈け聞けば結構千萬なことである、我々は双手を擧げて賛成する。又政府が向後施設せんと欲すと報ぜらるゝ所にも、歓迎す可きものが尠からずあることは、十分に之を認める。乍併今日までに事實に顯はれた所を見ると、政府が緊縮の對象として選び出したものには見當違ひのものが尠からずある。大抵

は所謂弱い者いぢめになつて居る。第一に官吏の暑中休暇の廢止、土曜午後執務などは實に馬鹿げ切つた愚案である。第二に陸軍で午砲を廢する軍樂隊を廢する、又た今突然として滿洲に於ける鐵道守備隊を撤廢すると云ふ、何れも驚き入つた事柄である。私は過日滿洲を旅行したとき、所々で此事に關して意見を徵せられたに對して答へて行つた『政府の緊縮は宣傳本位である、眞に節約す可きものを節約し廢止す可きものを廢止するにあらずして、直ちに人目を聳動するに適した様なものを廢止して、政府はコンナに節約をやつて居るのであると宣傳しようとしつゝあるように見へる。殊に陸軍には、誰かエライ智慧者があると思へて、軍縮を本當に行はずして、大に行つたように見せようとして、萬民が直ちに氣のつくように市中の午砲を罷める軍樂隊を廢する。コレハ廢止したとて、其の節約額は雀の涙位のものであるが、然し廢止したによつて影響を蒙る範圍は甚だ廣い、即ちプロバガンダの目的に最も適して居る。ソコデ、滿洲鐵道守備隊の撤廢も恐く同一筆法から來るものであらう。若しも陸軍が眞に駐滿軍樂費に大節約を行はんとならば所謂現役兵(駐屯師團)の整理をやる可きである、其の餘地は必ずあることと思

ふ。併し此の整理は直ちに人の注意を惹かない、ソコデ其れはやらないで、誰人も痛切に利害を感じる鐵道守備隊を撤廢すると揚言して、其の揚言丈けで已に可なり人心を動搖させた。即ち其れ丈けでプロバガンダは半其の目的を達したのである』と。私は、尙かに此の斷言の誤らざることを信するものである。官吏暑休の廢止と云ひ、鐵道守備隊の撤廢と云ひ、云はゞ當路者自身は、一向苦しみをしなないで、人をいぢめ付けて、それで緊縮節約を大にやつて居るかの如くに見せる。プロバガンダの効能は多大であらう。此んな蟲の善い緊縮なら恐らく政友會でもやつたであらう。彼等は現内閣に智慧者のあるのを、今更羨んで居るかも知れない。

更らに蟲の善くして、而して不埒千萬なるは、所謂國民消費節約の宣傳是である。政府者曰く『我邦の物價が下落す可くしてせざるは、上流社會は不景氣に惱まされて當然に緊縮するに至つたに拘らず、中流以下、就中勞働階級の懐が未だ中々温かで従つて購買力消費力に富んで、日用品は勿論奢侈品に對しても國民需要額がまだ甚だ大であるからである。此の需要を緊縮せしめ、此の購買力を減せしむるにあらざる限り、物價の低落は之

を望んで得可からず、故に政府は商業會議所等と協力して、主として下流階級に向つて、消費の節約を大々的に宣傳せんと欲するのである」と。此の言は聞く耳を疑はざるを得ざる程の愚論暴論であるが、私が再三親しく聞いた所である。商業會議所の一味の連中——六割も七割もの配當をして平然たる會社の重役、國民生活の安定を名として、ポロ機械、ポロ工場を賣付けようとする政商、若くは其れと同種類同程度の人々も、尠からざる部分を占めて居る所の——が、一義もなく、政府の御意を奉戴して、下流壓迫の節約宣傳に全力を傾倒すると云ふのは、誠に當然の事であると共に、其の露骨さ其皮肉さ加減は、實に目眩はしい程である。昔本多佐渡守は家康に献言して、『百姓は死なぬ程度に押へ付けて置き』と云つたとか云ふことがある。『日本經濟叢書』「本佐錄」を見よ今日の政府は『人民は死なぬ程度に緊縮させろ』と云ふことを政治の根本義として居るではないかと疑はざるを得ない。緊縮は結構な事である、節約は大いに必要なことである。然し其れは緊縮す可きものを緊縮し、節約す可きものを節約してこそ結構なので、然す可からざるものを押へ付けることは、却つて大害を醸すの基なるを忘れてはならぬ。

二

此くは云ふものゝ、政府が今爲さんと欲しつゝありと傳へられるものゝ内に、幾多眞正に適切なものも含まれて居ることは、決して否定す可からざる所である。中央市場の設置による物資配給の疏通、不當取引の取締、鐵道運賃の引下げ、專賣價格の引下げ等は實に今日一日も早く急設せねばならぬ事柄である。乍去、此等の施設を有効有力ならしめるには、茲に根本的に最も緊縮を要する事に向つて一大斧鉞を加へるのでなければならぬ。此一事を閑却して置いて、他の千百の施設を爲すとも、其の効果——殊に物價引下げの上に於ける——は甚だ微細なものであらう。中央市場の設置は必ずしも物價引下げのみを唯一の目的とす可きものではない、日用物資の配給を圓滿ならしめると、價格を公正、安固ならしめること、従來の間屋、小賣制度に基く百般の弊害を除去すること、斤量の正確を得ること、品質を吟味すること、公衆衛生に十分の注意を拂ふこと、暴利的賣惜み買占めを防止すること、其他幾多の改良は、中央市場の經營が運用宜しきを得れば之を實現するこ

とが出来るのである。不當取引の取締は、主として其の道德的効果の爲めに必要なのである。如何に其の取締が有効であつても、其れによつて直ちに物價引下げの實現を見る可しと期するのは誤りである。無論間接には、暴利の要素を除去するによつて物價の低落、安定を助くるに有効なるには相違ないが、其れは直接の作用ではない。直接の作用は、暴利を目的とすることは不法なり、不徳なりてふ事を、一般商業者並に生産者に自覺せしむること是れである。此の道德的作用は、他方に中央市場並に公設市場の發達あれば、相寄り相輔けて、我々の日常生活をより多く秩序的のものとし、より多く合理的のものとするに、至大の効果あることは疑を容れない。乍併、私が云ふ所の根本斧鉞の下されることなくしては、其の効果は殆んど全く相殺せられることとなる外はない。何となれば、今迄此の根本に向つて斧鉞の下されて居なかつたことが、今日の頽廢、放漫な經濟状態を産み出し、暴利的不正、不法行爲が異常を遂げた原因であるからである。此の根本原因を取り去ることを怠つて置いて、他の施設のみに熱中するのは、病根を醫さずして唯だ應急の膏藥張りに安ずるものである。而して然る限りは、眞に緊縮せらる可きものは却つて緊縮せら

れず、否益々増長して行つて、終には二進も三進も行かなくなる外はない。商業會議所一味の連中が中流下流國民に向つて、聲を限りに消費の節約を宣傳しつゝある間に、同じ仲間若くは同穴の貂等が、せつせと放漫なる暴利的行爲の手を擴げて行く限りは、緊縮節約は迎も望みない、況んや物價の引下げをや。更らに況んや國民生活の安定をや。

三

私が茲に根本に向つて斧鉞が下されなければならぬとは何であるか。答へて曰く、兌換券の莫大な發行、之によつて助長せらるゝ無謀不謹慎な貸出政策、更らに此貸出政策によつて助長せらるゝ獨占的營利事業の増長此れである。

我邦の物價が外國の其れに比して、依然として高き騰貴率を示して居ることは須知の事實である。今最近の數字をあげて見よう。

戰前（一九一三年）に對する本年の日、英、米物價指數（一六三三頁の圖表參考）

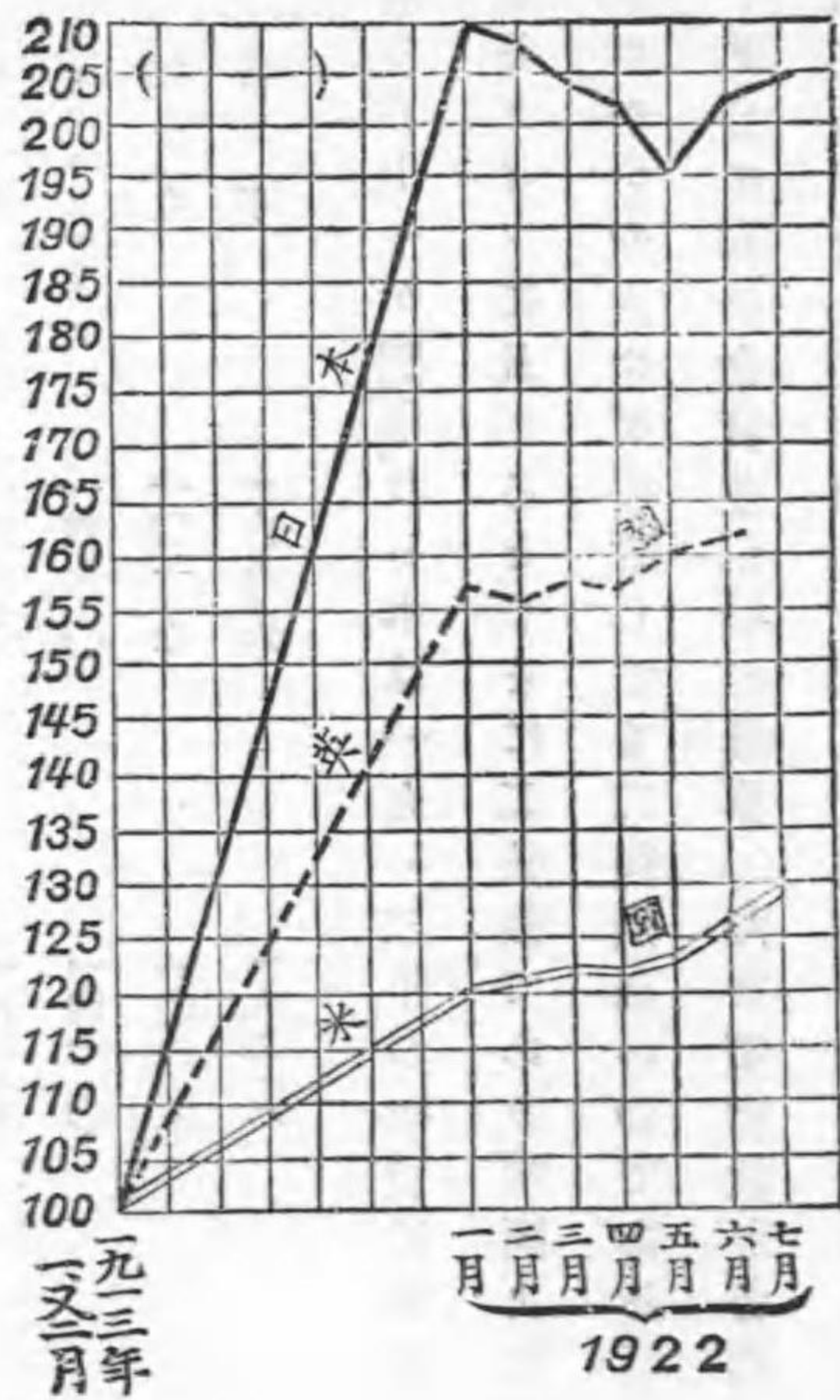
日 本

英 國

米 國

年	月	指數
一九一三年	一月	一〇〇・〇〇
一九一三年	二月	一〇〇・〇〇
一九一三年	三月	一〇〇・〇〇
一九一三年	四月	一〇〇・〇〇
一九一三年	五月	一〇〇・〇〇
一九一三年	六月	一〇〇・〇〇
一九一三年	七月	一〇〇・〇〇
一九二二年	一月	二〇七・七
一九二二年	二月	二〇六・〇
一九二二年	三月	二〇三・〇
一九二二年	四月	二〇〇・五
一九二二年	五月	一九四・三
一九二二年	六月	二〇〇・四
一九二二年	七月	二〇二・三
一九二二年	一月	一五六・八
一九二二年	二月	一五五・九
一九二二年	三月	一五七・三
一九二二年	四月	一五六・八
一九二二年	五月	一六〇・〇
一九二二年	六月	一六〇・七
一九二二年	七月	一二八・〇
一九二二年	一月	一二〇・二
一九二二年	二月	一二〇・七
一九二二年	三月	一二二・六
一九二二年	四月	一二一・九
一九二二年	五月	一二三・七
一九二二年	六月	一二五・八
一九二二年	七月	一二八・〇

即ち米國では、戦前に比して本年六月は總平均に於いて、僅かに二割五分八厘、英國に於ては六割七厘の騰貴を示して居るに過ぎないので、我邦は二倍強となつて居るので、更らに七月に入つては其上に一分九厘の騰貴を現はして居るのである。英米以外の國殊に獨佛埃等は、何れも不換紙幣を流通して居るから、直ちに其の儘に比較することは、當を得て



毎月平均の各國の對外爲替相場に基いて米國の弗金貨に換算した各國の物價指數 (一九一三年を一〇〇とす)

年	月	米國	カナダ
一九二二年	一月	一四二・〇	一五九・三
一九二二年	二月	一四六・〇	一六二・七
一九二二年	三月	一四七・〇	一六〇・七
一九二二年	四月	一四九・〇	一六二・二

六 何を緊縮する

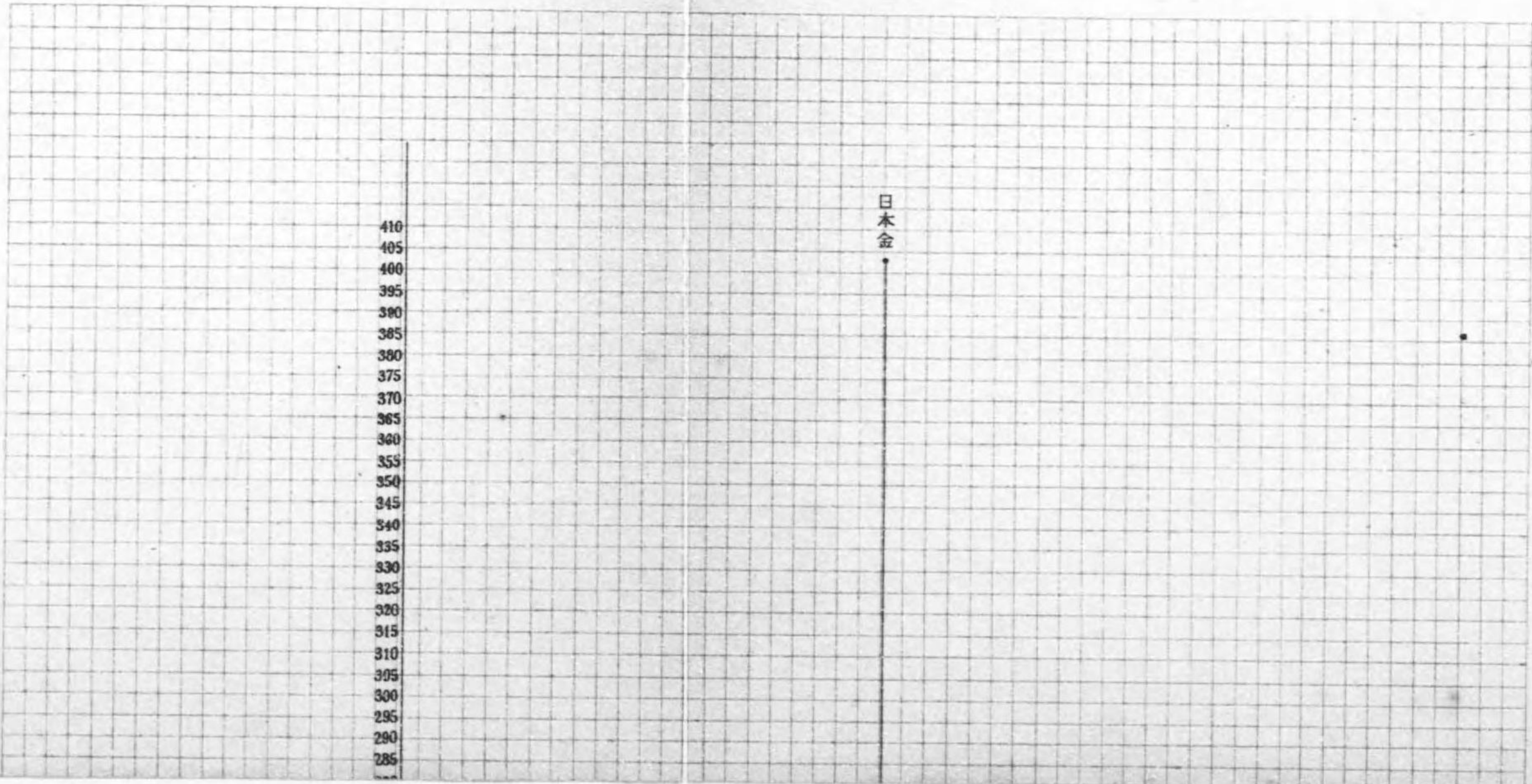
一六三

居らぬが、比較的變動の最も小なる米國の金貨弗に對する各國本位貨の、其時々爲替相場を基として換算すれば、粗ぼ眞相を得るに近い。其の數字は左の通りである。

英國	一四五・〇	一四七・八	一四六・五	一四八・七
佛國	一二九・四	一三八・四	一四三・二	一五〇・一
伊國	一二七・四	一四二・九	一四一・一	一四六・五
ドイツ	七五・六	七九・八	七三・一	八八・四
スウェデン	一五八・三	一六一・九	一六〇・〇	一六〇・三
オランダ	一四六・九	一五一・五	一五二・五	一五〇・〇
オーストラリア	一四七・〇	一四七・〇	一四六・〇	一四八・〇
印度	一〇一・七	一〇三・五	一〇四・〇	一〇四・〇
日本	一九五・九	一九三・八	一九〇・九	一八七・一

即ち右十一ヶ國中、我日本は一九一三年の物價に對する騰貴率は最高であつて、其の最低なるドイツに比べると、まさに二倍強であり、米國よりは四割近く高く、日本に一番近いスウェデンやカナダに對しても二割強高いのである。

次に右の金貨相場場に換算した物價指數と、各國の金保有高の世界全體の金在高に對する割合とを比較して見ると別表の通りである。



410
405
400
395
390
385
380
375
370
365
360
355
350
345
340
335
330
325
320
315
310
305
300
295
290
285

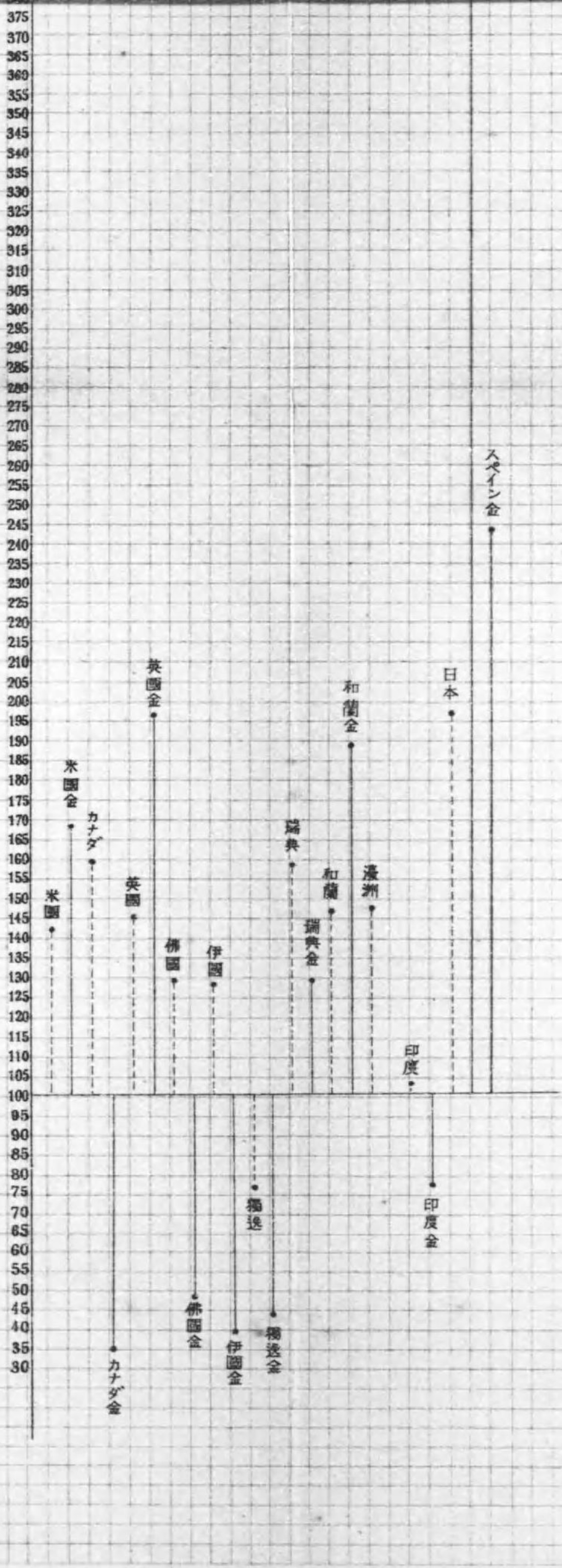
日本金

伊 國	一二七・四	一四二・九	一四一・一	一四六・五
ドイッ	七五・六	七九・八	七三・一	八八・四
スウェーデン	一五八・三	一六一・九	一六〇・〇	一六〇・三
オランダ	一四六・九	一五一・五	一五二・五	一五〇・〇
オーストラリア	一四七・〇	一四七・〇	一四六・〇	一四八・〇
印 度	一〇一・七	一〇三・五	一〇四・〇	一〇四・〇
日 本	一九五・九	一九三・八	一九〇・九	一八七・一

即ち右十一ヶ國中、我日本は一九一三年の物價に對する騰貴率は最高であつて、其の最低なるドイツに比べると、まさに二倍強であり、米國よりは四割近く高く、日本に一番近いスウェーデンやカナダに對しても二割強高いのである。

次に右の金貨相場に換算した物價指數と、各國の金保有高の世界全體の金在高に對する割合とを比較して見ると別表の通りである。

(一九一三年を百とし之れに對する一九二二年一月の指數)
 各國保有金高の世界保有金總額に對する割合の指數
 各國物價指數を其時々の對米金貨爲替相場にて換算したる割合の指數



右別表によれば、戦前に比して金の保有高を増した、其の割合の筆頭も我日本であれば、物價騰貴の割合の筆頭も亦我日本である。日本に續いては西班牙、英國、和蘭、米國、瑞典が金の保有高を増し、反對にカナダ、佛國、伊國、ドイツ、印度は減じて居る。物價騰貴の割に於ては、日本に亞いではカナダ、瑞典、濠洲、和蘭、英國、米國、佛國、伊國と云ふ順で、印度は殆んど戦前と差がなく、ドイツに於ては著しく下落して居るのである。

四

金保有高と物價との關係は、別表の示す如く區々で一概に結論を下すことは出来ないが、英、米、和蘭に於ては何れも日本と同じく、金保有高割合の増加は物價騰貴率よりも高く、獨り瑞典だけは其反對であることを見る。他方に、カナダの金保有高は激減して居つて、物價は可成騰貴して居り、佛、伊兩國は金保有高の減じた割合と、物價騰貴の割合と共にカナダよりは低く、ドイツに至つては金の保有高激減して、而して物價も亦著しく低落して居るのである。奥に就いての物價指數は分らないが、思ふにドイツと同じ、否モット其

の度合が甚だしいであらうと推察せられる。日本と同一趨勢を示す所の西班牙、和蘭米國（英は姑く別として）に就て見れば、金保有高の増加が物價騰貴と若干の因果的關係を有することは、之れを疑ふの餘地なく、而して我日本は、此の部類中飛離れて極端の一例を示して居ること、右別表を一見して知り得可きが如くである。日本の異常なる物價騰貴の原因の一として、金保有高の激増——四倍強——が有力なるものであることは、之れを否定することは出来ないのである。

此の事實を非常に重く視、而も唯其れ丈けしか見ないときは、此の頃我邦識者間に可なり勢力を得つゝある所の金の輸出解禁が、物價騰貴防止若くは物價引下げの方法として最根本的なものであるとの説は、如何にも尤も千萬のように考へられるのである。ソコデ論者は云ふ、物價調節——引下げの意に於て——の爲に根本的に斧鉞を下さなければならぬことゝは、此の輸出の禁止を解くことは是である。此の一事を斷行せずしては、百の施設も必竟徒勞に歸すると。私は此論の一半を極めて正當なりと認めると共に、他の一半を以て甚だしい速断であり早計である信するものである。

私が認めて正しとする所は、我邦の保金高の激増が、流通通貨の激増を招致し、従つて貨幣の購買力——普通之れを貨幣の價値と呼んで居る——が著しく下落したことの反面が取りも直さず異常なる物價騰貴となつて顯はれたとする事それである。此の點に就ては私は既に大戰中から度々論じたことがある——太陽に掲載し後に黎明録に收めた『何を調節するか』前段所收、其他を見られたし——如く、私は論者と全く見る所を一にする者である。然らば、私の速断なり早計なりと云ふ所は何であるか。曰く保金高を今直ちに減少する政策を取れと云ふ主張是れである。此く云ふと、或は難する者があらう、汝の言は矛盾して居る。既に保金高の激増を以て物價騰貴の最大原因なりとする汝は、物價引下げの根本要件として、其の減少を來す可き政策を支持す可き筈である。是れ論理の當然である。然るに減少政策の速行に反對するは矛盾も亦甚しいではないかと。此の非難は確かに中つて居る、但し其れにはプロヴァイゾがある、曰く『我邦現行の兌換制度に少しも手を觸れない限りは』と云ふことである。我兌換制度の現状を此儘にして少しも改めない限りは、今日に於て物價の引下げを招致せんとするには、金の保有高減少の作

用を有す可き金輸出解禁を斷行する一事を措いて外に方法なきは、私の全然肯定する所である。此の點に於て私は世上の金輸出解禁論者と全く同一の立場に立つたものである。

五

我現行の兌換制度は、ドイツ帝國銀行の制度を模倣した所謂屈伸法なるものに依るもので、一億二千萬圓の保證準備と所謂制限外發行とを除いては、悉く正貨準備たることを要求するものである。——其れと同時に、其の正貨なるものの中には、所謂在外正貨なるものを含有して居ることを忘れてはならぬ。——正貨さへあれば、如何なる巨額の兌換券を發行するとも、其れは全く日本銀行の自由に任せられて居る。日本國民經濟の兌換券需要額如何の如きは、些も之れを顧慮することを要せぬ、これが現在の我邦兌換制度の根本主義である。私が今、金輸出解禁論者と見る所を異にするのは、實に此點に存するのである。論者は解禁しさをすれば其れで宜しいと云ふ。私は其を速斷早計なりと認めるの

である。私が根本的に大斧鉞が下されなければならぬと主張するのは、金輸出の解禁其の事ではなく、以上の如き國民經濟の需要如何を全く度外に置く所の、現在の我兌換制度其の物に向つてである。我邦貨幣經濟學の最先覺たる山崎博士は、其の著『貨幣銀行問題一斑』に於て、嘗て現行の我邦屈伸發行法を以て良制なりと説いたことを取消されて、此の法は決して萬全なるものでないと云ふことを改めて主張せられた。博士以外の經濟學者は、田尻博士を筆頭に殆んど皆山崎博士の舊説と同じ説を始終唱へて居られる。私は山崎博士と同時に現制の決して世上學者の説くが如き理想的のものでないことを再三公言した『經濟學研究』其他を見よ博士も私も共に戰前の状態に就て既に左様に考へて居たのである。況んや金の流出入に關する日本の状態が根本的に一變した今に於てをや。私は此の變化に對して山崎博士が、更らに其の説を力強く主張せられるに相違ないと信ずるものであるが、不幸にしてまだ此點に關する博士の最近の見解を承る機會がない。兎に角私は更らに前説を力強く主張する外ないのである。

今日既に通貨——主として兌換券——流通額が國民經濟の需要に超過する多大なる

ことは、解禁論者も私も共に認める所である。唯だ解禁論者は解禁しさへすれば此の不調和は自然に、當然に除去せられると考へるのである、私は此一事を斷乎として否定するものである。

先づ左表を一瞥せられたい。

大正十一年七月三十一日現在

日銀兌換券發行高	1,224,363,000圓
正貨準備	1,220,762,000
發行餘力	116,399,000
正貨保有高	645,000,000
所有者	616,000,000
政府	1,239,000,000
日銀	1,855,000,000
合計	1,218,000,000
所在地	637,000,000
内地	1,855,000,000
外地	1,855,000,000
合計	1,855,000,000

日本銀行は本年七月三十一日に於て十二億二千萬圓を正貨準備として、十二億二千四百萬圓の兌換券を發行して居る。而して發行餘力なるものが一億一千六百萬圓餘ありとせられて居る。之は保證準備の一億二千萬圓を算入するからで、 $1,220,762,000 + 120,000,000 = 1,340,762,000$ 、 $1,340,762,000 - 1,224,363,000 = 116,399,000$ ありとする勘定に依るものである。トコロが實際我邦に現存する正貨額はと云へば、 $1,218,000,000$ しかない。此額中政府と日銀との所有別は例によつて明示せられて居ないから、實際の真相は分らないが、假りに一步を譲つて在內金の全部が日銀所有にかゝるものと假定すれば——十の八九其が事實であらう——

正貨準備	1,220,762,000
内地在在	1,218,000,000
合計	2,762,000

二百七十六萬二千圓は日銀の庫中は勿論、我邦何れの所にも現存せざる所謂在外正貨なるものに屬するのである——それが在外正貨引當ての最低額で、實際は其れよりは多いかも知れぬ、反對に其より少いことは決してあり能はぬのである——此額は、帳簿の上

で數字を書き直しさへすれば、何時でも増し得る、従つて其れ丈けは、何時でも、又た兌換券を増發し得るのである。其最高限は右の數字によれば去七月三十一日に於ては、六億三千七百萬圓であつた。故に日銀にして爲さんと欲すれば、同日に於て、十二億二千四百萬圓に非ずして、

1,555,000,000
+ 120,000,000
1,975,000,000

十九億七千五百萬圓の兌換券を發行し得、更らに之れに加へて所謂制限外發行を大藏省が許す丈けは爲し得るのである（此外に、我邦の領土内には朝鮮銀行、臺灣銀行等の所謂特殊銀行が兌換券を發行して居る、其の額大正十年十二月に於て鮮銀一億三千六百萬圓、臺銀四千萬圓であつた。又債券を發行する北銀、勸銀、興銀等もある）。ダカラ、假令金の輸出解禁をしても、其海外に特ち出される高を、在外正貨の繰入れで辻褃を合はさないとも限らない。然る間は、解禁は決して、直ちに兌換券流通高を減する作用を持つと保證する

わけには行かないのである。而して解禁の爲めに、例へば七月三十一日に於ける在外正貨總額の六億三千七百萬圓を一時に海外に持ち出されるようなことは、事實不可能なことである。又假りに其れが可能なりとすれば、其れこそ由々しい一大事であつて、今の解禁論者は其時になつて、恐らく政府なり日銀なりを囂々として攻撃非難することであらう。内地保有高の半額以上にも及ぶ在外正貨なるものがあつて、其れが何時でも電報一打帳簿上の振替で、我が兌換券の正貨準備とせられ得ると云ふ状態の下に於いては、輸出解禁論を今日の様な形で主張することは、事の實際を知らざるも甚しいものである。昨日（十一月二十六）の時事新報を見ると、畏友小野塚喜平次博士は『成る可く速かに成る可く一般的に解禁せよ、解禁より來る可き利益は其不利益よりも大なりと信ず』と言つて居られるが、博士は果して右の在外正貨てふ大抜穴のありて、解禁は決して、自然の状態を恢復することにならぬを御承知ありて、其の所謂解禁の利益——私を以て見れば、キメリカルな——は其の不利益——私を以て見れば、今直ちに解禁するときは確かに現實的に大なる——より大なりと信ぜらるゝものであらうか。私は平生慎重冷靜を以て聞ゆる

同博士に質さざるを得ないものである——武藤山治氏のように、綿花買入れの便に多大のインテレストを有せられる人士の解禁論は、學問的考察から全く度外に置かねばならぬことは、讀者諒とせられることゝ信ずる。

我邦の通貨總額は、戦前て比して激増はして居るが其の割合は諸外國と比較すると必ずしも驚く可きものではない。即ち左の通り。

英	十五倍	佛	六倍半	獨	三十三倍
伊	十倍	日	三倍半	和蘭	三倍強
加	二倍	米	一倍七分		

之に反し紙幣兌換券の總額に對する金銀在高の割合は日本の増加は驚く可きものである。即ち左の通り、

紙幣流通高及金銀在高

英 國	一九三三年	一九三二年	一九三三年	一九三二年	一九三三年	一九三二年
	三、四、九八三	一、五九、八七	五、九、〇〇八	四、三、四四〇	四、二、一八	三、六、九
	金銀在高		紙幣流通高		準備割合	

佛 國	千法郎	四、一五七、五〇〇	三、八四六、二七七	五、七、一三三、〇〇〇	三、七、四三三、〇六七	七、二、八	一〇、三
獨 國	千馬克	一、四四六、八〇三	一、一〇〇、七六八	二、五九三、四四五	八、四、〇二七、六九五	五、五、八	一、三
伊 國	千リラ	一、六〇、三八二	一、一九、九九五	二、七九二、五五〇	二〇、四八六、九二三	五、七、八	五、八
カナダ	千ドル	一四二、五七七	一五三、六八八	三三、七、一〇七	四四、五、七三三	六、二、七	三、四、五
和 蘭	千フロン	一〇、五〇八	六、八、三九九	三三、二、九九	九、九、九三九	三、三	六、三
日 本	千円	一四、〇九四、一四四	一、三、五、三九、六七五	七、五、八、七六、七五三	一、九、二、四、二九五、一四〇	一、九、〇	一、六、三

即ち、我日本に於て、既に已に國民經濟の需要を越ゆる大なる兌換券額は、更らに増發の餘地極めて大なるものであつて、タトへ保金高が解禁によつて減ずるとも他の諸國の割合に、否戦前の最高割合なる英國の其れ丈まで下るとしても未だ多大の餘地を剩して居るのである。此れは在外正貨を勘定に入れない計算で、猶且つ、然るのである。其れに在外正貨の作用が加はるときは、我兌換券増發の危険は、金輸出解禁を以てしては迎も防ぎ切れないこと明々白々たるのである。

六

抑も現行の日本の兌換制度なるものは我邦が世界の貧國であり、殊に金を入手すること甚だ困難な地位にあつて、到底兌換券の全部の準備に充てるだけの金を收得すること能はざりし過去の國狀を基礎として作られたものである。是れ一億二千萬圓の保證準備を許し、更らに一定の條件の下に制限外發行なるものをすら許すと云ふ制度の生じた所以であつて、其の豫め慮つた條々は、何れも皆保金高の不足を不變的狀態と前提したものである。今日の如く金の充實し、否國民經濟の需要を超過する夥しき額に達するなどと云ふことは、夢にも考へることの出来ない狀態に應じて設けられたものである。然るに今日は實に我兌換制度の依つて立つ根柢が全然反對の狀態を呈するに至つたのである。今日に於ては、保金の不足を常態と見て打建てた制度の全く國情に適せざるは勿論のこと、却て反對に、金のダブツキより來る缺陷弊害に對する防止法を新たに設けねばならぬ急要に迫まれて居るのである。世界經濟に於ける日本の地位の此根本的變革を今慮外に置いて、唯目前の事實のみに着眼して解禁々々と急ぐのは、實に思はざるの甚しいものである。否、私を以て見れば、甚だ多くの危險が其の内に包藏せられて居るのである。

る。

今此の兌換制度の根本的變革に論及するに先ちて、私は金輸出解禁の決して輕々に處斷せらる可きものでない事實を指摘して警告せねばならぬのである。今日は實に世界經濟の恢復(レパレーション)と改造の時期である、而して又其爲にも獨塊を初め露國の經濟的開國と救済とが世界連合の力によつて爲されねばならぬ時である。其れには色々な施設が必要であるが當面の問題は、各國に於ける貨幣購買力の恢復と安定とを實現することが第一の急務である。此の爲めに——而して又た戰爭の爲めに破壊せられた諸國の經濟恢復の爲めに——最も必要なことは、戰爭の爲めに起つた世界に於ける金分布の根本的變動より來る弊害を匡正すること之れである。乞ふ左表を見よ。

世界金保有高百分比率表(世界全體を一〇〇とす)

聯合國 (英、佛、日、白、希)	一九一三年	一九二三年
	三五・四	二二・〇

三 經濟危機と經濟恢復

一五八

中立國	(西、和、瑞典、丁抹、 諾威、葡)	七・五	一三・〇
中歐同盟	(獨、奧、ユーゴスラヴ キア、チエツホ・スラヴ キア、フィンランド、プ ガリア、波蘭、ルーマニア)	一七・〇	三・八
歐洲合計		六〇・〇	三八・八
其他	(米、日、アルジエンチン、 カナダ、印度、漆洲)	四〇・〇	六一・二
聯合諸國		一九一三年	一九二二年
英		五・〇	九・八
佛		二〇・〇	八・八
伊		八・五	二・七
中立諸國			
西班牙		二・七	六・二

戦前には歐洲が世界在金の六割、其の他諸國が四割を保有して居たのに、今日は其れが全く反對になつて、歐洲は三割八分八厘、其の他が六割一分二厘を保有して居るのである。これを重なる國別にして見ると左の通りである。

和蘭	一・八	三・一
瑞典	一・〇	一・三
中歐同盟	〇・八	〇・九
獨逸	八・二	三・〇
奧地利	七・四	一九二〇年 〇・六
其他諸國	二〇・四	四〇・三
米國	一・九	七・八
日本	四・二	二・〇
カナダ	二・二	一・五
印度	〇・六	一・五
漆洲		

佛國は戦前は世界の金の二割を持つてゐたが今は僅かに八分八厘しか持たず、伊太利は八分五厘から二分七厘に落ち、獨逸は八分二厘から三分に落ち、奧は七分四厘から六厘に落ちた。之に反して西班牙は二分七厘から六分二厘に昇り、和蘭は一分八厘から三分

六 何を緊縮する

一五九

一厘に昇つた。米國に至つては二割から四割に昇り、カナダは四分二厘から二分に落ちたが、此間にあつて我日本は實に一分九厘から七分八厘に上つたのである。此く世界に於ける金の所在分布が根本的に位置を代へたことは、今日の世界經濟變調の結果でもあり又た其の原因でもある。之を何とかするに非れば、紊亂した各國の幣制を立直すことは迎も期し得られないのである。國際經濟會議が眞面目に此任務を盡さうとするならば、必ず此問題に指を染めなければならぬ。而して私は早晩其時が來ると思ふ。然る時には、第一に米國、第二に西班牙和蘭及び我日本は、世界救済の爲めに其の持てる金を奉仕的に提供す可き道德的義務を有する。殊に獨露救済の爲め、又た英國立直しの爲めに此れが必要と感ぜらるゝとは、現下の大問題たる戰時貸付金の棒引き若くは輕減と關連して、必ず起り來らねばならぬ問題である。而して此の救済の爲めに奉仕することは、其の奉仕國殊に我日本をして世界經濟場裡に大いに重きを成さしむる所以であつて、其れは必竟廻り廻つて其國の殊に我日本の永遠の利益を進むる所以である。言換れば、我邦の保有する十何億（七月三十一日には所謂在外正貨を入れた總額十八億五千五百萬其の

中在內高は十二億三千九百萬圓）の金は決して仇や愚に取扱つてはならぬものである。近い將來に於て、世界が其の秩序的生活に立戻るに際して、重大なる任務を盡す可き、又盡し得べき極めて大切なものである。單に物價調節の爲めと云ふ——其も間違つて居る所——要求の爲めに、前後をも顧みず放散せしむ可きものでは斷じて無いのである。今の解禁論——解禁と云ふ文字の極めて誘惑的であり、耳に快きにも拘らず——なるものに私の極力反對するのは、更らにより、有効に、より、有益に世界の救済と恢復との爲めに、其れが積極的に使用せらる可き機會あるを確信するからである。決して好んで異を樹てんと欲するが爲めではない。

七

今俄かに金の輸出を解禁するよりも、更らにより、緊急に爲さねばならぬことは、我現行兌換制度の根本的變革之れである。即ち正貨さへあれば、日本銀行は其の欲する儘に、國民經濟の眞正なる需要に顧慮を用ゐず、兌換券を發行し得ると云ふ現在の制度の徹底的

打破是れである。此の制度あるが爲に、而して更らに其の缺陷を増大す可き在外正貨引當發行を認むる爲に、日本銀行は我經濟界の眞正なる需要に應じて、其の兌換券を發行するのでなく、主として日本銀行に融通を求むる借金人の需要——之をファイクチャーデマンドと名けてもよし、否モット適切に云へば、投機的需要、思惑的需要と稱す可きである——を目安として兌換券を發行する。之れが爲めに眞正の事業の爲めならざる冒險的思惑的借手は得意に其魔の手を延す。更らに朝鮮銀行や臺灣銀行に至つては、此の日銀兌換券を準備とし、更らに其の外にも若干の保證準備を許されて、ドシ／＼兌換券を發行し、而も此等の銀行にして普通貸付銀行を兼ねると云ふ不都合千萬なる現制の下に於ては、預金高より來る制限でふコントロールを被ることなく、散漫、放縱に貸付けをする。鮮銀が今、回收不能の貸付金無慮六千萬圓を有して青息吐息であると云ふのは、此の根本的に誤れる制度の賜である。臺銀の必迫も亦然り。日銀が此兩銀行と同一の運命に陥らぬのは、其特權的地位の爲めである。此の特權によつて日銀は鮮銀臺銀等にあつては、銀行其ものが被むる苦痛を、甘く國民一般に轉嫁し得て居るので、鮮銀臺銀にあつては、主と

して迷惑するのは其の株主であるが、日銀に在つては株主は些も迷惑せず、國民全體をして迷惑せしめて居るのであると云つても、必ずしも過言ではあるまい。日銀の兌換券伸縮が多くの場合、其の貸付け額の伸縮と離る可からざる關係を有して居ることは、茲に絮説する迄もない處である。即ち現在の制度は、兌換券發行額と國民經濟の眞正なる需要との有機的連絡を絶つたものである。輸出解禁をした丈けでは、決して此く絶たれた連鎖は結び付け得るものではない。否此の制度の嚴として存する限りは、金の輸出と兌換券の縮少とが、必ずしも必然的に自然的相互作用を持つことすら六ヶ敷のである。解禁さへすれば、金の輸出は當然必然に兌換券額の減縮を伴ふと思ふのは、極めて皮相の見解である。斷じて斥けられねばならぬ謬斷である。添田博士曰く、『自然の法則に従ふを以て最善事の策なりとす』時事新報八月十六日號 誠に然り、貨幣問題の取扱は自然法則に従ふが最善である。乍併、今單に金の輸出解禁をした丈けで、自然の適法に従ふものなりとは、餘りと云へば我兌換制度の實情を輕視せられたる論で、財政の泰斗たる添田先生に此言あることは、實に全く不可解の事である（添田博士の立場の變化位、幣制上に於ける我國情の

根本的變化を適切に例示するものはない。今無條件的解禁論、自然一任の保金減少論を力説せらるゝ博士は、僅か數年前に於ては、日本は如何なる價を拂つても、保金額を増大せざる可からずとの方針で、如何はしい某金山に數百萬圓の極めて大膽なる貸付を敢行し、甚だ不自然的なる保護を加へ、其の結果興銀が殆んど其の全部回收不能——即ち貸倒れ——に苦んだ時の興銀總裁添田博士と同一人であり、此の巨萬の大浪費を可とせられた博士は、今國民節約プロパガンダの大先達たる博士其の人であるからである。誠に時勢の變化ほどイロニツシュなものはないのである。日本銀行は現在の制度と現在の我國情の下に於ては、日本の銀行でなく、日本の投機的借金人の銀行であると稱せられても、殆んど之れを辭することは出来ないと思ふ。具體的の例としては、例へば横濱の茂木某救済の如き、中央銀行としては實に分を外れるにも程のあつた舉を敢てしたものである。大坂の石井事件、鮮銀の貸倒れ行惱み、臺銀の整理難否其他多くの類似の事件は、其の有力なる原因を思惑的貸付本位の我兌換銀行制度其のものに有する。而して其は單に所謂財界を蠶毒するに止まらず、國民全體をあげて物價騰貴の爲に苦しめつゝある。然るに

下層いぢめの暑休廢止や消費節約などと云ふ、火を以て火を救ふ底の事をやり乍ら、此禍根を絶つことに就て些も思を旋らさないのは、實に驚き入つた次第と云はねばならぬ。否、獨り此れに止まらない、此の不健全なる我幣制はやがて、生産業者、販賣業者の殆んど全體を驅つて、機會だにあらば獨占の特典を獲得し、暴利を收得しようとしてせしめる。此理を有力に證言するものは物價指數の種別的解剖それである。

均しく物價騰貴と云ふが、其騰貴の割合には様々ある。即ち左表を見よ。

明治三十三年十月の日銀指數に對する

大正十一年六月の同指數

(總平均二倍六分一厘)

- 一、四倍以上になつたもの
鯉節(四四八) 石材、墨表、日本紙、生漆(五二八) 薪(三八七)
- 二、三倍以上になつたもの
鹽米(三二四) 砂糖、製茶(二九六) 味噌、日本酒(二九六) 麻、木材(二九一) 煉瓦、瓦、皮革、石炭、炭

六 何を緊縮する

- 三、 二倍半以上になつたもの
小豆、魚肥、西洋苧(二四六) 生絲(二四九) 絹裏地、綿絲、金巾(二四三) 縹綿、洋紙、木蠟、マツチ(二四三) 石油
- 四、 二倍以上になつたもの
大麥(二一三) 裸麥、小麥、大豆、小麥粉、油、精醬油、鶏卵、絹手巾、眞綿、白木綿、フランネル、モスリン、藍、セメント(一九三) 板硝子
- 五、 一倍半以上になつたもの
肥料精、油、刻苧、羽二重(一七三) 甲斐絹、毛織子、洋鐵、洋釘
- 六、 右以下のもの
銅

騰貴率の最も高いものは生漆の五倍二分八厘を筆頭として、鯉節、石材、墨表、日本紙、薪等である。之に次ぐものは米、砂糖、製茶、味噌、日本酒、麻、木材、煉瓦、皮革、石炭炭等である。即ち我々の日常必需品に屬するものが多く、而も大部分日本人の生活に特有なもの、外國品の競争なきものである。其反對に騰貴率の最も少ないものは、一倍一分八厘の銅を筆頭とし

て、肥料精、羽二重、甲斐絹、毛織子、洋鐵、洋釘、板硝子、セメント、藍、モスリン、フランネル、白木綿等の外國へ輸出し又は外國から輸入するものと、大麥、裸麥、小麥、小麥粉、大豆等である。此の解剖は我々に何を語るかと云へば、我日本に於ける物價騰貴は、世界經濟の影響を受けること最も少い品種に最も高く、其の影響を被むるものに最も低く、殊に日本人の生活に特殊な生活必需品に於て騰貴の割合が高いと云ふことを語るのである。此等の品種の生産者なり販賣者なりは、外國品の競争を受けない地位にあるから、あらゆる機會を捉へて賣惜み買占め、其他の獨占的作用を利用して價格を牽制しつゝあるのである。而して彼等は今日の情勢に於て、不自然極まる制度となつた我兌換制度に依る兌換券の増額を、最も多く利用しつゝあるものと云ふ可きである。

茲に於て私が何を緊縮するかとの發問に對する答は自ら與へられる。曰く第一に緊縮す可きは兌換券の發行額である。第二に放漫なる銀行貸付である。第三に生産業者、販賣業者獨占可能の範圍である。兌換券の緊縮を實現するには在外正貨引當て發行と云ふことを即日廢止し、更に兌換券發行の最高總額を(無論杓子定規的なる可からず)適

當の機關と規定とによりて、伸縮的に規定する制度とすることを要する。鮮銀、豪銀の兌換券發行は之を日銀に統一す可きは勿論である。是れが出来れば第二の緊縮は大部分は必然的に相伴つて行はれる。第三の緊縮は、私が社會事業調査會に於て發議した不當聯合協定、申合、賣惜、買占めの徹底的取締によつて行ふ可きである。此の三種の緊縮を斷々乎として實行するに非る限り、現内閣の物價引下げ政策は、徒勞に歸するものと云はなければならぬ。即ち私は此三項の實行を以て、世界經濟に於ける我邦の地位の變動に順應する一切の物價引下げ政策の根本要件なりと確信するものである。

|| 大正十一年九月號『改造』掲載 ||

大正十五年三月附記。私は今日は右と反對に金輪解禁論を主張しつゝあるものである。其は世界經濟の恢復が、兎に角ドーゾ案によつて實行の緒につき、他方我邦經濟界の狀況が變化したからである。私の現在の考は大正十四年二月大阪に於ける實業同志會講座に於ける『金輪解禁尙早論を駁す』と云ふ講演に述べて置いた。其筆記は同會發行市民講座(大正十四年四月號)に載せてある。

七 世界經濟の恢復と日本支那米國の使命

一

今日世界の經濟が非常な窮態に陥つた原因は何ぞと云ふ事は極めて簡単に之を答へ得るが如く思惟せらる。今其最も代表的な説をあげて見ようならば、九月號の改造に掲げた堀江歸一博士の『歐洲の經濟界は何時に爲つて復興するか』と云ふ論文中の、次の一節の如き是れである。曰く

何故歐洲諸國の經濟社會が窮乏のどん底に陥つたかと云へば、其最大原因は、戰爭當時の軍備費の財源に當つる爲めに國民の所得を收用し、而して之れを濫費したる一方に、財源の一部を公債の發行に仰ぎ、公債元利金の形に於て戦後の今日に負擔を及ぼしつゝあるの一事に外ならない。

と、是は獨り堀江博士の所論であるのみに止まらず、殆んど大多數の人々の見解を代表するものであり、少くとも我日本に於ては、何れも右様に手取り早く解釋せられて居るようである。其等の説を平易な言葉で云へば、歐羅巴に於ける五ヶ年間の大戦争の始から其の戦争中に互つて有ゆるものを使ひ了つて、尙ほ夫れにも足らずして國家として負擔を將來に遺し、今日之れを償却せざるべからざるを得ざる事、是れ歐羅巴現下の大經濟難を來せる最大の原因なりと主張するのである。私は斷乎として此の見解を以て一の大なる誤謬なりと認める。而して此の誤謬を打破することは、世界の經濟恢復の問題を考究するものが、先づ第一に爲さねばならぬことであると私は信ずるものである。現在の世界經濟難が、單に此の度の大戦争にのみ基因すると云ふことが眞ならば、我々は先づ大なる疑問を起さざるを得ない。曰く何故にかくも這般の戦争のみ永續的にして廣汎な經濟難が伴ふか。戦争なるものは人類の歴史に於いて決して珍らしいことでない、新しいことでない。我が人類は過去に於て實に數へ切れないほど屢々戦争をやつた。今度の戦争はその期間が永く、參加した國の數が多かつたことは云ふ迄もないが、然し是は必竟比

率的の問題である。乍併昔の戦争の規模が其の時代々の文化の程度に對して持つ比例は、今度の大戦争が歐洲今日の文化及び富の程度に對して持つ比例よりも小なりと斷言することは出来ない。就中物質的破壊の比例は、此度の戦争に於て決して最大であつたと云へないのである。兎にも角にも世界全體を通じて經濟上社會上に於て、今日の如く行詰りたる状態を現出したる事の最大原因を戦争に歸するは非常に誤つた考へ方である。

此の度の戦争は非常に多くの物質を亡したに違ひない、乍去、イギリスの「者ジョン・メーナード・ケーンズ氏は次の如く謂つて居る。『世界大戦争の持來した物質的破壊は、歐羅巴に於ける現時の節約と努力とを以つてすれば、僅々數ヶ年間に恢復する事は容易なことである。假令ば、佛蘭西及び白耳義に於て戦争の爲めに破壊された家屋數、或は又西歐羅巴全體を通じて破壊された家屋數は、一ヶ年或ひは二ヶ年間に新たに建築せられる數以上には出て居ない、戦争の爲に破壊された鐵道の延長は、歐羅巴に於ける一ヶ年間の新建設哩數と殆んど同じである』と。誠に其の言の如くであつて、戦争の爲めに被つた物

質的破壊は、歐洲の平時生産力の能率を以つてすれば、戦後四年の今日に至つては、既に已に十二分に恢復せられ居る筈のものである。ケーンズ氏は又た云ふ『實際戦争の爲めに土地は荒されたが、夫等は今日略ぼ恢復され居るのである。殊に著しき例は船舶である。戦争の爲めに世界の船舶は非常な打撃を受けたが、一九二一年の末に於ては既に全く恢復されて、今日世界商船の能率は戦前の其れに比して少しも劣つては居らぬのである』と。

數歩を譲つて假りに破壊されたる家屋なり鐵道なりが、三年四年間の建設數に匹敵するものなりとしても、戦後四年を経過した今日に於ては、既に其の半分乃至三分の一は恢復せられたる可き筈であつて、而して實際恢復せられて居るのである。戦争による物質上の損害のみに着目するは非常なる間違である。物質上の損害は大なるものに相違なきも、歐羅巴否、世界の人間が既に作り出し、又た將來作り出さんとしつゝある物質上の富に比ぶれば、決して大なりとは謂ひ得るのである。世間多數の論者は、一方に於ては戦争の爲めに被つた損害を餘りに過大に見積り、他方に於ては吾々人類が經濟上の富、物質

上の富を作り出す力は餘りに寡少に見積つて居るものである。此の二つの誤謬は、五ヶ年間に亘る戦争が如何にして支へられつゝあつたかを考ふれば、容易に是正せらる可きである。

二

五ヶ年の永きに亘る戦争に於ては、成程堀江博士の言ふが如く公債を募り其の手取金を支出して、兵隊の食費に大砲に鐵砲に、或は其の鐵砲より射出す彈丸に使ひ了つたのであるが、其の今日に残つて居るものは、唯だ債務と云ふ無形の物である。兵器食料品彈丸等の有形物は、皆現實に既に消費せられ終つて居るのである。一九二二年十月十五日になつて始めて打出さる可き彈丸を以て、ヴェルダンの城砦を射撃したのでは決してないのである。其の時、其の場所に存在した食物を食し武器を使用したので、其の一部は戦前よりの持越品、一部は戦時五ヶ年に亘り歐洲各國民の生産したもの、並に歐洲以外よりの輸入品を以つてスツカリ負擔濟となつて居るのである。決して今日まで繰延されて、歐

洲各國民の負擔を加重しつゝあるものではない、負擔となつて繰延されたものは唯債務あるのみである。今日償却されざるものは政府の債務に過ぎざるものである、砲臺鐵砲等の實物ではない、政府が償却する義務あるものは錢である、武器や食料品ではない。今日各國政府が支拂はざるべからざるものは單に錢である、所が今日の人間の大多數は資本主義の上に築かれた貨幣制度に深く囚はれて居る結果、貨幣の支拂を過當に重大視することが習慣となつて居るが爲めに、此の簡單な道理が分らなくなつて仕舞つたのである。無論年々債務を償却すると云ふ事は輕々しいことではないが、然し其れは左程恐るべきものではない。歐洲戦争に依つて歐洲各國が非常に多くの物質を減ぼした、重き負擔を將來に残したと云ふ事は、一面即ち堀江博士専門の立場たる財政金融上の考察としては正しいに相違ないが、實體的の立場から見れば大いに割引するを要するのである。金融の上にては來年生産すべき物を現に生産したるものとして取扱ふ、即ち「先物」を賣買する、これは商賣の上には出來得る。然し其れは決して實物ではない。吾々の體を温むべき着物は、現に出來し居る綿糸綿布を以て作つた現實の木綿着物でなければならぬ。

來年生産せらる可き綿衣を今着るといふとは絶対に出來ない。所が今日の産業及び金融界なる者は現實の物のみでなく、所謂先物賣買なる嘘の商賣によつて立つて居るのである、さうして儲けたりとか損したりとか言つて居るは、一面から見れば實に馬鹿氣た事をして居る次第である。所が大抵の場合に於て、斯くせざれば取引を爲す能はざる者、如く考へられて居る。然し乍ら今度の戦争に依つて惹起された眼前の被害は、左様なる偏金融眼を以て見るを許さない、堀江博士の立論は金融一點張り論である、而して大抵の人も亦同博士と同様の見方を爲し又爲しつゝあるは、私の憤慨せざるを得ざる所である。歐羅巴の五ヶ年の戦争が將來に残したものは借金である、帳面の上に債務が残つたのである、決して實物ではない。債務と云ふものは實物でない。而も其れは一の大なる特徴を有するものである。曰く帳消(キアンセル)若しくは踏倒(レビュージェート)さうとすれば何時でも踏倒し得るものである、踏倒せば貸した人が困るのであつて、必ずしも人類全體が困るのでない、無理をして人類に大害を與へて迄も借金を返す可き理由はない。無理に返さうとする爲に人類全體に大害を持來す場合には、私共は借金踏倒しを斷乎と

して主張せねばならぬのである。其の額が何千億に上らうとも、抑も金と人類全體の利益とは到底比べものにならないのである。何千何萬の債權者があつて、其金が返らねば多數の人類が生きて行く事が出来ないと言ふ場合には、必ず返すことを要求す可きであるが、又た他方に於て、債務國に於て其の辨濟が非常に困難で、此の辨濟の爲に人類全體に害を及ぼす場合があらう、其の場合には吾々は借金踏倒しを主張せざるを得ないのである。而して此の經濟道德的勇氣は甚だ必要であつて、今日の歐羅巴今日の世界經濟の窮乏を救ふには、此の勇氣がなければならぬのである。借りた物は必ず返さざるべからずとか、貸した物は必ず取戻さざるべからずなど云ふ財産本位の權利義務思想に囚はれた頭から見れば、私の言ふ所は甚だ不埒千萬に聞へるだらう。例へば佛蘭西のアノト¹の如きは、斯る囚はれたる頭から盛んに驚入つたる愚論を今主張しつゝある。近論「經濟形而上論」吾々は斯くの如き愚論を一日も早く此の世界の表から驅逐せねばならぬと信ずるものである。

三

今日の世界經濟の行詰りは、這般の歐羅巴の戰爭のもたらした物質的破壊も其の原因の一つに相違ないが、然し其れは諸原因中の最小なるものなりと私は斷言するのである。今日の行詰りには猶他に三大原因がある。其中最も重大な原因は戰爭中に存せずして戰爭の後に在る、即ち其れは、休戰が成立し多數の各國代表者がヴェルサイユに集まつた其の瞬間から始まるのである。一九一四年八月幾日かの戰爭の始まつた時にあるのではない。ヴェルサイユ會議の時から始まつたのである。ヴェルサイユに集つた各國全權共は、夫々公平正義の考を以て居たのであらうが、いざ集つて見ると群衆心理とも言ふか或は外交官心理とも言ふか、何れも皆頭が狂ひ出し、其のぐれたる頭より出來たるものが平和條約となつたのである。恐らく此ヴェルサイユの平和條約程莫迦くしく、且つ人類を害する文書は歴史上類稀なりと云はざるを得ぬのである。何故となれば、該條約なるものは、基督の所謂右の頬を打たれれば更に左の頬を出してふ無抵抗主義より出で

たるものにあらざれば、又汝の隣を愛せよと云ふ主義より出でたるものにも非ず、常識的な正義の觀念より出でたるものにもあらず、惡魔の如き精神より出でたるもので、人々互に憎み合ふ荒みに荒み切つた、最も下劣なる精神の結晶物である。此の下劣なる精神の産物が、實に今日世界を行詰りの状態に陥らしめた最大原因である。即ち根本の問題は物質の上にあらずして人の心の上に、各國民の肚の中に在るのである。其れはマテリアルではないスピリチュアルである。従つて之れは我々の心の持ち様一つで除却しようと思へば除却し得るものである。人の心さへ持ち直せば宜いのである。戦争の始まらざる迄の各國人の國際心理は、大體に於て左迄下劣險惡なものではなかつたが、戦後に於ては、各國共に同情寛恕相愛の念は極端に衰へ、國民と國民、人と人との間に實に甚だしき憎惡の念と猜疑心とが瀰漫するに至つたのである。是れ今日の世界を困難の極に陥らしめた最大の原因である。従つて問題の解決は先づ以つて人の心理上に在るのである。

獨逸に對して戦争中各國が極力憎惡の宣傳を行つた。獨逸は憎い奴だと種々な宣傳プロパガンダを行つた、食糧に窮した獨逸は赤ん坊の死屍を絞つた脂肪から取つたバター

を喰つて居る杯と嘘も甚だしきプロパガンダを行つたのである。然るに戦争の濟んだ今日となつては、右の如き無茶なプロパガンダが非常に崇りを爲して居るのである。私は當時莫迦も休み〜言つて呉れと切言したのであつた。近頃日本でも大分宣傳と云ふことが行はれて居るが、其の多くは實に莫迦氣たものである。然し莫迦氣たる事も度々宣傳する時は相當信用を得るようになる、却々恐るべきものである。戦争中佛蘭西は極端に獨逸を憎んで、種々な宣傳を行ひ嘘を込み込ませた。日本でも獨逸を憎み、大學の先生達が獨逸の書物を一切讀まざる事としたるなど、馬鹿らしいことが新聞にれい〜と書いてあつた。

斯くて獨逸を憎むの念の向ふ所は皆に獨逸のみに止らずして、獨逸に加擔したるもの一切を憎むに至つた。今日イギリスとフランスの間の乖離して荒みに荒みつゝあるは、無理に獨逸を憎ましめた結果である。坊主が憎ければ袈裟迄憎いと云ふが如く、獨逸を憎むの念は憎んで憎み足らずして、更らに他の物をも憎むに至つたのである。此點より觀ても冷靜に考ふるならば、今日の獨逸は素より各國間の國際問題は確に解決し得べ

きものである。やれ海牙會議、やれジェノヴァ會議と諸種の會議の開かるゝも、根本問題たる國民間の心持ちの既に憎み合ひ荒み合へる折柄、如何で効果を收め得らるゝであらう。彼の労働會議の如き又然りである。第二回、第三回と開かれ其都度代表者選出に就て適法不適法の問題を惹起し、派遣されたる代表も何等の効果とて收め得ず歸來するが如き愚の極みである。何故日本は斷然参加を拒絶せざるか、綺麗に斷るべきである。如何に會議が開かれたればとて、今日の歐羅巴人の心の變らざる限りは何にもならないのである。お互に憎み合ふ心を捨て、戦前の一九一三年に立歸るにあらざれば、今日の難問題はとて解決の見込は立たない。

四

斯く民族間の憎惡の念昂じて今日の世界に動搖を來し葛藤して居る爲め、戦争に依り受けたる物質上の損失を恢復する事出來ず、又新らしき生産が殆んど停止したのである。其の反面に於て此の憎惡の爲に無形の富を非常に減したのである。其の中で最も大なる

ものは何かと言へば、政治的信頼と政治的結合の破壊是れである。其の結果として國際的協調が甚だ無意味になつて來たのである。ヴェルサイユ條約作成に方つてウキルソン、ロイド、デューヂ、クレマンソー等は世界の地圖上に勝手に線を引いて、チェツホスロヴァキアとかユーゴスラヴィアとかポーランドとか名付ける小國を民族自決主義の名の下に獨立せしめた。日本でもウキルソンは偉いと賞揚した人が尠からずある。姉崎博士は其代表論者であつた。今日は如何である。ウキルソンはやれ國際聯盟やれ十四ヶ條などと種々なる案を提唱せるも、一も實行せずして逃げ去つて仕舞つたではないか、ウキルソン位茶ラツポコな人間はない、無責任極まる人はない。彼は今や精神的に破産して了つた者である。又更に最近のイギリス電報に見ゆる如く、ロイド、デューヂも又労働黨より排斥を受け辭職をさへ勸告されて居るではないか、彼等が主張して獨立せしめたるチェツホスロヴァキア、ユーゴスラヴィア、ポーランドは今如何、是等の小國は今や世界中の最も厄介な國々となつて居るではないか。私は此程朝鮮に旅行したる際、朝鮮の有志の人々から直接に幾度か獨立の主張を聞いた、私は此れに同情せざるを得ぬ。乍併朝

鮮は今直ちに日本から離れて果してよく獨立の生活を爲し得る國たる事が出来るか、現在のルーマニアやチエツホスロヴァキアやポーランドなど云ふ一夜作りの小國は、如何なる状態に在るかを思ふならば、朝鮮の獨立を主張する者は靜に考慮せねばならぬのである。ポーランドの如き今日にては獨逸の馬克よりもポーランド馬克は下落し悲惨な状態に陥つて居る、ウキルソン等の出鱈目は茲にも證據立てられて居るのである。殊に今問題となり居る希臘と土耳其間の争の如き、ヴェルサイユ條約の馬鹿さ加減の生きた左券である、土耳其を酷めたいと云ふので其の地を割き取つて希臘に與へても、希臘は之を治める力がない爲めに、今日の如き状態となり希臘は見事に敗北し、土耳其は勝者として聯合國に對して居る。歐羅巴の政治家と云ふものは多くは嘘、胡麻化しをやつて居るが、今日の如く人心が荒んでくると、之を押へつけて善い方へ向はしめる正義の力が殆んどなくなり、悪い方面のみが愈々鮮かに出て来る。日本に就ても亦然り、最近起つた問題たる鐵砲を積んだ汽車が何時の間にかすり代られた杯云ふ事は、今世界を支配する暗黒面の一縮寫圖である。一體チエツホスロヴァキアを援けるならば、何故他の社會主義

國をも援けざるか、其の方針が定まらずして兵を出すとは愚の甚だしいものである。斯くて此の出兵は容易に撤兵せず、之が爲にバルチザン虐殺事件を生じ、とゞの仕舞ひには汽車がすり代へられたなど、日本の軍人は天勝以上の大手品師で、汽車すり代への手品を使つたのである、新しい辭典は『軍人とは汽車を種に大手品を使ふ者なり』と云ふ新定義を入れなければならぬ事になるであらう。實に馬鹿々々しい世界ではある。

此く極端に民族互に憎み合ふ事は一九一四年以後のこと、此心を取り去つて戦前の人々の心持ちに歸さしめる事が今の急務である。夫れには人民を指導するブリーチアが必要である、此使命を盡くし得るブリーチアは、差し當り日本と亞米利加と支那との三ヶ國であらうと思ふ。此大使命を果すには、此利己的利害關係を離れなければならぬ、日本の如きは利害關係を離れた立場に在るので説教者として最も適當である。然し人を説教せんとするには、先づ己れより善人とならねばならぬ。日本は過去二百五十年間に於て實に立派な歴史を持つて居る、國を封鎖して居つた爲に物質的の進歩を遅れしめだが、其封鎖の爲めに國際泥棒を爲さずして來た。歐米の天地に於ては十六世紀頃より

は漸く泥棒は増加したるも、日本は十六世紀以降二百餘年間、國として他國に泥棒を働かせるを侵掠したことは嘗てなかつた。斯の如き例は實に稀で、私は之を以て日本の最大の誇りとす可き所と信ずる。日本人は萬世一系の國體を誇りとするが、其れは自らに對しては慥かに大なる誇りである。其反對に、支那人、朝鮮人、歐米人の何れも此誇りさ加減を能くは理解し能はぬであらうが、徳川氏二百餘年間泥棒を爲さざりし一事は、自らに對しても又他に對しても大なる誇りとす可き事、殊に泥棒せられそうなる國々は能く其有難味を感じるであらう、支那も米國も此點に於ては日本と其誇りを共通に有する。支那は國內に於ては今日まで泥棒は朝野共盛に行はれて居るが、國外に向つては永く泥棒を働かなかつた、朝鮮すらも之を完全な屬國とはせなかつた。否反對に支那は寧ろ泥棒される國であつた、又現に左様である。日本は泥棒もせず泥棒もされずの國で、其過去を誇り得るも、今日にては最早之を誇り得ざる國となつた。何故とならば、約五十年前其處女の誇りは破れた。爾來泥棒主義は漸次擴張せらるゝに至つて、獨り軍人のみならず實業家は實業泥棒、或は宗教家は宗教泥棒、又教育家は教育泥棒と云ふのを行ふやうになつたので

ある。然し其れは極めて新米なもので、必ずしも病膏盲に入つて居るものではない、之を一擲することは英佛などに比して遙かに容易である。米國もほゞ同様であらう。今日の歐羅巴の經濟を救ふには、此の泥棒主義を根本より打破らねばならぬのである。僅な金僅な物質を以てしても、到底世界を救ひ歐羅巴を救ふ事は至難である。先づ吾々の心持ちより代へざるべからざるのである。而して歐羅巴に向つて非泥棒主義、非侵略主義の大傳道を行らねばならぬ。斯くして世界行詰りの第三の原因を取除かねばならぬ。

五

我々が除却せねばならぬ第三の原因なるものは、一部分は我々の力を超越して居るものであるが、一部分は又た我々の力によつて左右し得るものである。其は何か、答へて曰く、經濟的周期に基づくコンジャンクチュア（景氣）是である。吾々の經濟生活は十九世紀の終り頃から始めて、一種の病氣に罹つて以來、今日未だ其から脱することを得ない、其病氣とは、我々の經濟生活が周期に支配されて時々間歇熱を起すこと此である。其周期

は十年二十年目といふ様に時を距て、起るのである、之が所謂景氣不景氣を來す、夫が急性になる時には恐慌となる。我々の研究の足りない爲に何年目に不景氣好景氣が來るか、と云ふ事を的確に豫知することは出來ないが、亞米利加等にはビジネス・パロメーター（産業晴雨計）と云ふのが出來て居るが、今日迄に作られたパロメーターは狂が多い、尤も種々作つた物を合せ見ると凡その事は判るらしい、此の頃は米國のハーヴァード大學英國の倫敦大學等で大分研究を進め、其の結果を時々公表して居る。

今日の世界的經濟難は其原因を今満足に取り去られても、何年何十年間の後には不景氣は再び來る、夫れを豫知することは、先づ吾々の學問の力では如何ともする能はざるものである。然し全く吾々の力を超越したものでない、我等は之れを知る事が出来る。恰度醫者が病氣を治す如きもので、如何なる名醫と雖も其病人が最早死と決したる、如何にするも生くる力のなきものなる時は、名醫も施すべき術はないが、生くる力あるものならば、それに藥を投じて其生くる力を助くることが出来る。經濟界の病氣も亦然り、其が生くる力ある限り、我々は夫々適藥を投じて健全狀態の恢復を圖ることが可能である。ソコ

デ私の診断によれば、今日の此の病氣を來したのは一種變態の經濟心理によるのである、當り前の經濟的心理の働きてなく、非常にがつかりした經濟病である。其のがつかりしたものに對して、更にがつかりするやうな藥を以て來るは甚だ不可である、今日歐羅巴各國中で物質上に於て既に漸次恢復して居るもの亦尠くないが、經濟心理の上に於てがつかりして居るが故に行詰りとなつて居る。然るに此がつかりした人氣を更に萎微沈衰せしむる如き事を爲すは其恢復を害するも甚だしい。私は此點からして、今、日本に行はれつゝある消費節約の宣傳を以て、極めて有害な否寧ろ危険な所業として斷々乎として反對せざるを得ざるものである。

六

私は現下の歐洲の經濟難を主として戰爭による物質的破壊に基因すと爲す説を斥けて、其の主要の原因は第一次的に戰時より始めて戰後に渉る心理的方面にありと主張した。其の心理的方面は更に之を二つに分けて見ることを要する。即ち第一は、民族と民

族國と國人と人との間に俄かに昂まつた憎惡嫉妬侮辱輕蔑等の念是れであつて、私は又此念を斯くまで増長させる主たる責任を、虚偽濫發の所謂「プロパガンタ」に歸せねばならぬと言つた。然るに心理的方面の第二は、右とは聊か趣を異にし、必ずしも其の全部が人爲的原因に胚胎するものではなく、一部は無論人爲的であるが他の一部（恐らくは其れはより大なる部分）は、人爲を超越する時運、契機の方に基因するものである、私は之を「コンヂアンクチュア」と名けた。經濟生活に現はれる群衆心理は、決して常に同一水準同一張力を持つるものでなく、却つて常に盛衰し、消長し、隆替しつゝあつて、其の狀恰かも潮の干満に於けるが如くである。此の事は近來米國の學者ミツチエル氏が特に綿密に研究して、幾種の著書に於て公けにして居る處である。否所謂恐慌の研究に指を染めた學者は、多かれ少かれ此點に意を注いで居たのである。其の中でも傑出したのは、マルクス批評に立脚したトウガン、バラノフスキー氏の英國の恐慌史研究是である。其の他にはジエヴォンスやジュグラ等の研究がある。私も去明治二十九年『恐慌及不景氣』なる論文に於て此研究を少し試みたことがある。此の消長の變遷は必ずしも物的に異

動が起ることを要せない、物的には殆んど此れと目指す可き變化の起らないのは、唯だ人心の張弛緊緩の作用によつて、經濟生活の活動が或は大いに活潑となり、或は著しく萎微沈衰する。此作用は人爲の工夫を以て之を若干左右し得ることは勿論であるが、然し其の工夫は屢々錯誤に陥り却つて豫期とは反對の結果を生ずることあり、若くは其作用が意想外に大である爲に、却つて害毒を醸すと往々にして存するのである。然しイクラ人爲の工夫を旋らしても、猶如何ともする能はざる不可抗的の要素も多大に含まれて居る。今日は實に一面に於て、此の不可抗的の自然作用によつて、人心の沈滯を來したのであるが、更らに他方に於て、此の沈滯を累加せしむ可き事情が多々存する、其の事情中最大なるものは、上段に指摘した民族間、個人間に於ける懷疑、憎惡の念の昂進是れである。此の昂進より起つた物質界の行詰は、更らに此萎微状態を深みへ深みへ導きつゝあるのである。世界の經濟恢復其の事を期するには、先づ此等の可抗的、可避的沈滯要素の除去から着手せねばならぬのである。其れには先づ以て人爲的に人心を萎微せしむる各般の事情状態を一日も早く撤去せねばならぬ。然るに今『消費の節約』などと呼號することは、撤去

ドコロか、却つて人心の沈滞、頹廢を更らに増進する所以である。元より冗費の節約の必要なる事は言ふ迄もない、乍去冗費の節約は決して消費の節約と同一事ではない、否全く別の事である。眞に冗費を節約せん爲には、却つて消費の増進を必要とする場合多々ある。労働能率の増進は消費の増進なくては望み得られないのである、殊に現在日本に於て消費の節約を呼號する人々の中には、次の様な驚く可き謬想から出立して居る人もある。曰く『日本の物價が下落す可くして未だ著しく下落せざるは、主として下層社會の購買力が未だ旺盛なるが爲である。上流中流社會は經濟界の實況に省みて著しく節約緊縮しつゝあるにも拘らず、下層社會は勞賃の騰貴により著しく其の購買力を増進せられた儘にある。彼等が購買力に富み、而して他面に之を制す可き貯蓄心極めて乏しき故に、彼等は遠慮なく生活用品は勿論、娯樂用品に對しても依然大なる需要を持つて居る。社會の大多數者たる下層社會の需要が大なれば、需要供給の理法により一般物價の下落し得ざるは當然の事理である。故に眞に物價引下げを實現せんとならば、此下層社會の大なる需要を制限することを急要とする。故に我々は彼等下層社會に消費節約の宣傳

を有力に行はねばならぬ、是れ物價引下げに取りて、最緊要事の一に屬する』と。私は之れを評して云はんと欲する、凡そはき違ひ論中此の論のように桁外れのものも亦た稀である。下層社會が購買力に富み、其需要が大なることは國民經濟の狀態として、是れ以上なき結構にして健全なる状態ではないか。若し物價の高いことの原因が右の一事のみに限るならば、物價の高いと云ふことは却つて歓迎す可きことではないか。一體物價引下げと云ふことは、何の爲めに、而して又誰れの爲めに要求せられるのか、云ふまでもなく、其れは國民生活の安定の爲めに、而して主として物價高きが爲めに、其生活の安定の務さる可き下層社會の爲めに要求せらるゝのである。然るに今日物價の高い事の原因が、下層社會が購買力に富めることに存するならば、我々は物價引下げの爲めに焦慮する必要は必ずしも有して居らぬのである。何となれば、下層社會生活の安定がおびやかされて居るのでない以上、其脅かしを排除すべき努力なるものは全然無用のことに屬するではないか。思ふに、右論を唱へる人々は口には國民生活の安定を云々するけれども、眞實は其の爲めに、今の消費節約の宣傳を必要とする次第でなく、實は勞賃の騰貴、從て生産費の

蓄む爲め思ふ存分に金儲けが出来ないで苦んで居る世の企業家資本主の利益を圖り、彼等に取つての生産費節減を期せんが爲めに、生産費中大なる部分を占める労働者賃銀の引下げを可能ならしむる可き準備として、労働階級をして其の消費（不合理のものも斗りでなく、合理的なもの、人間としての存在に緊要なものまでも）を節約せしめんとて、役所の仕事を捨置いて、節約宣傳の大道講釋に浮身をやつしつゝあるのではあるまいか。左様とでも解釋するに非れば、イクラ閑な役人だつて消費節約の宣傳などと云ふ時代錯誤も甚しい愚擧を、人心沈滞の今日に於て試むる所以は到底諒解し得られないのである。

七

假りに右の推察が全然當を得ないとしても、所謂消費の節約と云ふとは、自ら期せずしても結局資本主義曲庇の作用を有するとは、論者は毫も想到せざる所たるに相違ない。私は嘗て『資本増殖の理法と資本主義の崩壞』全集第五集 四六三頁以下と云ふ一文を『改造』に寄せ、マルクス等が生産は必竟消費の爲であるから、今日の様に消費と全然無關係に、單に資

本増殖本位で生産し、生産したものを消費し盡くす見込を持たざる資本主義は、此生産と消費との不調和を段々甚しくし、終に行詰りに陥つて、其自ら必然的に崩壞するものであると唱ふるとの誤謬たる所以を指摘した。之に對して河上肇博士は、其マルキシストたる立場から有力にマルクス論を擁護せられて、私の説を斥けられた。此事は孰れ河上博士の議論全部を拜聴した上で、私として出来るだけ十分に御答しようと思つて居るが、今假りに河上博士に従つてマルクス等の立場を取るも、將た亦た其の反對に私の立場を取るも其の何れからも、消費節約の宣傳は必竟資本家曲庇の作用を有するに外ならないことを立證し得るのである。何となれば河上博士及マルクスもトウガンバラノフスキー及私共も、均しく現在の資本主義組織に於ては、生産と消費とが一致して居らぬ状態にあることを認めるものである。此の點は兩者全く見る處を一にして居るのであつて、實際の經濟生活を冷靜に考察する以上、此點は如何しても之を否認するわけには参らぬのである。而して又た此生産消費不調和の資本主義經濟の現状は、如何なる點から見ても決して希はしいものではない、萬全のものでないことを認むるに於ても、兩者は一致して居

るのである。ソコで次の結論を生ずる。既に現在の儘でさへも、生産と消費とが一致して居らず、常に生産のみ増進して消費は之れに追及し能はざることが、現社會の一大病弊であるのに、更らに此以上消費を節減すれば、兩者の不一致、不調和は益々甚しく、其の懸隔は愈々大となる外はない。即ち其れは現社會の病弊を救治せざるのみか、却て彌々益々之を助長せしむる外はない。而して其れは、資本主、企業家に取つて、目前の利益たるは言ふ迄もないと同時に、労働階級、無産階級の全體に取つては、目前にも永久的にも甚だ迷惑千萬な事たるは疑を容れない。されば今の消費節約と云ふことは、日本當面の問題として、口に國民生活の安定を唱ふるも、實は生産主宰者としての資本家の利益を圖るに過ぎざるものたるは勿論、現資本社會の全體から見ても、資本主、企業家を曲庇して、労働者プロレタリアを不當に押へ付ける結果を齎らすものである。彼等は實に其の生活を安定すべしと唱ふる國民大多數の生活其のものを脅かさんとするもの、其の基礎を破壊せんとするもので、此點から寧ろ一の危険なる宣傳を爲しつゝあるものなりと推論せざるを得ないのである。但し此の點は恐らく彼等が夢想だもせざる事であらう。其れは一に彼

等の淺見短慮の致す所である。大戰爭中にはれた英佛米其他の所謂『プロバガンダ』は虚言の連續的濫發の謂であつた。之れに對して日本に於て現に行はるゝ『プロバガンダ』とは、多くは愚劣思想の連續的濫發の謂であると云ふも、必しも誣言として一概に斥けることは出来まいかと思ふのである。兎に角現下最大の通患たる世界經濟の恢復を期するに方つて最も障碍となるものゝ一は、此の如き謬想によつて經濟心理の運行を倒逆せんとする試みであると云はねばならぬのである。

八

併し乍ら我々は唯右様の謬想を斥ける丈けを以つて満足するわけには行かない、右の様な謬想が今時を得顔に流行する其の深い根柢に溯つて考へて見なければならぬ。抑も右の様は謬想が輒く世人の賛同を得る所以は、資本主擁護、企業家曲庇の心理が甚だ普及して居るが爲めと見るより外はない、是れ實に世界經濟恢復の企を今日の様に行詰りの狀に陥らしめた共通原因から出て來るのである。今日の行詰りは、各國共に金融市

場本位の資本主義擁護企業家曲庇の根強い要求が齎したものである。殊に對外的資本主義、又の名資本的侵略主義、經濟的帝國主義、國際資本主義の要求が過當に尊重せられて居て、其れが對獨對露の諸問題の解決を沮み、他方には各國の幣制整理、聯合國相互外債の整理、又た不換紙幣整理の業を著しく妨害しつゝあるのである。今日はまだ資本主義脱却を夢みる可き時代ではない。對内的には現に勞農露國の例の示す如く、猶暫らく寧ろ資本主義の福音によつて救はねばならぬ時代である。日本も亦た然り、況んや支那、朝鮮をや。支那、朝鮮が現況より救ひ出される道は、對内的により、多く資本主義化するこゝと、殊に資本主義の弊害を先進國の例に鑑みて成る可く始めより杜絶し、其の良き方面には飽迄進捗し行くことが、此等諸國殊に支那に取つては緊要なことである。然り對内的には其の外に道はない。乍去、對内的に資本主義化すると同時に、英佛獨其他の先進國の様に、對外的に而も侵略的に資本主義化して、自ら資本的泥棒國の仲間となることは、全くこれを斷念して掛らなければならぬ。又た其れと同時に、歐米諸國——日本も其の内に算へねばなるまい、少くとも當分の間は——の資本的侵略主義のために、其の對内的資本

主義化による秩序的向上發展を破却せらるゝ危険の甚だ大なるものあることを明確に認識して、それに向つて十分に準備して、かゝらねばならぬ。

今對獨對露の問題が行惱みとなつて居り、露國の經濟的開國承認、救濟の業が遅々として進まず、獨逸の賠償金問題が未だに未解決の内にあつて、馬克の相場は急激の勢を以て下落しつゝある最大原因は、英佛米が其對外的資本主義資本的侵略主義を一擲し能はざるのみならず、或は彌々其の深みに突進しつゝあるが爲めと云はねばならぬ。而して又た他方に於て所謂近東問題の紛糾も、詮じ詰れば、英佛兩國を始め歐洲各國が、資本的侵略主義をあらゆる機會に於て實現せんとするより起るので、其主義の榮ゆる限り、到底近東問題の最終解決は得て期するべからざるのである。更らに又た東洋の天地に於ては、印度は言ふにも及ばず、支那の問題の愈々益々迷宮に入りつゝあり、終には支那の國際的共同管理又は少くとも財政管理、鐵道管理を斷行す可しなどの驚く可き暴論の生じ來るのも、各國が——日本も無論其中にあり——支那を以て資本的侵略主義の對象とし、犠牲としてのみ考察して居る事に胚胎して居る。然れば獨露支を始め世界の弱き國疲れたる

國劣れる國に取つて、其の存在を脅す大敵は此の資本的侵略主義であると云はねばならぬ。之に比すれば所謂赤化の宣傳とか過激主義の侵略とかは、殆んど數ふるにも足らざる事柄である。私は此共同の敵あることを自覺するの曉、支那が英米より愈々遠ざかり獨露に接近せんとする傾向を生ずるに至る可きを、今より逆睹し得可しと確信する者である。他の點に於て如何に異なる所ありとも、其の存在其ものを脅す敵が共通のものである以上、脅かさるゝ諸國が自然的に互に相牽引せんとするに至るは、理の當然である。而して此の種の聯結が、世界の平和的協調に及ぼすことの甚大なるは、管々しく之を論ずるに及ばざることである。世界經濟恢復の業が一日も緩することを許さない所以は、此點に思慮を旋すものに取つて、極めて顯著なりと云ふ可きである。

九

乍去此くの如き聯結が出來るとしても、其は其國々々に取つて、單に防衛的消極的の効用を有するに過ぎない、其の國民の生活を向上せしめ、其の厚生的努力を増進せしむ可き

作用は、差し當り此れよりしては望むことは出來ない。否獨露は勿論支那と雖も、此くの如き状態に陥らざらんことを勉めねばならず、又少くとも現に獨や露は之を勉めつゝあるのである。彼等は如何にしてか資本的侵略主義の浸染の爲めに、否その壓迫の爲めに、自國の秩序的發展が妨害せらるゝこと無きを得せしめんかと焦慮しつゝあるのである。獨り支那だけは——私は敢て支那の有識人士に聲高く此一事を警告したいと思ふのである。——まだ十分に此危険の迫りつゝあるを知らず、唯無暗に如何にして外國から金を借り出し得んかの一事に苦慮しつゝある、私は支那の諸君に警告する、諸君は今實に斷崖の前に立つて居るものである。諸君は借金は金で返さない場合には、必ず他の何物かを以て、而も甚だ割が悪く返さねばならぬことを知らねばならぬ。請ふ私に一の諧謔を許せ。If you don't pay back with sovereigns, you shall have in the end to pay with sovereignties (諸君はソヴェレン(現金)で返さなければ、ソヴェレンチー(主權)で償却せねばならなくなる)。外國借款の成効は諸君に取つては目前大なる利益であらう、然し其れは將來——而も近き將來——に於て、諸君の祖國、其主權に對して大なる危険を包蔵して居るも

のなるを諸君は知らないのである。諸君は實に氣の毒なものである。諸君が日貨排斥などと騒いで居らるゝ間に英佛米白等の資本的侵略主義は借款の美名の下に諸君の國を其の根柢を根コソギにせんとしつゝあるのである。諸君何ぞ早く醒めざる。日貨排斥は祖國を守る所以だと信ずる諸君何ぞ英米佛の此の大泥棒を看過しつゝあるや、私は實に諸君の愚を悲まざるを得ざるものである。——十月十二日發大阪毎日新聞上海特電に次の如くある『最近支那に於て裁兵運動、民權運動、女權運動等各種の團體運動が南北を通じ到る所に行はれて居るが、其中國際資本主義打破の運動は新たに起つた運動として極めて注目す可きものである。過般福田徳三博士が北京大學で國際資本主義排斥の講演を爲すや、支那學生は深く其説に共鳴し博士は大持てゝあつた。上海又其影響を受けた爲か此種の思想起り、十月十日雙十節の際にも宣傳ビラを配布したものであり、運動は漸く具體化せんとする傾向がある。彼等の提唱する國際資本主義打破とは、新借款團反對、露獨支經濟同盟、勞農露國承認を主張し、財政管理、國際管理等の諸説を徹底的に打破せんとするものである』と。若し此の報が眞なるなれば、私は私の以上の意味の講演が意外

に善く、而して速かに諒解せられたこと、私の支那各地に於ける微弱なる言説が望外の報ひを興へられたことを、心より感謝せねばならぬものである。

十

私は支那の新人中の或人々、例へば李大釗、胡適等の諸君が基督教排斥、否一切の宗教排斥運動を始めたこと云ふことを聞いて、少からざる興味を有して居たものである。北京に於て、私は此等諸君から運動の眞意を承り、それに對して卑見を求められたとき、私は粗次の如く陳述した。私は一切の宗教を排斥すると云ふことは自分としては到底賛同することは出来ない、自力宗か他力宗か其れは人の好む所又は其能性の如何によつて異なるであらうが、私の信ずる所では、人として生くる限り我々は必ず何等かの信仰を現に有するものであり、又た有せざる可からざるものである。恐らく基督教を極端に罵倒するパーランド・ラッセル氏と雖も、其心中には何等かの形に於ける宗教を有するものではないかと思ふ。私は佛教の信仰、基督教の信仰を以て現存の宗教中の最高な形と思ふが然し私

自ら其の何れにも固着するものではない。唯私がより、多く佛教の信仰に傾く所以の者は其れが著しく非侵略的——ラッセル氏の言を藉れば、less poignantであり、基督教の信仰就中新教の活動的信仰、少くとも其の具體的の表現は、極めて侵略的であるが故に、私は前者を愛し、後者に對して反感を持たざるを得ないからである。新教の活動は確かに一のアグレッションであつて、其の傳道は今日の言葉で云へば、宣傳的——悪い意味に於ての——である。理が非でも、異邦人を折伏して、自己の信仰に歸依せしめねば已まぬと云ふのは、一種のミリタリズムである。故マックスウェーバー教授はゾムバルトが猶太教を以て資本主義の精神的の母となしたに反對して、基督新教就中清教(クエーカーリズム)が資本主義の精神の有力なる助産者であつた所以を、豊富周到なる研究の結果立證した。之れは主として其の善き方面である。清教の精神は資本主義精神に確かに其光明的方面を貢獻したのである。乍然、其の以後基督新教と資本主義とは切つても切り得ぬ深い因縁を持續して今日に到り、獨り善き方面のみでなく、其の悪い方面迄も相伴ふようになった。元來基督教其ものとしては、決して資本主義的なるものではない、否、初代の基督教會こそ

最も覺醒したる、又或意味に於ては最も徹底したる共產主義の實行者であつたとは隠れもない事實である。『富める者の神の國に入るは駱駝が針の穴を通るよりも猶難い哉』と咨嘆した基督は決して資本主義者ではなかつた。乍併、同時に基督は旅立ちに際して其の僕に或は銀一千、或は銀二千、銀三千を授けて、歸つて來たとき、銀一千を空しく地中に埋没して置いた僕を責め、銀二千の外に更らに銀二千を儲け出した僕を善且つ忠なる僕ぞと賞めた主人を以て、神の國の意義に合へるものとしたのである。基督は眞の厚生は餘剰價値の増進によつてのみ得らる可きことを確かに教へたのである(十年前の拙文『餘剰價値の宗教』を参考せられたい)。是が基督教の本體である。然るに今日の基督教は之を悪い方面に著しく延長して、善惡共に資本主義の從僕となり了つた姿を呈して居る。私は諸君が今基督教を排斥すると云ふは、資本主義殊に對外的資本侵略主義の伴侶たり忠僕たる基督教を排斥するものと解釋するのである。資本主義との腐れ縁を打切り淨化せられ、其の本體に立還つた基督教は、必ずしも諸君排斥の對象たるものとは理解しないのである。例へば排外主義、排歐主義と云ふものに於けるが如く、一切の外來文

明、一切の歐米文明を排斥すると云ふことは無謀極ることであるが、それは外來の侵略歐米の侵略的文明の排斥の意に外ならざるが如くである。胡適氏言に應じて曰く、其は我々に取りて全く新しい見解である。併し我々は意識せずして、實は其の意味に於て宗教排斥を主張して居たものである。若し胡適氏の言が、支那新人諸君全體の意向を表はすものとするならば、私は支那に於ける現在の排宗教運動なるものは確かに覺醒の一聲であると思ひ、深き同情を表するに躊躇せざる者である。私は此意味に於て、支那に於ける所謂『思想革命』なるものが、獨り支那自らの覺醒たるに止まらず、其は總て日本の眞の覺醒となり米國の覺醒となり、更らに進んで歐羅巴の覺醒となる日の來らんことを深く期待して已まないものである。『日本及日本人』七月號清水牧師の『支那思想革命と文學革命』は、此點に關して甚だ有益な論文である、參考せられたい。

十一

論じて茲に到つて、私は世界經濟恢復に於ける日本、支那、米國の使命に就て、私の信ずる

所を述ぶべき順序となつた。世界經濟恢復は先づ以つて心的方面に存する、歐洲の人心は今荒み切つて居る（支那の問題の如きはそれに比すれば遙かに小なる惡である）。彼等自ら此の深みから脱出する力を有して居らぬ。救済の力は歐洲以外から與へられなければならぬ。歐洲に此力を與へ得る第一の有力者は云ふ迄もなく米國である。米國に次いで日本である。日本は米國に比すれば其の力は遙かに微弱なものであつて、而も日本自ら今物價騰貴による國民生活難を憂へつゝある、故に日本をして微力を世界經濟恢復の大事業に傾倒するを得せしめん爲めには、其の生活難を緩和す可き有力の後援者を要する、私は其の後援の任を支那に囑望するものである。支那が今日本の生活難緩和の爲めに力を盡くすことは、決して單に日本のみを助くる所以ではない、實に世界を助くる所以である。但し其然り得る爲めには、日本は支那の援助を自己の利害の爲めに求むるものでなく、先づ自ら進んで世界經濟恢復の大業に出来るだけ盡力すると云ふ大方針を確立した上でなければならぬ。青島還附の代償などと云ふ考は一擲せなければならぬ。

心的の救済は必ず物質的援助によつて伴はねなければならぬ。殊に今歐洲諸國は、其の物質的窮乏の甚しきが爲めに、唯さへ荒んだ人心が彌々險惡に傾きつゝある。我々は外より物質的救済を與へるにより、又其れと同時に心的救済の業を始むるによつて、歐洲の行詰りを救はねばならぬのである。物質的救助を要する最も大なるは東歐諸國である。勞農露國である。續いて奧國と獨逸である。此等諸國を物質的に救ふには、決して單なる慈善に依頼してはならぬ。勞農露國救済の爲めに寄附金を募ると云ふことは、實に結構なことである。然し其れが結構であると云ふは、主として精神的方面に就て、ある荒んだ露國の民心に一條の望を與へると云ふ作用だけであつて、マテリアリに此等寄附金が有効なりとは云へぬ、何千圓か何萬圓かの寄附金を送つたとて、露西亞幾億の人間の窮乏に對してはそれは大海の一粟に過ぎない、故に私は言つた、此の寄附金は恰かも神様や佛様に御賽錢を上げるやうなものである。上げられる神様や佛様に取つては御賽錢は何んでもない、少しも有り難いことはない。其の難有味は御賽錢を上げる信心家の上にある、彼等は御賽錢を上げるによつて兎に角若干の安心を得られるのである。

勞農露國への寄附金は實に露國よりも遣る國民にとつて、せめてもの罪滅しの一端として結構なことであると。兎に角慈善的人道的寄附によつて、露國其の他を救ひ得可しとするは飛んでもない考違ひである。彼等を救ふには秩序的連續的な大規模の救済法によるのでなければならぬ。今日の經濟組織に於て最も秩序的連續的な大規模の救済法は通商貿易の恢復を措いて外にない。彼等に其の乏しきを訴へつゝある生活必需の物質、製造工業の原料、農作の種子を連續的秩序的に供給する道は、ノーマルな通商貿易であるのみである。即ち一日も早く勞農露國、獨逸、奧國、東歐諸國と常態的な通商貿易を起すことが、歐洲經濟恢復其の救済に取つて焦眉の急務であるのである。それと同時に歐洲諸國自らが今苦しみつゝある經濟難の主要なるものゝ除去に力を藉さねばならぬ。それは外でもない、第一、對獨賠償金の思切つた輕減、第二、對露對獨對奧對東歐諸國への投資の開始、第三、各國對外債務の整理、第四、各國幣制、就中不換紙幣の整理、此四事である。

十二

對獨償金を思ひ切つて輕減するにあらざれば、獨逸の恢復は望まれない、獨逸恢復せずしては、歐洲貿易の恢復は期し得られない。此の二事は、切り離し得ざる有機的相互關係を有して居るのである。勞農露國及東歐諸國との通商振興には、是非獨逸が恢復せられることを要する。獨逸は西歐諸國と東歐諸國との經濟的緩衝帶たり、又其の媒介者たる地位にあつて、これは如何にしても無視することを得ないのである。獨逸を救ふことは、獨逸のみを救ふことではなく、歐洲殊に東歐諸國を間接に救ふ所以である。ソコデ私は、對獨償金輕減の問題が先第一に解決せられねばならぬと、久しい以前から主張して居るのであるが、然し歐洲諸國殊に英佛が此の問題に就ては、其の利害關係を著しく異にして居る今日、彼等だけの評定では、此問題は何時迄たつても到底解決の望みはないものと思ふ。茲に私は米、日、支の盡くす可き使命の存するを認めるのである。第一の發言資格者は無論米國であるけれども、米國はまだ逡巡して居る。故に私は日本が支那と提携して、最も徹底的に對獨償金輕減の議を世界に向つて提唱す可き使命ありと信するのである。然し其の提唱は單なる言葉の提唱では無効である、實質が之に伴はねばならぬ。ソ

コデ、私は日本は向後獨逸より受く可き償金の分前一切を拋棄す可しと主張するのである。日本は殆んど賠償に與る資格はないが、其外の國とても亦然り、佛蘭西と白耳義とを除いては、私は一切の國々が其の權利を拋棄せんことを切望する。而して私は日本先づ自ら例を作るによつて、此等諸國の拋棄の議に刺戟を與へんことを主張するものである。

十三

併しながら、對獨償金の輕減を實現するには、少くとも佛國の對外債務の處置を解決せねばならぬ。佛國が獨逸より莫大な償金を取らんとするのは、他にも種々理由はあるが、具體的且つ當面の案件としては、然するにあらざれば、自國の財政を支持し能はざるからであつて、此點は我々は深く同情せねばならぬのである。然るに若し佛國の對外債務問題にして何とか解決の道を見出し得るならば、佛國の財政難は可なり著しく緩和せられるであらう。然らば獨逸に對して今の如き無法な要求を固持する必要は減するところであらうと信ずる。佛國は戰前に於ては對外債權四百億法を有し、債務は一文もなかつたが、

昨年には於ては對外債權百四十億法に減じ、其の反對に對外債務三百二十七億二千三百萬法となつた。即ち債權高は二百六十億法減つたのだから合計五百八十七億法強の負目を背負つてゐるわけである。而して佛國對外債務の問題は、又延いて聯合諸國對外相互債務の問題の考究を必要とする。ケーンズ氏は戦争による聯合諸國對外債權債務全部帳消し論を唱へて居ることは、今や世界須知の事實である。氏は其額を示す爲めに左の一表を其の『平和の經濟的結果』第二五四頁に掲げて居る。此表は既に前段一四八頁爲めに再出し置く。猶同氏編纂マンチエスタール・ガーチアン・コム・マール・シアル特別號『歐洲に於ける改造』既刊一至五號殊に第二號『改造の原則』參考を乞ふ。

債	債權 (單位磅)			
	米國	英國	佛國	合計
英國	八四・〇〇〇・〇〇〇	五〇・〇〇〇・〇〇〇	一・〇六・〇〇〇・〇〇〇	一四一・〇〇〇・〇〇〇
佛國	五五・〇〇〇・〇〇〇	五〇・〇〇〇・〇〇〇	一・〇六・〇〇〇・〇〇〇	一六一・〇〇〇・〇〇〇
伊國	三三・〇〇〇・〇〇〇	四三・〇〇〇・〇〇〇	三三・〇〇〇・〇〇〇	一〇九・〇〇〇・〇〇〇
露國	三六・〇〇〇・〇〇〇	三六・〇〇〇・〇〇〇	一四・〇〇〇・〇〇〇	八六・〇〇〇・〇〇〇
白耳義	二〇・〇〇〇・〇〇〇	九・〇〇〇・〇〇〇	三〇・〇〇〇・〇〇〇	五九・〇〇〇・〇〇〇
合計	二二〇・〇〇〇・〇〇〇	一八八・〇〇〇・〇〇〇	三九六・〇〇〇・〇〇〇	七〇四・〇〇〇・〇〇〇

國	債務 (單位磅)			
	セルヴキア及ユーゴスラヴキア	其他聯合國	合計	其他
セルヴキア及ユーゴスラヴキア	二〇・〇〇〇・〇〇〇	一〇・〇〇〇・〇〇〇	三〇・〇〇〇・〇〇〇	一四・〇〇〇・〇〇〇
其他聯合國	三三・〇〇〇・〇〇〇	九・〇〇〇・〇〇〇	四二・〇〇〇・〇〇〇	一四・〇〇〇・〇〇〇
合計	一・二〇・〇〇〇・〇〇〇	一・七〇・〇〇〇・〇〇〇	三・九〇・〇〇〇・〇〇〇	三・九〇・〇〇〇・〇〇〇

ケーンズ氏は右の債權債務を一切帳消しせよと主張するのである。即ち佛國は三億五千五百萬磅の債權を失ふ、他方に於て十億五千八百萬磅の債權を免れるのであるから、差引七億三百萬磅の得をするわけである。伊、露、白、セルヴキア、ユーゴスラヴキア等は債務斗りであるから、右帳消しによつて何れも利する斗りである。是に反し、英國の債務は、米國から借りた八億四千二百萬磅がある斗りで、債權は十七億四千萬磅あるから約九億磅斗り損し、米國は債務は少しもなく、債權斗り十九億磅の全部を損するわけである。ケーンズ氏が右の計算をして以後、更らに米國の貸付額は殖へ又た利子も加はるから、右の債權額は著しく増して居るので、ツヒ最近アンダーソン氏の公表した所によると、總額約百七十億弗即約三十五億磅に達すると云ふとである。アンダーソン氏は其の中百十億弗約二十二億磅を帳消しにするが至當であると主張して居る。英國の債權高も昨年

三月末に於ては、十億八十萬磅に増加して居る。其の後の利子を計上すれば、右金額は更に増して居るわけで、兎に角莫大な數字である。然し此の莫大なる債權債務を莫大なりと驚歎して居るのみでは何時迄経つても解決は付かぬ、私は前に債權なるものは物質と異つて、踏倒し得ると云ふ特徴を有するものなりと斷言した。私は此の道理を今活かさしめねばならぬと主張するものである。我々は右の考に基いて此の莫大な數字を何とか取扱はなければならぬのである。先づ莫大な歐米の數字に比して我日本の對外債權の状態は如何と云ふに、本年一月發行の井上日銀總裁の『戰時及戰後に於ける我國の對外金融』と云ふ極めて有益な冊子に次の如く言つてある『戰爭の始まつた時と大正九年とを簡單に比較して見ると、大正三年には日本の外國に對する借金の高が十九億圓であつた。それが三億圓返されて十六億圓に減りました。對外債權は僅か四億六千萬圓ほかなかつたものが、二十二億圓といふ高に殖えて居ります。結局戰爭前からの日本の働き料が幾らあつたかと言ひますと、正貨で十八億圓、外國に貸して居る金が十八億圓（二十一億から四億引く）此の二口を加へますと三十六億圓になります。其の外に戰爭

中に外國に對する借金を返した高三億圓を加へますと、結局三十九億圓と云ふ數字が、戦争後大正九年迄の約六箇年に稼ぎ得た高となります。即ち日本は對外的に三十九億圓の力を増した譯であります』^{五一}又た右書附表第六號によると、日本で發行した外國公債の未償還額三億七千萬圓及び英貨三百萬磅、計約四億圓計りある勘定で、其等は何れも大正五年十二月以後發行にかゝるものであるから、無論戰爭の爲めに借り入れた金である。其の内譯は英國が三百萬磅、佛國が一億三千三百萬圓、露國が二億四千萬圓を日本から公債として借りて居るのである。是は公債丈けの額で、其の他の借金は全く此の外である。ソコデ、ケーンズ氏の主張を容れるとすれば、日本は少くとも右の約四億圓（其の後此の額に増減があつたならば其の額）を、世界の經濟恢復の爲めに投げ出す可きである。米國の百億弗に比べれば其の五十分の一で殆んど言ふに足りないが、然し井上總裁の計算による日本の對外的富の増加三十九億圓であるから、約其の一割に當るのである。但し此割合で行くと、米國が百億弗を帳消するのは甚だ多過ぎるので、假りに米國の對外債權二百億弗（債務の二十億弗を差引いた殘額）だとすれば、其の一割は二十億弗で、

其れだけ帳消して貰ふことになるが其れでは歐洲の救済には不十分である。ダカラ、日本が米國同様の貢獻をしようとなれば、三十六億圓から十六億圓を引いた二十億圓の半分十億圓を投げ出してかゝらねばならぬわけとなるが、其れは米國と違つて日本に取つてはとても堪へ得られないものであるから、先づ四五億圓の投出して勤辨して貰ふ外はない（詳しい數字は愈々の時になつて算出を要する）。私は日本が先づ此の大決心をして、而して後米國に説いて其決心を促かして、茲に新なる意味で、國際經濟會議をワシントンなり東京なり北京なり何處かで開いて、聯合國の對外債務の處理問題を根本的に解決す可きことを力説せんとするものである。此事が成就すれば、同時に又た引續いて歐洲諸國の幣制整理の問題に進み得るのであつて、然らざる限り幣制問題は如何ともする能はず、又一般の財政難も如何ともする能はざるものと思ふのである。而して右の投出し額はケーンズ氏は單に棒引にせよと主張するのであるが、私は寧ろヴァンダーリップ氏が近頃其の *What next in Europe?* に於て主張して居る様に、權利だけは矢張保留して置いて、聯合國の力に應じて何分かづつ償還して貰ふこととし（但し利子は全然拋棄して）其の

額を以て國際經濟基金なるものを作つて、歐洲諸國就中、東歐諸國、露國、獨逸國の救済に充つること、恰かも團匪事件の賠償金を米國が支那の爲めに使用し、支那青年を米國へ留學せしむる費用（一人一ヶ年十八米弗を給して米國大學に入學せしむるもの年々數十人他に北京郊外に清華學校と稱する世界第一と稱す可き設備——其敷地面積約五十萬坪、東京帝大の約五倍——の完備した豫備學校の經營に充てゝ居る）に充てゝ居る如く爲すが最上法と信するものである。救済と言つても金品を給與するような姑息な事ではない、通商貿易の復興と幣制の整理との基金とす可しと思ふ。私は近頃我邦で盛んに主張せらるゝ金輸出解禁は、此問題の解決と共に行ふ可く、其の以前には行ふ可からずと主張するものである。我邦の保有する金の一部は、私は之れを歐洲諸國の幣制整理の用に充つ可く貢獻す可きもので、唯無意味に輸入商の利益の爲めに放散せしむ可きものではないと確信する。

前段「何を緊縮する」を参考

十四

斯くの如く、世界經濟の行詰りは、歐洲以外の國にして其力あるもの、先づ救済の任に當らねばならぬ。溺れつゝあるもの同志は他を救ふことは出来ない、水の外にあるものが其の手を藉してやるのでなければならぬ。歐洲を救ふものは、第一に米國でなければならぬ。然るに米國は右の借金帳消論の必ず起る可きを豫想し出来る丈け之れを回避せんとして、何れの國際經濟會議にも参加せぬ。乍去米國の参加せざる國際會議は労働會議でも經濟會議でも凡て無効無用である。就中今當面の歐洲救済の爲めの國際會議に於て然りである。ソコデ、米國を避けんと欲して到底避くるを得ないこの大なる使命を盡さしむ可く努力することが、日本及支那の使命である。日本は支那と協議の上、支那は日本の物價騰貴難を救ふ爲めに出来る丈けの便宜を圖つて、食料品其の他の日本への輸出を助けて（其れが可能なることは私が此度の支那旅行に於て親ら十分認め得た所で、此一事を知らんとしたことは、實に私の支那旅行の最大目的であつたのである。其の事は何れ折を得て論じやう）日本をして後顧の患なからしめ、其の分外とも云ふ可き大任に當ることを得せしめることを約し、日本と支那と共同に米國に提議し、日本は其の對

外債權中少くとも、聯合國政府公債貸付け高は帳消として進呈するから、米國も亦同様の決心をせよと勸告し——其の勸告は餘程強いものでなければならぬ、米國がそれに應ぜなければ、彼は世界の公敵なりとしてこれを言葉の上は勿論實行上に於ても攻撃する丈けの強い覺悟を以てせねばならぬ。私は其の爲めには、日米衝突も亦不可辭（其の他の事では斷じて不可なり）とするものである——其の上にて國際經濟會議を開催して、問題の解決を期す可しと主張するものである。即ち日本先づ其の使命に目さめて、米國の覺醒を促す可しとするものである。而して日本が斯く思切つた提言を爲すには、眞に其の崇高なる使命に目さめたる上でなすのでなければならぬ。それによつて日本の利權を増進しようとか、何等かの特殊利益を獲得しようとかの野心を包藏してかゝつては駄目である。同時に日本は、明治維新後僅かに歐米諸國の眞似をして覺へ込んだ泥棒主義、資本的侵略主義、經濟的帝國主義を國是として全然打捨て、かゝらねばならぬ、善事を爲さんとするには、自ら先づ善人とならねばならぬ、念佛を唱ふるには鬼の念佛であつてはならぬ。支那をして此使命に参加せしめ、眞正の意味にての同種同文の親善を實現せん

には、日本は一日も早く今支那を脅しつゝある世界的資本侵略の仲間から自ら先づ綺麗サツパリと脱退せねばならぬ。然らざる限り支那をして其の使命を覺らしめることは到底不可能である。反對に日本にして眞に名實相合ふ非侵略國たること徳川氏二百余年間に於けるが如くなれば、日支親善などと叫號せずとも、支那は必ず日本を助く可き義務に目ざめ、日本と支那と唇齒輔車の關係を有するものなることを悟るに相違ないと私は信ずるものである。而して其れが獨り東亞の平和を齎らすのみでなく、世界の救濟、世界經濟の恢復を促進するに與つて至大の貢獻を爲す可きことは、私の確く信じて疑はざる所である。

|| 大正十一年十一月『改造』掲載 ||

八 世界が救はるゝまで

|| 經濟的改造當面の問題 ||

一

『我等笛吹けども爾曹踊らず』とは私共の口にす可き所ではない。私共は人が踊らうが踊るまいが、吹くべき笛は咽喉の續く限り吹かねばならぬ、吹いて吹いて一人の踊る人が起らずとも、私共は一向之れを苦とす可きではない、唯だ己れが吹く可く命ぜられたりと信ずる笛を吹けば、其れで足りるのである。此の意味に於て、私は繰返し、世界を救ふ可き使命と、我日本が身を挺して之れに當る可き焦眉の急務とを説かねばならぬと確信して居るのである。世界を救ふことは同時に日本を救ふとである。世界を今日の如

き沈滞の極に其の儘に打捨て置いて、日本のみ獨り繁榮す可き道理はない、否、世界が今日の儘に何處までも推移して行くときは、日本も亦益々難局を加へるのみで、決して救はれる見込はないと私は確信するものである。日本の力は微小である、獨力では到底何事も成し遂げ得るものではない、少くとも米國を動かして其の大なる使命に覺めしむるに非れば、世界救済の大業は之を期することは出来ない。日本が日本として成し得る最大の仕事は、米國をして一日も早く此の使命に覺めしめることに存する。之れが私の深く信じて渝らざる處である。乍併、米國の覺醒は中々困難な事である。ヴァンダーリップの力を以てしても、今日までに成し得たる所は甚だ小であつた。況んや私共が日本の天地で、小さな聲で彼は言つたとて殆んど何の力もないことは分り切つた事である。併し、私は決して絶望はせぬ。若しも日本の輿論が眞に目醒めて來るならば、其れは他の多くの力と相提携して、多少は米國を動かし得るに相違ないと思ふ。此の意味に於て、前段所收の拙文の趣意を更らに少しく布演して、經濟的改造の當面問題に就て卑見の一部を詳述して見たいと思ふのである。

今日の世界の難局が、戦争其ものゝ直接の結果であると云ふ考の大誤謬なることは、前文に於て少しく論じて置いた。改造社は此問題に就て有力なる諸論客の間に意見を徴した。其の答文は改造前號に掲げてある。右の諸文は唯一つを除くの外は、何れも大體に於て私の説を裏書せられたものゝように思ふ、殊に山川均氏の論文とベルリナー教授の論文とは、甚だ有力に私の論に賛成せられたものゝように拜見した。尤も山川氏は其ザルキリストたる立場から私の論の後半に對しては、甚だ力強い駁論を下された。之れは當然豫期す可きことであつて、私は謹んで其の教を拜聽するものである。兎に角戦争の爲めに被つた物質的損害が、今日の世界經濟の難局を醸した最大原因ではないと云ふ私の主張文は、山川氏も十分に之を承認せられたことは、私の會心を禁じ得ざる處である。更らに青木氏が、歐洲諸國に金を貸す必要を力説せられたのは、私に取つて百萬の援兵を與へられたものとして感謝せずして措く能はさるのである。私は勞農露國獨逸國東歐諸國救済のためには、九億乃至十億圓の負擔を日本が敢てせんことを熱望して已まないものである。タトへ、米國が日本の前例によつて動かさるゝことなしとするも、私は

少しも其れを惜むに及ばないものと思ふ。然し私は極く内輪に積つて、四億圓の投げ出しを主張するに止めた。兎に角問題は金高の多少ではない、我邦の世界救済に對する眞の覺醒それである。此の意味に於て、青木氏の主張は私の徹頭徹尾賛同を禁じ能はざる處である。

二

歐洲各國の政府は戦争のために莫大の支出をした而して其の勘定の大部分は國家の負債として今日まで残つて居る、それは儼然たる事實である。私は先づ戦争の爲めの負擔の經濟的内容と意義とを、此問題に就て最も明快な解説を下したビグーに倣つて少し明にして置く可き義務があると思ふ。

管々しい數字を擧げることとは略するが、歐洲各國の戦費の負擔は實に言語に絶する底の莫大なものである。乍併戦費と云ふものは、其の全體が無駄に費されたものと思つてはならぬ。其の反對に戦費てふ項目に顯はれたものが歐洲諸國民の負擔の全部を言顯

はして居るものと思ふのも大なる誤謬である、戦費として數字上に顯はれたものは、歐洲各國の政府が戦争に直接又は間接に關連して支出した貨幣額の全體である。政府以外の負擔は少しも其の數字の内には含まれて居らぬのである。歐洲各國の國民が或は直接に戦時中、戦争の爲めに費した貨幣額は、右の戦費なるものゝ中には計上されて居らぬのであつて、而して實際に於て其の高は莫大なものであらう。乍併、我々は極めて漠然たる推測以外、其の高を知る可き手段は一も之を有して居らぬのである。而して其の中には直接の損害もあれば間接の犠牲もある。佛國の如き敵國軍の侵入した國に於ては、國民は直接に其の財産を破壊されたものも尠からずあらう、其の反對に英國の如く敵兵の隻影をも見なかつた處では、飛行機ツエツペリン船による損害の外には直接の損害はさまで被つて居らぬ。併し其の何れにしても損害は既に過去の事に屬する、現在に於て歐洲國民の苦しむ所は、其れがために失はれた所得産出力之れである。此點は能く念頭に置かなければならぬのである。

我々が確かに知り得る戦争の爲めの費用なるものは、各國政府の手に於て支出された

ものそれである。其の費用は何れも金額を以て言表はされて居る。乍去金額は唯だ費用を表示するに止るもので、直ちに費用其ものを構成して居るのではない。——此の點は政府以外の費用に就ても同じ事である。——即ち戦争の爲めに直接間接に各國政府が費した人と物との働きの金額で言表はされたに外ならぬのである。其れは如何なる種類のものから成立つかと云へば、ビグー氏は凡そ次の六種類に分けることが出来ると云つて居る。——(第一)直接又は間接に軍役に従事した陸海軍人、軍屬、人夫等の勤勞(第二)軍器軍需品の製造作成に従事した人々の勤勞(第三)戦争用の運送交通に用ひられた船、鐵道、自動車、諸車輛等の働き、及其操縦に従事した人々の勤勞(第四)戦死者、負傷者等の爲めに設けられた一切の設備の働き、及其の従業員の勤勞(第五)従軍者の衣料食料のための費用から其等の人々の平時に於ける衣食料の費用を差引いた分(第六)英佛其他の國が戦争の爲めに聯合國に供給し又は貸した物及働き是等である。此等は戦争の爲に支出した費用である。乍併其の全部が必ずしも戦争による損失となるわけではない。何となれば此等の費用の中には、戦争がなければ全く供給又は生産されないものが含ま

れてゐる。而して其れは可なり大なるものであることは一の幸である。戦争の爲めに眞に被つた損失は、現に費消されたものでなく、其等の物又は働きを生産し又は供給する爲めに停止せられた物の生産又は働きの給付是れである。軍器、軍需品製造に要した一切の費用が戦争の爲めに損失に歸するのではない、軍器、軍需品の製造に従事する爲めに、他の生産業を縮少し又は制限した高丈けが眞の損失に當るのである。言葉を換へて云へば戦争がなかつたら、此等の軍器、軍需品の製造の爲に用ひられた物なり人なりは、他の生産業に用ひられたであらう。其が出来なかつたこと丈が戦争の爲めに被つた損失であるので、軍器、軍需品の製造に用ひた人なり物なりが直ちに損失となる次第ではない。丁度國際間の貿易に於て輸入品の費用とは、其の物を生産するに要した生産國に於ける費用ではなく、之を得る爲めに換へて與へた輸出品の費用が其れであるが如く、又は個人間の交換に於て得るものゝ費用とは、代へて與へた自己所有物の利用の喪失であること云ふに均しいのである。従つて、交戦各國の所謂戦費なるものゝ全體が、戦争の爲めに各國が——従つて其の合計は世界が全體として——被つた損失を言表はして居るものと思

ふのは、誤つた見方であるのである。此は戦争の經濟的結果を正しく觀察するに決して看過してはならぬ點である。

三

トコロで右のように解釋した戦争の爲めの眞の犠牲は、誰が之を負擔するかと云へば、現前の支拂者は多くは政府であるに相違ないが、實際上は結局各國の國民が之れを負擔する外には道はないのである。ソコデ各國民は其の負擔に應ずるには、唯二つしか資源を有して居らぬのである。第一は將來の資源、第二は現在の資源それである。將來の資源を戰費の負擔に充てるとは、現在又は將來生ず可き資本の喰込むことを云ふのである。従つて其結果は現在の所得高には變更を來さないが、將來の所得を減ずることになるのである。之を更らに分けて二種とすることが出来る。第一は對外的である。即ち外國との交通を維持する間に於て得るもの、獨逸、埃國は之を用ゐることが出来なかつた。何となれば外國との交通は絶たれて居たから。第二は對内的で、獨逸、埃國と雖も用ゆること

の出來たものである。第一は更らに次の如く區別することを要する。(甲)自國に現存する資本財を外國へ賣つて即時に所得を得ることそれである。之れは獨り動かし得る有體物のみでなく、土地、家屋、工場、其の他の不動産に就ても出來ることである。物、其れ自らは動かさないが、其の所有權を外國人に賣つて、手取金を所得として戰費の負擔に充つることが出来る。其の代り將來其等の物から生ず可き所得は、其の買つた外國人の手に歸するので、自國人の懷から其れ丈けは減るのである。併し戰時の如く急を要する場合には、此れは餘り役に立たぬ。手取り早く輸送し得られるものでなければ、還金處分は急には辨じられない、即ち美術品とか、寶石とか、金銀塊とかが多く此目的の爲めに賣られたのである。(乙)外國有價證券にして自國人の所有して居たものを外國へ賣放すこと、佛國は此種類のを殆ど皆賣盡して仕舞つた。英國も亦大分賣放つた。(第二)外國に關係なく自國限りの計ひで實行し得る將來資源の充當にも次の方法がある。(甲)自國內の生産用資本を充當すること、但し之れからは餘り多くを望むことは出來ない、何故となれば其の大部分は土地、建物、鐵道等の形となつて居て、直接戰爭用に供すること不可能

である。唯だ食料品、原料品、既製品の或部分に限られて居る。(乙)現存生産財の修繕、改修、新舊取換等を一時見合せて、其れに充つ可き物や働きを戰爭用に供すること、之は將來に取つて甚だ害を及ぼすことは言ふまでもない。(丙)新規の投資を見合せ、其の分を戰爭用に充つること、以上が將來の資源の戰費負擔充當の重なる項目である。

第二の現在の資源の充當とは、第一とは反對に將來の所得に手を觸れず、現在の所得だけで戰費の負擔に應ずることである。是に二つの方法がある。(甲)餘分な努力を爲すことによつて餘分の所得を生じ出すこと。政府の戰費、政府以外の國民の戰爭の爲の犠牲中には、此の種のもものが少からず含まれて居る。これは決して損失を以て目す可きものではない。(乙)消費を節約すると。而して(甲)は對外的資源の道を絶たれた獨逸で殊に著しく行はれた所である。労働者が平生八時間働く所を十時間も十一時間も働いたり、休日を廢したり、人爲的操業制限を撤廢したり、労働爭議を見合せ、其が爲の停業を少くしたり、從來何等生産業に従事して居なかつた人々が労働に就いたり、失業者數を殆んど皆無ならしめたり、種々なる點に於て此(甲)は各國共盛んに行はれた所である。消

費の節約は英國では『國民節約野戰』などによつて大に宣傳せられた。獨逸に於ては、宣傳せられずとも、必要上已むなく極端な消費の節約が行はれた。これは決して損失を以つて目す可きものでないと言ふ迄もない。否却つて大なる利と稱す可きであるが、然し餘り極端な節約、又は不合理的な節約の爲め、將來の生産力を減じた部分は、慥かに大なる損失である。

此く將來資源、現在資源と云ふ別を立てはしたが、さて實際上に於ては、兩者斯くハツキリと判別せられない場合が甚だ多いのである。將來現在の區別を公債支辨、租稅支辨と混同するものが尠からずある。之れは大なる誤謬であつて、必ず匡さなければならぬのである。將來の資源を充てるか、現在の資源を充てるかは、國民の爲す所であつて政府の決する所ではない。政府が戰費の支辨を公債によると云ふことは、政府の財政上、其の負擔を將來に譲ると云ふこと、文けに止り、其れが直ちに國民をして將來資源によらしむることにはならない。其れと同様に、政府が租稅を以て戰費を支辨すると云ふのは、政府の財政上の都合、文けの事であつて、之れに應ずる國民が必ずしも現在資源を戰費の負擔に

充てる事とはならないのである。政府が戦費支辨の爲め新税を賦課したり又は増税を行つたからとて、其れは政府が將來に於て公債の利子を支拂ふに及ばぬと云ふ丈けであつて、租税を支拂ふ國民が直ちに現在の資源を以て之に應ずると云ふことにはならぬ。何故とならば、新税又は増税を上納する國民は、其の租税額を生産資本の作出しに用ゐる可き財源から支出するかも知れない。然る場合には、其の國民に取つては租税の増納によつて將來の所得を減することになるのである。又其の反對に政府が公債を募集して戦費を支辨するのは、政府としては將來に對して公債利子の支拂の義務を残すと云ふ丈けであつて、其の募集に應ずる國民に取つては、必ずしも將來の資源を充當することにはならぬ。何故とならば、國民は現在の消費を節約して公債の募りに應ずるかも知れないから。但し此の場合政府は將來何年かに涉つて其の公債の利子を支拂はねばならぬので、従つて其の額丈けは國民將來の負擔となるのであるが、然し國民全體としては、一方には其れ丈け將來に負擔が増すとともに、他方には其れ丈けの利子の支拂を受ける（外國債は別問題）のであるから、差引出す入らずとなる勘定で、別に新しい負擔が將來に對し

て加へられるわけではないのである。即ち戦費の負擔を現在資源を以て辨するか、將來資源を以て辨するかは、眞の負擔者たる國民各自の爲す所によつて定まるので、政府が之れを決するのではないのである。但し其れと同時に政府は其のやり方如何によつて、此の國民の決定に著しい影響を與ふるものであることは注意せねばならぬ。政府が國民の消費に干渉したり、輸入の制限を圖つたり、又消費税を重くしたりすれば、國民は勢ひ現在資源をより多く戦費の負擔に充てるようにならう、其の反對に政府が新投資（殊に外國に於ける）を制限したりすれば、將來資源を戦費に充てることを多くすることになるのである。

四

歐洲各國の政府が、政府として財政上戦費を支辨した重要方法は三つあつた。

（第一）租税の増徴（第二）公債の發行（第三）不換紙幣の發行、これである。

政府が戦費の負擔を租税の増徴によつて支辨するか、公債の發行によつて支辨するか

の問題は、其の負擔を現在の資源を以て辨ずるか將來の資源を以て辨ずるかの問題と同一に見てはならぬことは、前に説いた通りであるが其れと同時に此問題は他面に於ては、直ちに國民の經濟狀態に重大な關係を有するものなるを考へて見なければならぬ。其は別事ではない、政府が戰費の支辨を主として租税による場合と、主として公債による場合とでは、國民間に於ける富の分配に重大な關係を及ぼすことそれである。今少し此の點を説明して見よう。

國民間に於ける富の分配が全く平等で、各人が全く同等の地位にあるものと假定すれば——左様なことは實際には決して存せない——政府が戰費の負擔を公債によつて支辨するも租税によつて支辨するも、其の作用は全く同一であらう。無論公債支辨の場合には後日に於て利子の支拂を要し、租税支辨の場合には其の必要は全く存しない。乍併利子を支拂ふ爲めには政府は矢張り其れ支け租税を國民に課する外はない。従つて國民皆同一の地位にあるものとの假定の下に於ては利子の支拂をするもせざるも其の結果は同じ事である。何故とならば、政府は國民全體から利子支拂用租税を徴收して之を公

債所有者に支拂ふのであるから、國民は政府へ上納すると同時に、又た其れ支けの利子の支拂を受けるわけで結局出す入らずである。政府の公債一萬圓を所有する人は、之れに對して一ケ年六百圓の利子の支拂を受ける。然し政府が此の六百圓の支拂を爲し得る爲めには、此人は租税として六百圓を上納せねばならぬのである。同じ人が其の一萬圓を一時に租税として政府に納めたとすれば、彼は年々六百圓の利子支拂を受けることはないが、其れと同時に又年々六百圓支けの納税をする必要もない、結局は同じ事である。(元金償還の場合も亦同じ)。トコロが、實際左様行かないと云ふものは、國民間に於ける富の分配平等ならず、各人の地位夫々大いに異つて居るからである。即ち大いに富める者あり大いに貧しき者あり、其の中間に種々異つた状態にある人々が多數存するのが實際の有様である。ソコデ右二つの場合は其作用甚だ異つたものとなるのである。

戰爭の場合のように、一時に多額の徴收を國民に賦課せねばならぬ際には、政府は主として富者の力に藉らなければならぬのである。何となれば、貧者は一人々に就ては勿論、貧者全體としても一時に負擔し得る力は甚だ小なるものであるから、多額の徴收に應

することは事實上到底不可能な事である。租税上納に充て得る餘利は貧者之を有すること甚だ小である。従つて戰費支辨の爲めの被賦課者は主として富者でなければならぬ。而して所得の高の増す程租税負擔力は累進的に増すものである。餘利の割合は所得高増加の割合よりも大なるが常例である。五萬圓の所得ある人と十萬圓の所得ある人とは、後者は納税力は二倍では止まらない。其よりも大である。故に次の結論を生ずる。政府が巨額な戰費の徴收を要するときは、富者は必ず貧者よりもより多く之れに應ぜねばならぬ。巨富者は中富者よりもより多く之れに應ぜねばならぬ。而して其高は富の高に比例して、累加的に多くなければならぬのであつて、此れは選擇の餘地を残さざる公理である。選擇の餘地の存するのは、其の累加的徴收を租税の形に於てす可きか、公債の形に於てす可きかの一事あるのみである。政府は此の一事を決す可き權能を有すると共に其義務を負ふものである。

ソコで、主として富者をして直接の負擔者たらしむる方法中、租税として徴收することと公債として募集するとの差違如何と云へば、直接の作用は殆んど同一であると答ふ可

きである。何れの方法によるも、富者は其の有てる富の度に應じ、若くは之れに近く累進的に其所有の富を支出するに止まるものである。然るに其後日に於ける作用に至つては、兩者の間に甚だ大なる差異が起るのである。即ち租税によつて徴收する場合には、富者は其支出した高の全部を悉く結局負擔して仕舞ふのであるが、公債による場合は、直接には富者が支拂ふけれども、彼等は其の全部を負擔するのではない。後日に於ける元利の支拂に方つて、彼等は無論其の支拂に要する政府支出の一部分を租税として上納して負擔するには相違ないけれども、彼等以外の國民も貧者に至るまで、其の爲めの租税上納を免れないので、結局一部——時としてはより、大なる部分——は、此等富者以外の國民の負擔に歸することとなるのである。租税支辨の場合には其の時の富者は何等の代償を與へられることなく、費用の全部を負擔し、公債支辨の場合には目前には富者が支拂ふけれども、其れと同時に彼等に對して將來何れの日かに於て、貧者から彼等に其或部分を返納せしむ可しとの約束を與へられることになるのである。此一事は兩者間に於ける重大なる差違であつて、其社會政策的意義は輕々に看過するを許さぬのである。されば戰

費支辨を租税によるか公債によるかの決定を爲す政府は、同時に其の負擔を富者のみに課するか、貧者にも課するかの大問題を決定する所以となるのである。而して實際に於て、獨逸は初めから明かに租税支辨によつた割合極小であつて、戦費の大部分は公債支辨によつたのであるが、租税主義によると稱して居た英國と雖も、忽ちにして其の主義を維持することが出来なくなつて大部分は公債支辨によつた。佛國其の他の國何れも皆然らざるはない。かくして交戦諸國は今何れも莫大な公債を負擔して居ることは、九月號の『改造』に於いて堀江博士が論ぜられた通りである。

三

公債には外國債と内國債とある。戦費の大部分を租税によらず公債によつた歐洲各國が、正直に其元利の支拂を爲さうとすれば、外國債の場合には其れ丈け自國の現在の生産物を外國の債權者に取り去られるものであるから、其れ丈け所得を減ずるとは云ふまでもない。然し今日の處正直に外國債の利子すら支拂つて居る國はない、英國丈けは米

國に對して利子を支拂つて居るが、其他の國は有耶無耶の間に彷徨して居るのである。正直に支拂ふとは到底出来ない相談であるが、若し其れが實行されるものとすれば、國民全體として其れ丈け苦しむわけである。トコロが内債の場合は著しく異なる。内債の元利支拂は假りに戦前に於ける貧富の懸隔が當を得て居るものとしても、元利の支拂其の事によつて其の懸隔を甚からしめて、社會上の不平均を大にする作用を有するものである。其れは何故であるかと云へば、公債の所有者は頭數の上から云へば、中流階級以下の方が多し、愛國心に訴へ各種のプロパガンダを行つた結果、下層階級の者も無理算段をして公債の募集に應じた、此れは獨逸のように外國に頼ることが全く出来なかつた國、而も殆んど一切の戦費を政府が公債によつて支辨した國に於て殊に然るのである。乍去、頭數は如何に多くとも金高に就て見れば各人當りは勿論全體としても中流以下よりは富者階級の占むる割合の方が多いのである。従つて公債の元利支拂を受くる者は、金高に於ては富者階級に多いのであり、其反對に此元利の支拂に充つ可き租税は國民一般から徴收する。ソコデ、公債の元利支拂の行はるゝ度毎に、貧者並に中流階級は、其の所得の一

部を政府に取り上げられ、それに對して元利支拂金として、政府から受くる所は遙かに少いのである。反對に富者は租税の上納額よりも、多くを公債元利の支拂金として政府より受くるのである。されば、公債元利の支拂の行はれる毎に、貧富の懸隔は段々増大せられる作用あるを免れない。之は社會政策上甚だ重大な問題である。殊に今元利の償却を受くる富者は、或意味にては不當の利得を收むるわけである。何となれば、彼等が公債の募集に應じた時と今日とでは、物價の高さ言換れば、貨幣の購買力が可なり違ふ、彼等が公債の募りに應じたときは、貨幣の購買力は今日よりは小であつた。今日は貨幣の購買力は曩日よりは大である（但し獨露塊等は其の反對であることは云ふまでもない）。小なる購買力を有する貨幣を以て應募した富者は、今やより、大なる購買力を有する貨幣を以て償還せられる。其の差は彼等に取つて一種の不當利得となるのであるが、此の不當利得の支拂者は誰であるか、其れは政府ではない、政府は國民から取つて國民に支拂ふ丈けである。結局眞正の負擔者は國民である。國民の大部分を占めるものは中流以下の小富者及貧者である、彼等は戰費の負擔の外に、猶更らに富者を不當に富ましむ可き支

出をも負擔せねばならぬのである。

斯く考察して來ると、勞農露國が一切の公債を踏倒したと云ふことは、普通人々が考ふるやうに、亂暴一方のみの所業と斷することは出来ないのである。而して又た勞農以外の諸國は、勞農國の様子に原則として借金、踏倒しを宣言はして居らぬが、實際の經過は其れと兄たり難く、弟たり難き状態に於てあるのである。右述べた様な貧富の不均を更に此以上甚しからしむ可き作用を惹起さしめないで、各國の政府が正直に内國債の元金を償還しようとするには、其爲に要する經費の負擔を富者に重からしめるような課税法を取る外はないのである。結局政府としては、唯だ工夫の責任がある丈けで、實際の負擔は國民中の何れかの階級に歸着する外はないのである。外國債のとは今姑く問題外とすれば、負擔賦課の方法さへ其宜しきを得れば事は済むので、國民としては公債元利の償却の爲めに別に新しい負擔を荷ふわけではない。戰爭の爲めの直接負擔は、既に已に戰爭中及び戰後若干時に亘つて、國民としては荷ひ終つて居るのである。今内國債の元利償還を正直に又た大規模に行ふとしても、其れは國民の全體又は一部から取去られて、而

して再び國民の全體又は一部に支拂はれるのである。其の金額が如何に多くとも、國民を一體として觀るときは、右の手で支拂つたものを左の手で受け取るのであつて、決して新しい負擔を荷ふ次第ではないのである。従つて公債——内國債——踏倒しと云ふことは、言葉の上では非道いことのように聞へるであらうけれども、國民全體として見れば、正直に支拂つて貰ふ場合と大して差違があるのではない、差違のあるのは支拂者と受取者とが、國民中別々な階級に屬する場合のみ起るのである。其は負擔の新課ではなく、政府のやり方如何による富の分配の擾亂の問題である。戦争の爲め損失や犠牲ではなく、政府財政政策の犠牲である。此の事は現在の状態を正しく判斷するに方つて、是非篤と頭の中へ入れて置かなければならぬのである。私が堀江博士の説に反對して、公債の負擔を以て現下の難局の最大原因なりとするを誤なりと斷ずる所以は茲に存するのである。

六

戦争の爲に現在の歐洲國民が苦しみつゝあるのは、決して公債——外國債は今姑く問題外に置く、殊に私の説の如くに之を帳消しにするものと前提すれば、全く問題外に放出されるものである——元利支拂の爲ではない。然らば其は何であるか、答へて曰く、前に説明した如く、將來資源を以て戦争用に充てた爲め是れである。將來資源の充當は公債支辨とは決して同一視す可きものでないことは前に説明して置いた。公債支辨とは、政府の懐勘定丈けの話で、而も其れは金融財政上の一假面に過ぎない、現實の負擔其のものでは決して無いのである。現實の負擔としての將來資源の充當とは何々であるかと云へば、其れは前にも述べた通り、現存又は將來生ず可き資本を喰ひ込んだことを云ふので、戦争當時の所得を減ぜず、將來——即ち今日現在——の所得を減ずる作用を有する事項である。其方法は、一 對外的、二 對內的の二種あつて、對外的には又た(甲)自國の資本財を外國へ賣ること(乙)自國保有の外國有價證券を賣放つことの二つであり、對內的には(甲)自國の生産資本を戦争用に變ずること(乙)現在生産財の修理、修繕、補填を中止して、之れに充つ可き財を戦争用に充つること(丙)新投資を中止し之を戦争用に充つること

との三方法がある。何れも將來——即ち今とすれば、今日現在——に於て生ず可き所得を無理に戦時中に生ぜしめて之を戦争用に使つて仕舞つたことである。御伽噺にある金の卵を産む家鴨を毎日一々づつ生ませる代りに、其家鴨を殺して一時に幾つかの黄金の卵を取り出して之れを使つて仕舞つたやうなものである。言葉を換へて云へば、戦争の爲めに現在歐洲國民が苦しんで居るのは、物質上の有體物の損失ではなく、物質的の破壊の爲めの損失ではないこと、公債元利の支拂と云ふ積極的の支出の爲めでないのと同じである。其困難は受動的消極的のものである。即ち戦争が無かつたら依然として——或は更らにより、増して——得る可かりし新所得が、今日に於て得られなくなつたこと、即ち所得が減少したと云ふことである。其所得の減少——得らる可かりし所得が得られなくなつた——と云ふのは所得を産み出す可き資源が、所得を産み出す力を奪はれたからである。而して其れは主として、労働に其の労働機会を與ふ可きインダストリアルキアピタルの減少と云ふ形ちに於いて現に表はれて居る。即ち失業の激増と云ふ事が其れである。歐洲現在の失業は、労働に業を與ふ可きインダストリアルキアピタルの

減少が其の原因の一である。原因の一であると云ふのは、唯一の原因であると云ふこととは異ふ、否其の最大原因であるとも云へないのである。私は最大の原因は此等有形資本財の減少にありと信ぜぬ、否却つて全く外にありと思ふ。即ち國と國、人と人、民族と民族との間の憎悪心の激増並に經濟周期による人心の沈滞てふ二つの心理的原因こそ、最大なるものであると確信するのである。乍去有形資本財の減少したことは、確かなる事實であつて、其れが現在の失業不景氣の一原因であること、殊に其れが以上の心理的大原因と結付いて今日の悲境を産み出したものなることは、毫も疑を容れる餘地はないのである。

此の有形資本財の減少を救ふ道は、其の減少の道行を逆に行くより外にないと信ずる。即ち第一對外的の減少——資本財の外國への賣却、外國有價證券の賣却による——は又た對外的に救はれなければならぬ。戦時中歐洲諸國から資本財を買取り又其の保有の有價證券(公債も含む)を買つた國々、主としては米國——日本も其の仲間である——は、今歐洲の資本減少を救ふ可き其の生産資本を歐洲へ何等かの形——貸付でもよし進

上でもよし——に於いて返還してやらねばならぬ。斯くして歐洲に新たに所得を増す可き道を與へねばならぬのである。青木氏が大いに歐洲諸國に金を貸す可しと主張せらるゝのは、此の意味であらう、否此の意味でなければならぬ。唯一時の財政難——政府丈けの——を救つてやる爲に、金を貸すと云ふのでは無意味である、否場合によつては却つて有害である。斯く將來資源充當の一部たる對外的將來資源の充當分は米國、日本を始め歐洲以外の諸國が一度決心しさへすれば、之を大部分消滅せしむることが出来る。ソコデ残る所は、對内的なる將來資源充當分の處置である。其れは前にあげた通り、(甲)生産資本の戰爭轉用(乙)修繕修理補填の中止(丙)新投資の中止の三項目から成立つて居るが、其の多くは永久に失はれて仕舞つたもので、今更恢復し得ないものである。此點に於て對外的將來資源の充當とは大いに趣きを異にして居る。ダカラ、世界を一體として考へて見る時は、對外的將來資源の充當の方が人類全體としては遙に健全にして妥當な方法であつた。何となれば、其は唯だ一時の轉換に止まるもので、永久の喪失ではないから、其反對に交戰國が戰時中あらゆる無理を忍んで、自國將來の資源を充てた事は、再び

救ふ可からざる永遠の損失であつた。自國現在資源の充當は、其の時に於いては非常に苦しかつたに相違ない、乍去其れは少しも後腹を痛めることなくして済む——極端なる消費節約による國民能率の低下、國民營養不良による體質の退歩は此限りではないが——自國將來資源の充當は、今日に於て歐洲國民に著しく崇つて居るのであつて、堀江博士が之を以て現在難局の二大原因の一に數へられるのも、此點計りを觀察すれば十分諒解し得られるのである。乍併誤解してはならぬ。其れは現實の物の損失、有體的の破壊ではない、現在歐洲各國民を若しめつゝあるは、其より起る所の現在に於ける所得の減少、勞働機會の減少是れであつて、直接の破壊直接の費用其ものでは決して無いのである。物の破壊は莫大ではあつた、然し其れは歐洲國民の生産能率が戰前同様であつたら、若干年にして能く恢復し得るものであることは、前文に引用したケーンズ氏の言の如くである。而して物の破壊、有形の費用はイタラ大であつても、今日現在に於いて、歐洲國民の所得産出力が依然として大であるならば、其は少しも憂ふるには足りないのである。憂ふ可きは過去の損失ではない、現在に於る所得の減少、勞働機會の減少及び此れより起る弊害是

れである。永久に失はれた生産財其のものを再び呼起すことは望まれないことである。問題は如何にして現在に於ける歐洲諸國民の所得を増進す可きか之れである。然し此の問題を考ふる前に、未だ一つ考慮に入れなければならぬことがある。其れは不換紙幣の處置それである。

七

歐洲各國の政府が、戰費支辨の爲めに取つた方法の第三は不換紙幣の發行——濫發——之れであつた。不換紙幣の發行は、一方に於ては一の強制公債募入であり、他方に於ては、一の強制徵發である。而して其の何れとして見ても弊害の最も甚しいものであることは言ふまでもないが、何れの政府と雖も、決して好んで此の方法を取つたのではない、事情止むを得ずして發行したものである。強制公債として見た不換紙幣は、利子の支拂を要せぬ點に於て普通の公債と全く異なるものである。従つて前に内國債の利子支拂に就て論じた社會政策上の懸念は、毫も不換紙幣には伴はないのである。此の點は甚だ結構

な事である。其れと同じく元金の償却——即ち不換紙幣の償還に就ては、内國債の元金償却とは大分趣きが違ふのである。何となれば、不換紙幣の所持者は全國民の各階級に普及して居て、公債の如くに富者階級に特に分布されて居るものとは同じでないからである。故に若し歐洲諸國が今何等かの方法によつて、兌換開始（全額兌換でなくとも）をすることが出来るとなれば、其利に浴するものは國民全般であつて、決して一部階級に限られるのではない。従て内國債——外國債は勿論として——の踏倒しが、必ずしも普通の人の思ふが如き亂暴な事でないこと云つた道理は、不換紙幣で強制公債には適用せられないのである。不換紙幣の兌換開始（私は切り下げ兌換を主張する、其の事は後段に説く）は原則としては、最も希ふ可きことであつて、其の踏倒しは公債の場合の如くに考へらる可きではないのである。然し其れと同時に直ちに考へなければならぬことは、其の兌換開始が如何なる工夫によつて、如何なる資源からして實行せられるかの道行それである。不換紙幣の濫發による貨幣價值の下落は國民の凡ての階級を苦しめつゝある、乍去其の苦しみの程度及び性質は必ずしも一樣ではない。財産所有者は債權者として

は痛き打撃を受けるに相違ないが、其の保有する財産の種類によりては必ずしも打撃を受けて居らぬのである。近頃一の面白い逸話を聞いた、大戦争の始まつた頃、地利のヴキーンで或人が二人の男兒に夫々財産を分與して死んだ、兄は極めて謹直な人間で、其分たれた財産を全部銀行に預入れた、弟は放縱な人間で、其の大部分でウイスキーや葡萄酒を買入れた。然るに其後クローネの暴落の爲め、謹直な兄の財産は極めて僅の購買力しか有せなくなり、銀行利子の収入では迎も家計を維持し切れず、甚だ憐れな生活を営むの餘義なきに至つた。然るに放縱な弟は、其の買込んで置いた酒類の價が甚だ騰貴した爲めに、巨大なる富者となつたと云ふのである。恐らく此れに類した運命は、幾多の財産所有者を見舞つたであらう。轉じて勞働者を見れば、勞銀の騰貴が貨幣購買力の下落に應じて居る場合は、不換紙幣の濫發によつて害されて居ないわけであるが、定額俸給者は原則としては、貨幣購買力の下落に比例して増加して居らぬものであるから、不換紙幣濫發の爲めに、最も甚しい苦しみに陥つて居るのである。

右は國內關係に就て考へた處であるが、不換紙幣濫發により被むる歐洲各國民最大の

損害は、寧ろ他の方面にある、即ち對外關係是れである。就中今日現在の如く歐洲各國の貨幣が其の對内價值の下落より遙かに強い度合に於て、其の對内價值が下落して居る爲め、歐洲各國民は對外支拂の上に於て、外國より生活必需品や原料や其の他のものを買入れるに於て、他方には自國の生産品を外國に送るに於いて、實に想像し得ざる程の損を爲しつゝあるのである。其の反對に米國、日本其他の國々は、歐洲諸國の損に當る丈けの利を占めつゝあるのである。但し其れは、近頃のマルクの暴落に見る如く爲替相場が全く安定を失つて仕舞つては、唯だ勘定の上の話に止まつて實際の利とはならない、損は現實で利は假設的のものとなる。是れ位馬鹿々々しい事はないのである。其の利がタトへ現實的であつても、其れは決して正當なものではない、其の様な状態は決して永續す可き筈のものではない、必ず國際貿易の衰微を招き結局彼我共に損するのみである。況んや爲替關係が安定を失ふときは、國際貿易は不可能となる。今日世界の實狀は殆んど此極點まで達して居るのである。

八

即ち先づ第一の急務は、國際間の爲替關係の安定を恢復することである。其れは即ち各國本位貨の價値の安定を意味する。然るに不換紙幣の兌換開始が若しも急激に行はれ、ば貨幣價値の安定は迎も望まれない。兌換開始は結構なことであるが其れは今の處如何なる方法による可きか、各國共に考案が立たない。其考案の立つまで今日の不安定の狀態を其儘に繼續して行くことは到底堪へ得られないことである。其間に歐洲の疲弊は彌々益々著しくなる外はない。歐洲諸國の巨大なる不換紙幣の根本的整理は其の案も立たず、案が立つても其の實行の方法が見出されぬ。或人々の主張する如く——例へば米國のアンダーソン氏——之を悉く金貨全額面兌換にすると云ふことは言ふ可くして行はれ難いことである。其れに要する金は世界には存して居らぬし、存して居るとすれば價値の恢復は出来ないことである。其様な底の知れない相談には、少くとも日本は迎も與することは出来ない。之れに反して現在以下に各國貨幣の價値が下ら

ないように之を安定する工夫(スタビリゼーション)は立たない次第ではなく、其の爲めの貢献は日本の保有する僅かな金でも多少役に立ち得るのである。私は貨幣價値を戦前の程度に引上げると云ふ一切の試みは到底成効せぬものと考へて居る、我々の爲し得ること爲さざる可からざることは、價値の引直しでなく其の安定である。言葉を改めて云ふならば、歐洲諸國民が不換紙幣で強制公債又強制徵發によつて、既に今日までに支出し負擔し終つて居るものを、今改めて償還すると云ふことは出来ない相談である。それは踏倒す外はないものと思ふ。従つて一見甚だ希はしく見へる所の不換紙幣の金貨全額償却と云ふことは、之を斷念せねばならぬと思ふ。其の代り今日迄に下落した其價値に於て不換紙幣を償却すること、即ち今日以上に踏倒しをせざることが焦眉の急であると確信するものである。今日迄に下落した價値に於ても償却すると云ふことは、歐洲國民の凡ての階級を利することであつて、内國債の場合の如く、貧富の懸隔を此以上著しくすることにならぬと思ふ。但し此の事業を實行する手段が、貧者により、重く富者により、輕き負擔を課するような性質のものであれば、其れは別問題である。而して歐洲諸

國をして此仕事を爲さしめる爲めには、戰時中莫大な金貨を歐洲から得た米國が先づ其の保有の金を提供することを必要とする。日本も僅かではあるが、併し日本としては甚だ巨額な——金を獲得した其一部は必ず此の目的の爲めに提供せなければならぬ。歐洲諸國は斯く得た金と自國現在の金とを基礎として、新たに定む可き割合に於て金貨兌換を開始す可きである。詳しく云へば、マルクもフランもリールもクローネも——ルブルは勿論のとなり——茲に思切つた『デヴァルヴァション』『價値の切下げ』が斷行せられねばならぬ。其の決心が附かずにグズ／＼して居る間に困難は彌々加はるのみである。思ひ切つた『デヴァルヴァション』を行ふことなしには、貨幣價値の安定は到底之れを期待することは出来ない、私は信ずる。

九

ソコデ話は前に戻る。歐洲の救済は色々な問題を含んで居るが、其の多くは何れも救済の道行、救済の實現せられ得べき環境の作り出しに關係するものである。中心の問題

は、如何にして歐洲諸國民に、少くとも戰争前と同程度の所得を産み出すことを得せしむ可きかは是れである。

戰争用の爲めに將來資源を充てた内、對外的にかゝる部分は、米國が主として奮發すれば、之を恢復すること左まで難事でないことは前に論じた。ソコデ對内的のものは如何と見るに、第一の國內の生産資本の轉用は實は甚だ限られたもので、必ずしも莫大なものではない。何となれば、土地、建物、鐵道、其の他の不動産は、戰時中は直接又は間接戰争用に充てられたが、平和克復と共に間もなく生産用に恢復せられたに相違ない。戰争用に充てた切りで平和と共に生産用に恢復されないものは、多くは消耗品にかゝるのである。即ち食料、原料品、製造品等現に戰争當時に存して居たものは是れである。此等は一度其の用を充たして消滅したものである。若し之を生産用に充當すれば、或は長く或は短く將來に亘つて所得産出の資源となるべき筈のもので、其れが戰争の爲めに用ひられた爲め、最早所得を産み出さなくなつたのである。此れは今日に於て恢復に左迄困難を感じないのである。其の高も左迄大でなく、而して歐洲國民の生産力にして伸張しつゝある限り

は、其れ位のもは若干年の内に補填するに苦むことはないのである。第二の各種の修理改良の中止は、現に所得産出の額を著しく減じて居る。第三の新投資の中止も確かに所得減少の大作用を爲して居る。ソコで當面の問題は如何にして、此の二つの項目から来る所得の減少を恢復す可きかと云ふことになるのである。戰時中怠られた修理改良は今日以後之を新たにせねばならぬ。其の中に修理の閑却の爲めに全く用を爲さなくなつたものもあらう、それは全部の補填を要する、又は著しく生産力を減じたものもあらう、其れは新たに著しく労働なり資本なりを投ぜねばならぬ、戰時中繰延べられた新投資は、今日以後新たに試みられねばならぬ。以上何れの事をするにも、要する所は新しい資本の投下之れである。歐洲は今其資本を有して居らぬ。歐洲丈けの力では、此二項の補填は向後餘程年月を経るにあらざれば之を實現し能はぬのである。然る限りは歐洲の諸國民の所得増進は期し能はぬ。ソコで我々は再び米國に立戻つて來なければならぬ。米國が戰時中莫大に増加した其の資本の或部分を割いて、歐洲の將來資源充當を補填して呉れるのでなければ歐洲は救はれないのである。

斯く申する米國人は或は云ふであらう、左様汝等の主張する様に、一にも米國二にも米國と、米國が無盡藏の寶庫であるかのように當てにされては、米國と雖も堪へ得るものではない。我々とても歐洲救済の任を取て辭さうと欲するものではない。然し歐洲人のみならず、日本人たる汝等までもが、左様我國許り當てにするのは餘り蟲が善過ぎる話で、折角の我々の菩提心も却つて其れが爲に傷けられる。何とかも少し他の工夫も凝して呉れなくては困ると、如何にも尤も千萬の話である。今苦境の淵に沈める歐洲は勿論私共と雖も、何も米國斗り當てにして他に何等の工夫を凝らして居ないわけではない。唯だ米國の救済が問題の中核を形づくる所以を有力に物語らん爲めに、以上の様に八方から論じ詰めて見たに過ぎないのである。米國が一度思切つた援助を與へると決心したと云ふ一事だけで、歐洲人の心理は俄然として建直るであらう。然れば、實際は左まで米國の御厄介にならずとも、一度向上の曙光を見出した歐洲人は、自己の奮發自己の努力によつて失はれたるものは之を恢復し更らに新に大に伸ぶるであらうと、私共は確信して居るものである。而して米國が歐洲援助の大方針を確定すると云ふことは、今荒みに荒

み切つた世界の人心を振興するに預つて多大の力があるに相違ない。私共の眞に重きを置く所は、實に此の點に存するのであつて、米國の物質的經濟的援助は、此の心理的建直しを招致す可き手段として其の前提として、私共は之を切望するのである。何となれば、所得を産み出す眞正根本の淵源は、有形の貨財でなく實に人心の作用であるから。

十

乍併世界の人心の萎微沈滞は、獨り戦争に伴ふ憎惡心の昂進のみによるのではなく、私が見る所では、經濟周期の關係も亦重大である。此の點を無視しては、現下の問題の眞の解決は見出し得られない。歐洲に於る不換紙幣の處分『デヴァルヴァション』の問題、而して米國援助の決心も、歐洲に於ける所得産出力の恢復と共に、現在に於ては、何れも停滯の狀態に陥つて居るのは、世界人心の一般的萎微沈滞に加へて、經濟周期による最消極時代の到來が其の原因の一である。而して其れが爲めに、當面の問題たる經濟恢復就中不換紙幣の整理は全く行き悩み、否中止の狀に置かれねばならなくなつて居る。殊に私共の主

張するように、當面の仕事としては『デヴァルヴァション』による貨幣價値の安定を先にする可しとする考を取らず、如何にかして下落した本位貨の價値を改善——即ち引上げ——し得可きかと云ふ事に腐心して居る人々は、此の經濟周期の到來の爲めに、全く手を拱いて退かなければならなくなつた。何となれば然することは、現在の不景氣を彌々甚しくする外はないから。私は此一事丈けでも、其等の試みを以て今の時期に適せざる『インオポルチュニティ』な試みであると考へざるを得ぬ。之れに反して、私共の主張する様な『スタビリゼーション』の實現は、經濟的沈滞周期が到來しても少しも中止するを要せず、否寧ろ却つて彌々其實行の急を認めるものである。何故に然るか。

資本制經濟組織は、貨幣價値換價の行程によるものである。一切の生産は營利の爲めの生産であり、貨幣價値收得の爲めの生産である。一切の生産設備が與へられて居ても、生産の結果より多くの貨幣價値が收得せられ得る見込が存するのでなければ、生産は起らないのである。生産は直接消費と何の關係なしに起る。其目標は人の欲望充足ではない、人類に其の必要とする財貨を供給せんが爲めではない、唯だより多くの貨幣價値換

價を實現せんが爲めである。従つて物價が一般に下落する傾向の存するとき、又は或生産業の生産品の價格が下落する傾向の存するときは、或は一般に、或は其下落の傾向の存する生産業に於て、資本的企業者は生産を停止するか又は之を制限する。何となれば、折角生産費をかけて生産しても、其の生産品の換價——賣價——が生産費を償はざるか又は辛ふじて之を償ふ丈で、餘分の餘剩貨幣價值を生ぜざる可しと考へるから、骨を折つて生産に従事するは愚なことであるからである。而して生産費の中或ものは、短期間に之を切下げることの出来ないものがある。長い期間を當てにして割り出された器械の如きはそれである。又労働者に支拂ふ可き賃銀も、物價下落の際だとて、之を切下げることはいくつの場合に於て甚だ困難である。殊に此度の戦後の如く、労働者の勢力の著しく加はつた時期に於いては、僅かな切下げも労働争議を惹起す恐がある。ソコで、物價下落の傾向の存するにも拘らず、此等の生産費の貨幣換價は之を縮小することは困難である。然るに生産品の換價は、一般の下落に背馳することは出来ぬ、企業者は其の製品をより安く賣ることを餘儀なくせられる、だから出来るだけ生産を手控へする。其の反對に一般

物價が騰貴の傾向あるときは、生産費を餘計奮發しても生産を擴張する。直接の需要高の増減は必ずしも考慮に入るのではない。唯だ生産品をより多くの貨幣價值に換價し得可しとの希望は、企業者を驅つてより多くの生産を営ましめるのである。而して今日の發達した信用制度は此の勢を助長する。企業者は己れの手に必要な資本を有せずとも、より大なる換價の見込あるときは、信用機關を利用して生産に必要な資金を借入れて、生産を擴張することが出来るのである。戦後の好景氣は我邦に於いても、銀行の無謀なる貸出しによつて彌が上にも煽られた事實は、讀者の熟知する處であらう。だから一般の現象としては、物價騰貴の傾向あるときは實際の狀況が許す以上に好景氣を呈し、反對に物價下落の傾向あるときは、實際の狀況が已むなくする以上に不景氣を呈するのである。

十一

戰爭中は現在の資源は勿論將來の資源をも充當して戰爭用の働きと物とを支辨した

のだから、戦後に於いては物及働きに著しい不足を告げ、其補填の爲めに又た失はれたるものゝ恢復の爲めに、生産が激増す可きは當然である。即ち一時は其の狀を呈した。然らば今日は最早其の必要なきに至つたが爲に、生産が縮少したのかと云へば決して左様ではない。生産は彌々益々擴張して呉れなくては困る程、歐洲諸國民は不足を訴へつゝあるのである。イクラ作つても作つても決して之れに對して需要のないのを患ふるには及ばないのである。然るに今日は殆んど凡ての生産業者は生産を手控へ、其れでも未だ製品の販路のないのに苦しみ、世界は大なる不景氣に襲はれて居るのである。尤も船舶の如きは過剰生産とも云へようが、其れは寧ろ稀なる例外である。一般に就て云へば、人類の眞の需要の立場から見れば、著しい生産不足を告げつゝあるのである。然るに生産業者は生産の手控へを餘儀なくされて居る。何と云ふ不思議千萬な光景であらう。乍去、これは實に貨幣、信用經濟に立脚する今日の營利生産本位の資本經濟組織の本質の然らしめる處である。

貨幣價値の恢復は即ち物價下落の現象を伴ふ、獨塊露は別として、歐洲の物價は近頃段

々下落の趨勢を示して居る、其下落が那邊までに及ぶか、向後更らにもつと下落するか、其れとも此の邊が底を入れたものであるか、人によつて夫々見る所を異にするが、兎に角騰貴の見込は一寸附かないとは一般に信ぜられて居る處であつて、若し變化が起ることありとすれば、其れは下落の方向を取るものと考へられて居る。此くの如き時期を佛蘭西語で『ベース』の時期と云ふ今日は『ベース』も餘程甚しい時期に於てある。従つて、商品有するものは、其の價が向後下落す可きことを考へるから、早く賣放たうとするけれども、買手も亦向後猶下落しはせぬかと云ふ懸念を有するから、目下是非必要の物の外は買はないで他日の安値を待つて居る。新規注文をしようとするものも、他日更に安い供給が得られるであらうと思ふが故に、目前に缺く可からざるものゝ注文だけに止めて置く。かくて商品の賣行は悪く新規の注文は少ない。所謂注文生産でなく市場生産を營むものにあつては、生産品が出来上る頃は、其の賣價は更らに下落するであらうとの心配があるから、極く利益の見込あるものにあらざる限りは生産を差控へる。生産の差控へは、労働者雇入れの差控へであり、原料品買入れの差控へとならざるを得ない。かくて加

速的に一切の經濟的活動は萎縮するに至るのである。

資本主義的經濟組織の中心は流通市場である。市場は全經濟的活動を左右する。市場に於て或る商品に對する需要が増加するときは、之れに應ずる供給は需要増加の高より更らに多くなる傾向がある。其の反對に市場に於いて或商品に對する需要が減ずるときは、供給は需要が減じた以上に差控へられんとする傾向を持つものである。市場に於て需要が増すときは、供給は資本又は勞働の不足などを殆んど顧慮する暇も持たない。實際の事情として賣行の見込さへ確實なれば資本の供給は殆んど不足することはない、即ち信用機關が茲に働き出して、如何様にもして資本を融通して來るのである。勞働の供給も亦不足を告ぐることは稀である。如何に好景氣の世の中でも、失業者の全く存せぬと云ふとのないのを見て、此の點は直ちに首肯し得られるのであらう。如何に好景氣の時代に於ても、資本的企業は一切の資本と勞働とを用ひ盡くし得ぬと云ふのは何故であるかと云へば、今日の企業組織は物を生産する爲めの組織でなく、市場を見出す爲めの組織であるからである。此の組織の下に於ては、需要あつて後供給起ると云ふよりも、寧ろ供給あつて需要の喚起を勉めつゝあるのである。此の點に就てはマーシアル先生が其の經濟原論に於て不可動的の確説を述べて居る。今日の企業者はあらゆる方法を用ゐて、自己の生産品自己の商品を賣付けんと勉めつゝある。其れが爲めに莫大なる費用を投じて廣告をする。最も盛んに廣告するものが最も多く賣る人で、必ずしも最も良き商品を藏する人が最も多く賣るのではない、詰らない賣藥などでも、盛んに廣告すると澤山賣れると云ふことは我々が日常見て居る處であるが、斯く極端ではないけれども、凡そ總ての商品は皆同一の作用の下に供給せられて居ると見て大過ないのである。市場が一切の生産を支配するので、生産が市場を支配するのではなくたのである。

十二

普通景氣の悪いときは、資本も勞働も共に有り餘つて空しく使用者を待つて居るのであるが、今日の不景氣に於いては、有り餘つて居るのは勞働であつて、歐洲に於ける失業者の數は甚だ大なるものであるが、其の反對に資本は却つて不足を告げて居るのである。

普通の場合に於ては、商品の賣行が止まり資本の使ひ道がないと云ふのは、商品の供給が多きに過ぎた爲に其價格が下落し、企業者は相當の利益を得可き價格に於て其商品を賣捌くことが出来ないからである。此くの如き場合には、價格が少し騰貴しさえすれば、不景氣は一轉して好景氣となることも有り得るのである。否、其れが實際の事實であつたのである。然るに今日の不景氣は、其れとは趣きを異にして居る。商品の供給は過多ドロカ、今猶昨の如く甚しい不足を告げて居るのである。従つて其價格の下落は供給過多の爲めではない。ダカラいくら生産を手控して供給を減じたからとて、其れ丈で景氣の恢復を期待するとは決して出来ないのである。今日の不景氣も亦價格下落を以て一原因とすることは、普通の不景氣と同じである。が、抑々其の價格下落を惹き起した根本の事情が全く異つて居るのである。即ち今日の一般價格下落、換言すれば物價の下落は、甚しく下落した貨幣購買力の恢復が其の主要の原因である。原因は主として貨幣の側にあるので、商品の側に存するのではない。而して貨幣購買力の恢復は未だ今日を以て終りを告げたりと斷言することは出来ない。向後も猶繼續して恢復の行程を續けるかも知れない。

然るとき一般物價は向後も猶或る時期に向つては下落の趨勢を呈して、容易に逆轉することがないかも知れない。少くとも歐洲の人々、否、世界一般の人々の考ふる所は粗々左様である。然る限り此の點からしては景氣の恢復は求め得られない、否、今日よりも猶更らに不景氣の狀を呈するに至るかも知られないのである。普通の經濟周期は勢窮つて而して轉ずと云ふのが常例であるが、今日の不景氣は勢は窮り放しになるかも知れないので、少くとも其の轉換の力は普通周期の場合の様に、自然的に其自らに任せられた儘で生じ得るとは考へられないのである。殊に貨幣價値の安定よりも、寧ろ其の改善即ち引上げを急行す可しとの説が有力である限りは、景氣の恢復はよし自然的に起るとしても甚だしく其力を弱められると思はなければならぬのである。

僅か乍らの利潤の増減の爲めに、好景氣不景氣忽ちにして處を變ずると云ふような現在の經濟組織は、決して理想的なものではないと言ふ迄もない。其の爲めに人間の眞の經濟的厚生の上が著るしく妨げられて居ることは疑ひを容れない處である。今日貨物の不足を訴ふること甚だしい世界に於て、唯だ企業家等が利潤が得られない、否、得られて

も其の率が低いからとて、生産を手控へて不景氣の現象を現出し、其爲めに人も我も共に苦しみつゝありと云ふことは、考へれば考へるほど馬鹿げた話である。乍併現在の貨幣及信用經濟に立脚する資本主義的生産の下に於いては、此れは不可免運命である。我々は歐洲救済の爲に種々なる事を爲さねばならぬ、不換紙幣整理の爲めに多大の力を貸さねばならぬ。殊に我々は歐洲に於ける、否世界全體に渉る國と國人と人、民族と民族との間に蟠まる極端なる敵視心、嫉妬心、憎惡心の除却に勉めなければならぬ、乍併其れと共に今日の如き行詰りを循環的に餘儀なくする處の貨幣經濟其上に築れたる信用金融財政の仕組を如何にして少くとも此の循環から脱出することを得せしめる丈けに、建直し得可きかを考慮せねばならぬのである。此れは實に重大な問題であるが、其れを考慮することは、世界の經濟的改造を眞に實現せんとするには、決して辭するを得ざる所である。私は稿を改めて他の機會に於て、今日の貨幣制度が如何に建直され得るか、如何に建直すのでなければならぬかの問題を取扱つて見ようと思ふのである。而して此の問題の考察は、又同時に歐洲現下の難問題たる不換紙幣整理の事業に對して、根本的方針を與へる

こととなるのである。否ならねばならぬと思ふのである。(二二二—二二四脱稿)

|| 大正十二年一月號『改造』掲載 ||

四 復興經濟の原理及若干問題

一 復興經濟の第一原理

此度の大災による損失は、八十億百億或は二百億などと稱せられて居る。統計局に於いては嘗つて國際聯盟からの要求に應じて作成した（日本全體の富の總額を大正八年に於て八百六十億圓と計上した）『戰前戰後に於ける國富統計』大正十年十月刊行を基礎とし、其の推算方法に準據し、各項に就て大災による損害高を推算す可く、目下其調査を急行中なりと聞く。新聞紙に散見する所では、大藏省は逸早くも其調査なるものを公表して、損害總額約百一億圓なりとしたさうである。即ち十月九日夕刊の時事新報の記する處左の如し。

四 復興經濟の原理及若干問題

1720

大震災火災の損害見積總額約百一億圓（大藏省の調査）

今回の大震災に伴ふ損害額の正確なる見積りは極めて至難のことであつて殆ど幾百十億圓に達するか見當がつかぬ爲め英米等の各市場に於ては今回日本の蒙つた損害を或は二百億圓と傳へ種々我國に不利な宣傳も行はれて居るので大藏省に於ては過般來信憑し得べき損害額の見積調査を始めてゐたが最近漸く確定數を得るに至つた。即ち大藏省の調査に依ると今回の震災に伴ふ官民損害高見積總額は約百一億圓であつて其内容は左の如くである。

區分	戸數	家屋	家財	商	品官公有物	計
東京市	六八、三五五	三、八三一、二〇五	九五七、七六七	三、〇〇〇、〇〇〇	其他	八、一五九、九七七
東京府	三四四、五六六	六八九、一三三	八六、一四一	五、〇〇〇、〇〇〇		七六〇、二七三
横濱市	九三、五二〇	四六、五〇〇	一六、八八七	一〇〇、〇〇〇		七八四、四三七
横須賀市	一、五七四	四七、二二三	一一、八〇五	三、〇〇〇		六三、〇二六
神奈川縣	一四二、五六六	一四、二五八	三五、六四六	三、〇〇〇		一八一、二三三
埼玉縣	一七、七三三	八、五六六	八、五六六	二、〇〇〇		九六、四三三
山梨縣	四四、七三五	二、三三〇	二、三三六	一、〇〇〇		三五、五九六
千葉縣	一八、三五八	五九、九一九	五、九一七	三、〇〇〇	全區	六七、〇九六
計	一、五六七、三三三	五、三四五、〇四六	一、三三三、〇〇五	二、二二六、〇〇〇	一、三三三、〇〇〇	一、四〇〇、〇〇〇

右は震災に伴ふ經濟機關の破滅金融の梗塞其他の事由に依り回收の見込立たざるに至れる

る債權關係の損害を含まず物的損害の大體に就き概數を算出したるに過ぎず尙ほ正確なる計數に就ては後日再調査に着手する筈であると云ふ。

右の調査なるものは何を根據としたものであるか、又た其推算の方法は如何、何れも示されて居ないのであつて、我々は輕々しく之を受入るゝに躊躇するのである。思ふに大藏省としては、外國に對する日本の財政的信用を成る可く毀さぬ様、震災火災による日本の損害高を成る可く大きく見せしめないことに苦心する必要があるらうし、又た成る可く早く損害の餘り大きくならざることを海外に知らせたいと欲するであらう。之れは財政責任者としては無理もないことではあらうが、併し事の實際と餘り違つた數字を公けにすると、他日的確な材料に基いた調査額が、之れと大差を示さないとも限らない。其爲め局を撃射する様な思ふなことは爲すまいと思ふが、然るときは却つて信用を害する事とならう。例へば東京市の家屋損害高は三十八億圓となつて居るが、東京市調と稱するものによれば、其れは十四億六千三百萬圓とされて居る。前者は後者の二倍半強に當るのである。されば我々は統計局の調査も亦不完全なる可きを覺悟しつゝも、少くとも専門的推計に基く

一 復興經濟の第一原理

1721

其調査の完了するまでは、損害額其ものに就ては、妄りに臆測を逞うすることを避けねばならぬ。此點から云へば大藏省の發表は、早計の嫌なしとは云へぬのである。従つて、一定の數字に基いて、被害の程度を考察するとは今は見合はさねばならぬ。乍去私は決して之を悲觀せざる者である。何となれば、私の立場から見た經濟上の損失（エコノミツク・ロツス）なるものは、地震の爲に倒され、火事の爲めに焼かれた富ではないからである。

附記、極めて最近の調査にかゝるものに大正十四年東京市統計課發行『震災に因る日本の損失』其れによると大震災による損害總額は五十五億六百萬圓と見積られて居る。

此度の大災の爲めに滅亡に歸せられたものは、之れを金額に見積れば莫大なものであらう。然し乍ら、日本の國民經濟の立場から、眞の損失と目す可きものは、實は此等の破壊せられ焼却せられたものゝ凡てではなく、其一部に過ぎないのである。假りに此度の火災が東京横濱の代りに、京都や奈良を襲つたものとするときは、我々は永久に恢復し能はざる損失を多大に被るであらう。然るに東京殊に横濱に於ては、永久に恢復し能はざる損失となる可きものは、實は寧ろ甚だ勤いのであつて、國寶の焼かれたものは何れ程あつたか知らぬが恐らく大したものではある。大々部分は、向後に於ける我々の努力次第で、晚かれ早かれ恢復せらる可きものに屬

するのである。語を換へて云へば、東京横濱に於ける損害は、貨幣價值としては實に莫大なもので、或は二百億圓にも達するかも知れないが、我々の努力によつて、其の二百億圓を産み出しさへすれば、其れで十分に恢復せられたことになるのである。之れを經濟學の術語で云へば、此度の火災の滅ぼしたものゝ大々部分は、何れも再生産物（レプロデュシブル・グーズ）に屬するのであつて、非再生産物（ノンレプロデュシブル・グーズ）に屬するものは、單に其一部分にしか過ぎないのである。殊に横濱に於ては、金に換ふること能はざるもの、即ち將來の我々の經濟的努力によつて恢復し得られざるものは、殆んど横濱市史資料としか古美術品と絶無と云つても大過ない。東京に於ては必ずしも左様ではない。近いかを除いては、近いかを除いては例が帝大の圖書館の如き、其大々部分は金で買ひ得る再生産物に屬するであらうが、若干部分は到底再生産し得られないものである。其他本所の安田氏の文庫を始め多くの學者、藏書家の手にあつた稀覯の古本、又は諸家珍藏の古美術品、但し中には如何はしいものも、有難がつて居たものも、妙まいがあるの如き、湯島の聖堂を始め恢復に甚だ困難なる歴史的諸建造物の如き、何れも非再生産物に屬する。鎌倉に於いても若干種のものゝが失はれた。此等は向後我々が如

何に努力するとも到底再び得る能はざるものである。然し淺草の觀音堂に於いて一例を見るが如く、此種のものゝ不思議にも救ひ出されたものもある。差引いて金に換へ得る損害の莫大であつた割合には、其然らざるものゝ損失は輕微であつたと云ひ得るかと思ふ。従つて此度の火災による有形的の損害は眞に永久に損失となるべきものは、世人の思ふが如く大なるものではない。建築物でも横濱は更なり東京にだつて、金に換へ得難い眞に惜しい永久的損失たるものは尠く、何れも金さへあれば直ちに再建し得られるものであつたかと思ふ。唯到底取り返しの附かぬ重大な損失は貴重なる人命の多くを各地に於いて失つたことである。其一人をも失ふことは惜しむ可きである、其人命を何萬と云ふ數に於いて失つたことは、此度の損失中の最大なものであつた。殊に地震や火事ばかりでなく、途方もない宣傳流説の爲めに又た人心の激動の爲めに、若くは一部の奇妙な『國士』とか稱する人々の暴行の爲めに、無辜な人命の失はれたことは、幾度之れを慨いても猶且つ及ばざる大損失である。然し此れは私が今考へんとする經濟上の事項に屬しないから問題外とせねばならぬ。

私は敢へて斷言する。此度の火災の齎した大損失は、其過去に屬する部分即ち地震、火事によりて眼前に滅ぼされた部分は寧ろ小である。何となれば、大部分は恢復し得られるものに屬するから。眞正なる恢復し得られざる損失の大部分は此等過去のものに存せずして却つて將來に存する。之を言へ換て見れば、復興日本が其の適當の經濟生活に復興するに就いて要す可き所の將來の犠牲が復興によりて得る所のものを償はざる部分が眞の損失となるのである。將來は我々の經營如何によつて左右せられるものであつて、固定不動のものではない。従つて此損失は決して固定不動のものではない。否將來に於ける我々の努力如何によつて、之を著しく増すこともあらうし、又た其の反對に之を減することも出来るものである。我々の努力にして正しき道を踏み行くならば、或は此の損失を殆んど皆無にもなし得るものである。茲に言葉の用ひ方によつて、右の區別を表はさうとすれば、震火災によつて直接に我々が被つたものは、material harm マテリアル・ハーム(物的被害)である。其或ものは damage ダメージ(損害)となるであらうか、ダメージは必ずしも loss ロツス(損失)(茲ではエコノミック・ロツス)(經濟的損失)たるもので

はない。ロツスとは恢復の絶對に出来ない永久に失はれたもの、謂である。

二

以上の道理は、私が今事新しく申すまでもなく、經濟學殊に流通經濟の原理を少し進んで學んだ人ならば、直ちに心付く可きことであつて、歐洲の大戦後の經濟に就いても、彼の國々の卓越した學者達が繰返し々々其國民に説き聞かせた所である。今一般讀者の爲めに極く簡單に其説明を試みて見よう。普通我々が物を賣買するときには、一方に利用他方に費用が必ず伴ふものである。私が帽子一個を金五圓で買ふときには私に取つては、其の帽子の費用は金五圓であつて、其の帽子を買ふことによつて獲得する利益は、之を貨幣額に見積つては、金五圓以上の或額であるのである。然らざる場合には、金五圓の費用を投じて其の帽子を買ふのは愚である。買手たる私に取つては、其帽子が何程で生産せられたかと云ふ過去の事項は直接には何の關係もないことである。私に取つては、現に金五圓を受ぜざれば、其帽子を買ひ得ないと云ふことのみが意味を持つのである。ト

コロが不幸にして私は此度の火事の爲めに其帽子を焼いて仕舞つたとする。ソコデ私は新たに一個の帽子を買はねばならぬ。幸にも政府の暴利取締令が帽子に迄及ぶものと假定して、私が今新たに前と全く同じい帽子を、燒跡のバラツク店で金四圓五十錢で買ひ得たとする。然るときは、火事によつて被つた私の損失は、五圓でなくして四圓五十錢である。言直して見れば、災前に私の支拂ふ可き額丈けが、私の損失を言顯して居るのである。私に帽子を賣る洋品商の立場から云つても同じことである。彼は従來四圓に仕入れた帽子を五圓に賣つて居つた。然るに彼は火事の爲めに其帽子五十個を灰にして仕舞つた。彼の損失は二百圓であつたかのやうに考へられる。然るに、災後帽子の卸値が下つて一個三圓五十錢で仕入れ得ることとなつたと假定せよ、彼の損失は實は二百圓ではなくして金百七十五圓に過ぎないのである。以上の道理を經濟學では『再生産費の法則』と云ふ。曰く、物の價格を支配するものは、再生産物に就ては、其生産費ではなく其再生産費であると。尤も此再生産費の法則から、如上の例に至るまでは、多少込入つた説明を要するのであるが、其れは本論に直接の關係のないことであるから略して置く。

私が茲に復興經濟の原理と名くるものは實に新しい考案に成るものでも何んでもない。畢竟は此の再生産費の法則の適用の一を指して云ふに外ならないのである。曰く復興經濟の立場から見るとの眞の經濟的損失(リアル・エコノミック・ロス)とは復興によつて得らるゝ利用に超過する向後の費用の總計に外ならないと。故に其利用が費用に超過すれば結局は何の損失を被らないことになる。復興の利用小なるか其の費用大なるかにより、後者前者に超過するときに於いて始めて我々の眞の損失を指摘し得るのである。モ一つ言換へて見れば、日本國民經濟全體として又た罹災地の經濟全體として向後復興し行く間に於いて我々の經濟生活を支へ行きつゝ享受する一切の經濟的利用が、災前の其れよりも小なるか之を得るが爲めに我々の捧ぐる犠牲即ち費用が大なるか、並に其二つともが事實である場合に於いて我々は眞の損失者となるのである。従つて我々が眞正の意味に於いて結局損失者たるか否かは、獨り將來のみが決定する所の事項であつて、今の處では實は分らないのである。今に於て分り得るものは(其れも實は適確には到底分るまいが)唯だ如何れ丈けの有形財が火災の爲に減ぼされたかの一事(即ち

マテリアル・ホーム)のみである。而して其れは我々の損害其ものとも損失其ものとも決して同一物ではないのである。

三

地震並に火事の爲めに財物を失つたと云ふこと其事が我々の生存に對して直ちに損害(ダメージ)たるのではない。焼け出された何萬の人々は恐らく其焼いたものゝ中には焼いても惜しくないものを必ず若干持つて居たらう。心持の上に於ては或は惜しいかも知れないが生存を營んで行く事實の上からは何等の損害と云ふ能はざるものもあつたらう。殊に日本の家庭には、随分無用な家財、家具、衣服、日用品が何時の間にか堆積して居るのを常とする。屑屋に賣らうと思つても買つても呉れず、さればとて態々捨てに行くのも面倒だから、其儘に仕舞ひ込んであるものもあらう。多く物を持つ人ほど、通例は、此種の無用の物品を多く持つて居る。又全く無用と云ふこと能はず、屑屋は喜んで買つて行く様なものでも焼かれた人其人に取つては、永年の間一度も使用したことのない

物品年に一遍被るか被ないか分らない衣類（女で云へば裾模様だの、男で云へば燕尾服、大禮服だの）もあらう。若しくは、其れ程でなく従来は用のあつたものでも向後の生活上殊に罹災當時の緊張した嚴肅な氣分の衰へざる限りは、其れがなくとも少しも生存上不利不便を感じぬものなど必ずあらう。其等のものを合せた高は、一家庭毎に相應の高に上つて居つたかも知れない。更に又一步を進めて、向後著しく質素な（乍併實質上充實した）生活振に改めるならば、なくとも事足る種類のものを之に加算したならば、其れは、場合によつて著しい高に上るかも知れないと思ふ。此等のものが焼かれたことは、物の消滅破壊には相違ないが、向後將來の我々の經濟生活の立場から云へば、何等の損失とならないものである。百億圓とか二百億圓とか云ふ中、其等が何割を占めるかは、向後の復興經濟の立て方如何、向後の我々各自の生活振り如何によつて決定せられることである。今日の處、其れは如何にしても知り能はざるのである。知り能はぬ筈である。之れを要するに、大災によつて我々が被つた損失は、今日に於ては未知數である。其れを大なる數とするも小なる數とするも、何れも向後將來に於ける我々の經濟の運營如何によるのである。

る。官公署、學校其他の團體、銀行會社、商店工場等に就ても亦全く同じ事である。

大震災の損害何億と云ふけれども、實は我々の現實の生存に對する其の價值は之によつて言表はされて居らぬ。到底貨幣額を以つて表示し得られない程莫大な眞正の價值の損失たるものもある。他方には之れを作つたとき買入れたとき、何千圓とか何萬圓とかを要したと云ふ廉を以つて、其額丈けに計上せられては居るが、現實には其の半分の價值もないもの、若しくは價值皆無のものなども其中に含まれて居るのである。従つて過去存在物の消滅と云ふ眼から見ても、今何億圓と稱せられて居る所謂損害（ダメージ）額なるものは、我々の現實の生活とは直接には沒交渉なものである。況んや眞の損失（リアルロス）と過去存在物の消滅とは、全く別の事であるに於てをや。眞の損失とは我々が向後の生存に於いて、大震災なかりしならば我々が享受し得可かりし利用の享受し得られなくなることの謂に外ならないのである。反對に大震災ありし爲に、殊に罹災後の緊張肅正せられた經濟の立て方により、直接間接に新たに享受し得る様になつた一切の利用便宜は、其得られざる利用便益から差引かれなければならぬのである。少し見方を

かへて費用の上から云へば、向後の我々の生活の爲めに我々が提供せねばならぬ費用中、火災がなかつたならば、當然提供せずして済む可かりし費用丈けが眞の意味にての損失となるのである。従つて復興費何十億と稱するも、其の一切が眞正の意味にての費用たるのではない、火災がなくとも我々が支出せなければならぬ費用は、決して復興の費用でなく、唯だ一の費用項目が他の項目に轉換流用せられたに過ぎないのである。例へば救護費の重なる項目たる食料品の如きは、火災なくとも消費せらるゝを要するものである。否其費用の節約せられたものである。従つて其れは新しい費用ではなく必ず不可免人生の費用である。唯だ消費をする他方に徒手遊食して何等の富を作り出さないことが、眞の損失眞の費用となるのである。換言すれば復興と云ふことがなかつたならば、提供することを全く必要としないであらう所のもののみが眞正に復興の費用と目せらるべきものである。

四

以上言ふ所を要約すれば、一方には復興に依て得る一切の利用、他方には復興の爲に其れがなかつたなれば、提供せずして済むべき一切の費用、此兩者を對照して後者が前者に超過する額丈けが、我々が震火災の爲めに被つた損失額となるわけである。此の道理は、流通經濟の第一原理から見れば、極めて簡單明瞭な事柄であつて、特に國際貿易の理論に於いて、今から百餘年前に、英國の學者デヴキッドリカルドが説き始めた所謂『比較的生産費の理論』なるものは、此第一原理を最も明白に展示して居るのである。私はリカルド並に後年に於てジョンステュアート・ミルが力を用ゐて説いた此理論は、又た直ちに此度の火災後の日本の復興經濟の第一原理たるものと信するのである。

一つ例をあげて見れば、東京市の調では、東京市内の建物の被害額は十四億六千三百萬圓である。前掲國富統計では日本全體の建物價格を四十九億三千萬圓としてあるから、其の三割強となるわけであるが、是れは無論過大に失すると思ふ。國富統計では東京全體の建物戸數は七十三萬戸で、其價格は五億三千六百萬圓となつて居る、此割で行くと東京の焼失戸數は三十七萬戸とすれば、二億七千萬圓許りの被害となるに過ぎない。是は又過少に失すると思ふ。況んや、前掲大藏省調査の三十八億萬圓は過大に失するに相違ない。此數字は住宅は坪當り二百五十圓、其他建物は坪當り三百五十圓を單價として、其れぐの焼失坪數に乗じた者である。

十月十三日 時事新報 此推算

は所謂被害調としては信を措くに足るものであらうが、坪當り二百五十圓の三百五十圓のと云ふ平均額に就ては疑を挟む餘地がある。加之焼失總坪數五百三十萬七千四百二坪、内住宅三百九十三萬九千九百坪、官衙公署三十一萬五千八百八十六坪、官公舎一萬七千二坪、學校圖書館十四萬千七百七十八坪、神社寺院會堂七萬二千七坪、銀行會社二十五萬二千二十五坪、工場倉庫五十五萬七千九十一坪、劇場娛樂場三萬三百八十五坪、其他八萬四千九百十九坪などの内、向後復興經濟に於て眞になくはならぬもの、之れなくば我々が文明の生活を營むに事缺くものが何れ丈あるかは、右の調丈では分らないのである。多くの建物の中には、三年、五年、十年の内には、改築又は修繕を加ふるに非れば、使用に堪へなくなる可きものも、必らず尠らず存して居たらう。其等を二百五十圓の三百五十圓のと見積ることは、過大に失するは云ふ迄もない。或は又其れあるが爲めに却つて不便不自由を感じ、改築したくとも其れが兎に角存する爲めに、生活の改善を斷行することが出来なかつたものもあらう。従つて其坪當り價値は或は零であつたかも知れぬ、又或は向後全く其種のを建設する必要の存せざるに至る可きもの、寧ろ其の消滅が健全なる生活の

運營の爲めに希はしいもの等もあつたこと、と思はれる。此等の坪當り價値は、寧ろマイナスであつたと云ふ可きである。其等のもの、消滅したことは、決して丸々損害とは云へないのである。又た或ものは少しも損害とはならないものもあるであらう。或ものは損害には相違ないが、坪當り二百五十圓若くは三百五十圓などと云ふ金額によつて表すべき損失とはならないものもあらう。現に建物として存在するからこそこれに住ひ之れを使用して居るもの、其れは極めて無駄に使用せられて居たものもあらう。我々の小さな生活に於ても、ツヒ買込んだ帽子が二つも三つもあつたり、靴が三足も四足もあつたりすることがある。二つも三つもあるから、時々取かへて被るけれども、一個の帽子しかなければとて、別に不便不自由を感じぬのである。紳士が本宅の外に別宅の別荘のと何軒も住宅を有して居るときは、時々居を移しても見るが、丸焼けの今日一軒の家しかないとなつても、其人の生活便益の享受は、三軒も四軒も家を有して居たときと必ずしも異らぬことであらう。或は妾宅などが焼けて之を復興しない爲め、却つて家内が圓滿になると云ふ積極的利益のある場合もあらう。之を大きく東京市横濱市などの自治體

の上に就いて見ても、若くは日本國全體の上に就いて見ても、亦同じ様なことが云ひ得るのである。官廳、公衙、官舎、官邸などの類、又は學校などの類にも左様云ふものが必ずあらうと思ふ。一般社會の立場から見れば、猶更らに然りと云ふ可きかと思ふ。思付いた一例をあぐれば、東京には大學と云ふ名を冠したものが十許りもある。日本の社會から見、日本の學問教育の上から見るときは、此れは確かに無駄なことであつた。火災の爲め私立大學の中には、維持困難に陥つて、頻りに政府の補助金を要請しつゝありとか云ふことであるが、十幾つかの大學がタトへ維持可能であつても、其凡てを復興さすべき必要はない。何處の文明國に一都會に十幾つの大學があるか。十幾つの大學の中二つか三つかが焼け残つた丈で、跡は皆全半焼したと云ふ、其の焼けたものを坪當り三百五十圓と見て、之れを損害額と稱することは出来ない。極端に云へば、焼けた方が寧ろ勝れりと云ふ可き額が其中に含まれて居るに相違ない。然るに若し、政府が其れ等十幾つの大學を悉く補助して、何れも災前の状態を復舊させるときは、我が社會の蒙る損害は焼失額と同額或は其れ以上にも及ぶであらう。反對に維持の困難な大學の幾つかを合併して、

茲に名實相副ふ眞の大學を復興することにするならば、我々の損害額は或は甚だ少額となるか、或は却つて利益の高の方が多し事となるかも知れないのである。焼残つた大學と焼失した大學とを合併し、圖書館を合併増大し、研究室とか運動場とか寄宿舎とか學生集會所とかの設備を充實し、或は郊外の空氣の良い處に移して、茲に緊張し充實した大學生活を營ましむるやうにすれば、教師全體としても、學生全體としても、又社會全體としても享受する利用は非常に増大するによつて、其れに要する費用は多大であるとしても、優に其れを償つて餘あつて、大學の焼失は帝大圖書館藏書中の或もの、焼失丈は永久日本に免れ得ざる眞の損失たるには相違ないがの社會日本の學問に取つて、實は何の損害損失をも意味しないことになり得るかも知れないのである。即ち其れが損失となるか否、其損失の高はどれ程となるかは、火災が之れを決定するものでなく、我々人間の努力我々の將來に對する向背が之れを決定するのである。

五

右の一例で明かなる如く、損失を最大ならしめる方法は災前の状態を其儘恢復する復舊と云ふ方法は是れである。何となれば復舊舊狀其儘の恢復は、火災による物の破壊の全部其儘を眞の損失に換價せしむる所以であつて、其小なり大なりの部分を免れることを許さない方法であるから。故に他の點は姑く措き、經濟上の費用、經濟上の損失と云ふ一點からのみ見るときは、最悪最拙の經濟は復舊經濟是であると云はねばならぬのである。更に又經濟以外の考慮から云つても、復舊は禍の全部を永久の禍とする所以であつて、俗に所謂禍を轉じて福と爲すことが出来ない、焼け太りでなく、焼細りの外ないのである。

此道理は、單に有形物のみ止るのではない、否利害の岐ること最も大なるは、寧ろ無形の上に存するのである。従來行政整理と云ふと、必ず二割天引とか三割天引とか云ふことをやるが、之れは最悪の經濟法である。行政機關の組み立て方を其儘にして置いて、單に役人の數を減じ勤務時間を長くし、甚しきは暑休、半休を廢し、物件費を切り詰めたりして能率を著しく減じ、唯金の費用を節した丈で、之れを整理と名くるのは迂濶も甚しいことである。今日の行政には、其組立て方の上に於て其の運營の上に於て、實に名狀す

可からざる程澤山の無駄をやつて居る。其が一朝非常の事起るときは、誰人の目にも付くやうになるが、平生は多くは無意識の間に過して居る。芝浦の滞貨は實は芝浦のみでなく、今日の官廳公衙には、實に芝浦に數倍した停滞物件、事件物件が山の如くに存して居るのである。詰らぬ訴訟事件が三年も四年もかゝつて判決が下らないなどとはよく聞くことであるが、其れは決して獨り裁判所のみに限られたことではない。私は屢々區役所の罹災者配給を目撃して居るが、朝私共が見た同じ人が、晩歸途につくときに、未だ風呂敷やバケツをブラ下げて長い列を作つて、役所の前に立つて居るのを見受ける事がある。之れが日本の自治體、政府、否銀行會社を通じて一般に見る實際の事實である。此頃やかましい火災保險の事でも、保險に加入して保險金を拂つてから一ヶ月たつても、未だ契約書を送つて來ぬ、而して其の契約書には、被保險者が夢にも見たことのない地震、其他の免責特約條項が記載してある。私の知つて居る人で、幸ひ火事を免れたからとて、災後數日直ちに火災保險を付けたが、私が執筆して居る今日迄まだ契約書の送附を受けぬとこぼして居た人がある。又他の一知人は、昨年十二月横濱の某汽船で起つた火災の

保險金をやつと十月十五六日頃受取つたと云ふことを聞いてゐる。こんな例は實に筈で掃くほど澤山あるのである。災後の郵便電信電話の恢復の遅鈍さなどは實に馬鹿らしくて之を口にするだも面倒な次第である。九月二日の官報が大阪に配達せられたのは七日か八日のことであつたと云ふ其れなら日本は凡て此の調子かと云ふと決して左様でない。大阪では東京の火災を二日か晩くも三日には號外にして發行した新聞が幾つかあつたと云ふではないか。否郵便局では新聞の郵送を拒みつゝある間に丸燒けの東京の諸新聞は殆んど一の除外なく皆殆んど全く恢復せられた紙面の新聞を發行するに至つたではないか。是れは殆んど皮肉的に遅鈍敏活の兩極端を我々に例示して呉れたものと云ふ可きである。但し餘り敏活すぎて鮮人云々の浮説を大げさに宣傳したり、特別大號外を發行した新聞のあつたと噂のあるのは、誠に閉口千萬の事で、而も同じ新聞が今になつて東京市民の輕舉盲動を盛んに筆誅しつゝあるのは敏活過敏終ひに健忘性に陥つたものであらう。

整理を要するものは決して單に政府の行政のみではない、官となく私となく遅鈍經濟

網が甚だ手廣く張られてある、其の網を根本的に掃蕩するのでなければならぬ。然るに若し復舊を以つて方針とするときは、此の遅鈍網は再び蜘蛛の巢の如くに張り渡されることとなり、大災の破壊の全部が永久に我々に實損となるより外はないのである。故に私は云ふ、復興經濟の最悪の方法は復舊と云ふことであると。

六

行政機關の組み立てに就て、私共が痛切に感じて居ることは、今の府縣の數の餘りに多いことである。殊に此度の罹災地たる東京と神奈川とが別々の府縣である爲めに、何の位災後救濟の事業を妨げたか分らぬ。恐らく復興に就て最大の障碍となるものは、東京府神奈川縣の分立之れであらう。此の一府一縣は、此度の火災によつて全く一つとなつて仕舞つた。殊に横濱が全滅した今日、神奈川縣廳などの今に存して居る事は殆んど滑稽に近い。教育機關なども左様である。専門學校や大學などの分合す可きもの、左様したるが遙に教育の効果を増し得可きものが澤山にある。政府は燒失諸學校を唯復舊一